

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第229集

周防畑遺跡群

大豆田遺跡Ⅳ

長野県佐久市長土呂 大豆田遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2015. 3

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第229集

周防畑遺跡群

大豆田遺跡Ⅳ

長野県佐久市長土呂 大豆田遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2015. 3

佐久市教育委員会



●
U3

●
U7



U11



U4



M9 玉類



人面土製品 Gr(VII・IX区)



緑釉盤
Gr(X VII-16)



軒丸瓦
M55

例 言

1. 本書は佐久市が行う佐久平浅間小学校建設に伴う発掘調査報告書である。

2. 調査原因者 佐久市教育委員会（教育施設課）

3. 調査主体者 佐久市教育委員会

4. 調査地点 佐久市長土呂1613-1 外

5. 遺跡名及び期間と面積 大豆田遺跡IV (NSOIV) 15,132㎡
平成24年 4月 5日～平成24年11月21日（現場作業）
平成24年11月22日～平成27年 3月31日（整理作業）

6. 発掘調査担当者 富沢一明 上原 学 久保浩一郎

7. 本書の整理作業は富沢が行い、石材鑑定は羽毛田が行った。原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集・執筆を富沢が行った。

なお、陶磁器類は（財）長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、骨鑑定については、山梨県立博物館 植月 学氏に、中部横断道関連調査については（財）長野県埋蔵文化財センター 廣瀬昭弘氏、上田 真氏、柳澤 亮氏にご教示をいただいた。また、レプリカ調査では首都大学東京大学院 遠藤英子氏に玉積をいただきレプリカ調査の実施にあたっては明治大学古代学研究所にご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

8. 本遺跡の委託業務は以下の通りである。

基準点測量・設定	株式会社 浅間測量
ラジコン写真撮影	池田測量設計 有限会社
遺構測量・編集システム貸借	株式会社 共栄測量設計社 (H24)
	株式会社 バスカル (H25.26)
種子・樹種鑑定	パリオ・サーヴェイ 株式会社

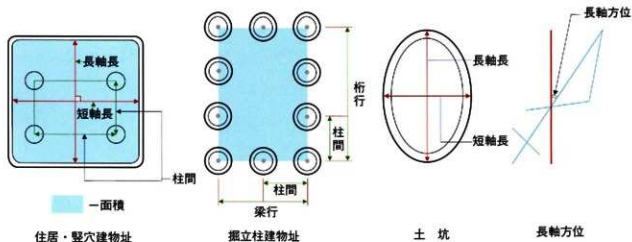
9. 本書に掲載した出土遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。



調査区を北より望む。右側より奥に伸びる中部横断道と交差する長野新幹線。奥の山並みは蓼科山麓

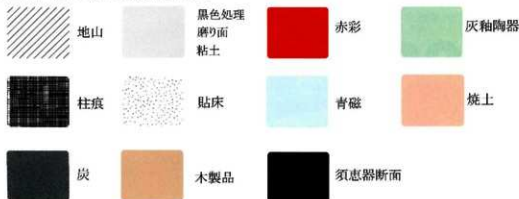
凡 例

1. 遺構の略記号は堅穴住居址-H、堅穴建物址-Ta、掘立柱建物址-F、土坑-D、溝状遺構-M、ピット-P、遺物集中区-Uである。
2. 挿図の縮尺は遺構1/80、遺物で土器・石器1/4、金属製品1/2を基本とする。
それ以外のものは挿図中にスケールを記載した。
3. 遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記した。
4. 土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。()は推定値、< >は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は8×8mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



- ・遺構計測表中の()は推定値、< >は残存値。数値単位はmと㎡であり、その他は表中に記載した。
- ・また、出土遺物の欄に記載された遺物は図示したもの以外の小片遺物で種別の解るものを掲載した。
- ・遺構深度は数値の範囲を示しているもの以外は平均値である。
- ・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が1割を超えたものを長方形とした。
- ・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

8. 挿図における網掛けは以下を示す。



目次

養瀬カラー図版

列言

F.例

第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	5

第III章 調査の方法

第1節 調査の方法	8
第2節 基本順序	10
第3節 検出遺構・遺物の要要	10

第IV章 調査の成果

第1節 竪穴住居址	
(1) H1号住居址	13
(2) H2号住居址	15
(3) H3号住居址	19
(4) H4号住居址	21
(5) H6号住居址	21
(6) H8号住居址	22
(7) H9号住居址	25
(8) H10号住居址	27
(9) H11号住居址	27
(10) H12号住居址	28
(11) H13号住居址	32
(12) H14号住居址	35
(13) H15号住居址	35
(14) H16号住居址	35
(15) H17号住居址	37
(16) H18号住居址	38
(17) H19号住居址	40
(18) H20号住居址	41
(19) H21号住居址	42
(20) H22号住居址	44
(21) H23号住居址	44
(22) H24号住居址	47
(23) H25号住居址	49
(24) H26号住居址	50
(25) H27号住居址	53
(26) H30号住居址	55

第2節 竪穴状遺構

(1) Ta1号竪穴状遺構	56
(2) Ta2号竪穴状遺構	57
(3) Ta3号竪穴状遺構	58

第3節 竪立柱建物址

(1) F1号竪立柱建物址	60
(2) F2号竪立柱建物址	60
(3) F3号竪立柱建物址	60
(4) F4号竪立柱建物址	61
(5) F5号竪立柱建物址	63
(6) F6号竪立柱建物址	63
(7) F7号竪立柱建物址	64
(8) F8号竪立柱建物址	64
(9) F9号竪立柱建物址	64
(10) F10号竪立柱建物址	66
(11) F11号竪立柱建物址	66
(12) F12号竪立柱建物址	67
(13) F13号竪立柱建物址	68
(14) F14号竪立柱建物址	68
(15) F15号竪立柱建物址	68
(16) F16号竪立柱建物址	68
(17) F17号竪立柱建物址	70
(18) F18号竪立柱建物址	70
(19) F19号竪立柱建物址	70
(20) F20号竪立柱建物址	71
(21) F21号竪立柱建物址	71
(22) F22号竪立柱建物址	71
(23) F23号竪立柱建物址	73
(24) F24号竪立柱建物址	75
(25) F25号竪立柱建物址	75
(26) F26号竪立柱建物址	75
(27) F27号竪立柱建物址	77
(28) F28号竪立柱建物址	77
(29) F29号竪立柱建物址	78
(30) F30号竪立柱建物址	78
(31) F31号竪立柱建物址	78
(32) F32号竪立柱建物址	78
(33) F33号竪立柱建物址	78

目次

第4節 土坑

(1) D89号土坑	79
(2) D143号土坑	79
(3) D3号土坑	81
(4) D48号土坑	83
(5) D65・66号土坑	84
(6) D20・23号土坑	90
(7) D93号土坑	97
(8) D90～92・144・145号土坑	98
(9) D6号土坑	99
(10) D8号土坑	99
(11) D40号土坑	100
(12) D9号土坑	101
(13) D63号土坑	103
(14) D5・54・55・57・71・95号土坑	103

第5節 溝状遺構

(1) M6号溝状遺構	109
(2) M22・23号溝状遺構	110
(3) M7号溝状遺構	110
(4) M8・9・10号溝状遺構	115
(5) M16・26号溝状遺構	119
(6) M25号溝状遺構	120
(7) M42(69)・47(51)号溝状遺構	120
(8) M65号溝状遺構	126
(9) M66号溝状遺構	126
(10) M1・2号溝状遺構	129
(11) M49(52・64)号溝状遺構	131
(12) M27・28・29号溝状遺構	131
(13) M17(33)・18・19・ 67・72号溝状遺構	136
(14) 近世以降の溝状遺構	141

第6節 ビット・杭列状遺構

(1) 単独ビット	150
(2) 1号杭列状遺構	163

第7節 遺物集中区

(1) U1・2・3・8遺物集中区	164
(2) U4・5遺物集中区	169
(3) U6遺物集中区	173
(4) U7・9遺物集中区	176
(5) U11遺物集中区	176

第8節 遺構外出土遺物

194

第V章 科学分析

第1節 種属・表種鑑定	201
第2節 大豆田遺跡IV出土壺形土器 残存圧痕のレプリカ法調査	215
第3節 大豆田遺跡IVから出土した 動物遺体	219

第VI章 調査の総括

第1節 大豆田遺跡IVとその周辺地域 の時代的概観	226
第2節 弥生後期の縄文施文土器 について	230

遺構計測表 234～244

写真図版目次

航空写真	図版	1～2
遺構写真	図版	3～65
遺物写真	図版	66～102

挿図目次

第1図 大豆田遺跡IV位置図
第2図 佐久市地質図
第3図 周辺遺跡位置図
第4図 調査遺跡位置図
第5図 大豆田遺跡IVグリッド図
第6図 大豆田遺跡IV調査全体図
第7図 H1号住居址実測図
第8図 H1号住居址カマド及び出土遺物実測図
第9図 H2号住居址実測図
第10図 H2号住居址出土遺物実測図(1)
第11図 H2号住居址出土遺物実測図(2)
第12図 H2号住居址出土遺物実測図(3)
第13図 H3号住居址実測図
第14図 H4号住居址及び出土遺物実測図
第15図 H6号住居址(掘り方)実測図
第16図 H8号住居址実測図
第17図 H8号住居址出土遺物実測図
第18図 H9号住居址実測図
第19図 H9号住居址出土遺物実測図
第20図 H10号住居址及び出土遺物実測図

挿図目次

- 第21図 H11号住居址出土遺物実測図
第22図 H12号住居址実測図
第23図 H11号住居址実測図
第24図 H13号住居址実測図
第25図 H13号住居址出土遺物実測図
第26図 H14号住居址実測図
第27図 H15号住居址実測図
第28図 H16号住居址及び出土遺物実測図
第29図 H17号住居址実測図
第30図 H17号住居址出土遺物実測図
第31図 H18号住居址実測図
第32図 H18号住居址出土遺物実測図
第33図 H19号住居址及び出土遺物実測図
第34図 H20号住居址実測図
第35図 H21号住居址実測図
第36図 H21号住居址出土遺物実測図
第37図 H22号住居址実測図
第38図 H22号住居址出土遺物実測図
第39図 H23号住居址実測図
第40図 H23号住居址出土遺物実測図
第41図 H24号住居址出土遺物実測図
第42図 H24号住居址実測図
第43図 H25号住居址実測図
第44図 H25号住居址出土遺物実測図
第45図 H26号住居址実測図
第46図 H26号住居址出土遺物実測図
第47図 H27号住居址実測図
第48図 H27号住居址出土遺物実測図
第49図 H30号住居址実測図
第50図 Ta1号竪穴状遺構及び出土遺物実測図
第51図 Ta2号竪穴状遺構実測図
第52図 Ta2号竪穴状遺構出土遺物実測図
第53図 Ta3号竪穴状遺構及び出土遺物実測図
第54図 F1号掘立柱建物址実測図
第55図 F2号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第56図 F3号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第57図 F4・6号掘立柱建物址実測図
第58図 F5号掘立柱建物址実測図
第59図 F7・8・11・14号掘立柱建物址実測図
第60図 F9・10号掘立柱建物址実測図
第61図 F12・13号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第62図 F15・16号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第63図 F17・19・21号掘立柱建物址実測図
第64図 F18号掘立柱建物址実測図
第65図 F20号掘立柱建物址実測図
第66図 F22・23・24号掘立柱建物址実測図
第67図 F25・26号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第68図 F27・28号掘立柱建物址及び出土遺物実測図
第69図 F29・32号掘立柱建物址実測図
第70図 F30・31号掘立柱建物址実測図
第71図 F33号掘立柱建物址実測図
第72図 D89・143号土坑実測図
第73図 D3号土坑及び出土遺物実測図
第74図 D3号土坑出土遺物実測図
第75図 D7・21・22・43・44・45・47～52・55・56号土坑実測図
第76図 D21・22・48・49号土坑出土遺物実測図
第77図 D50～52・55・56号土坑出土遺物実測図
第78図 D73・74・82・83・85号土坑及び出土遺物実測図
第79図 D87・88・98・99・100・102～104・109号土坑及び出土遺物実測図
第80図 D105・106・113・136・146号土坑実測図
第81図 D20・23号土坑実測図
第82図 D20号土坑出土遺物実測図(1)
第83図 D20・23号土坑出土遺物実測図
第84図 D20号土坑出土遺物実測図(2)
第85図 D1・2・14～19・24号土坑及び出土遺物実測図
第86図 D26・28～35号土坑及び出土遺物実測図
第87図 D42・46・67～69・72・80・81・84・96・97・108号土坑及び出土遺物実測図
第88図 D93・94号土坑及び出土遺物実測図
第89図 D90～92・144・145号土坑実測図
第90図 D6・8・40号土坑及び出土遺物実測図
第91図 D9号土坑出土遺物実測図
第92図 D9号土坑実測図
第93図 D63号土坑及び出土遺物実測図
第94図 D5・54・55・57・71・95号土坑実測図
第95図 D57・71・95号土坑出土遺物実測図
第96図 D4・10・13・53・56・59・60・62・64・79・86号土坑及び出土遺物実測図
第97図 D36～39・41・11・12・61・70・77・78・101・107・110・111号土坑実測図
第98図 D112～117・119～124・128～130号土坑実測図
第99図 D25・131～135・137～142号土坑実測図
第100図 M6・22・23号溝状遺構出土遺物実測図
第101図 M6・22・23・87号溝状遺構実測図

挿図目次2

- 第102図 M7-11・45・46・80号溝状遺構実測図
 第103図 M8-9号溝状遺構出土遺物実測図
 第104図 M8-9-10号溝状遺構実測図
 第105図 M10号溝状遺構出土遺物実測図(1)
 第106図 M10号溝状遺構出土遺物実測図(2)
 第107図 M16-24・26・34・35・40・43号溝状遺構実測図
 第108図 M25・39(75)号溝状遺構実測図
 第109図 M41・48・63・71・73・75・77・78号溝状遺構実測図
 第110図 M42(69)・47(51)・65号溝状遺構実測図
 第111図 M66-74号溝状遺構実測図
 第112図 M25・26・35・41・48・47(51)・77号溝状遺構遺物実測図
 第113図 M42(69)・65-74号溝状遺構出土遺物実測図
 第114図 M1・2・49(52・64)号溝状遺構出土遺物実測図
 第115図 M1・2・49(52・64)号溝状遺構実測図
 第116図 M27号溝状遺構出土遺物実測図
 第117図 M15-27～29・37・54・91号溝状遺構実測図
 第118図 M27-29-91号溝状遺構出土遺物実測図
 第119図 M17(33)・18-19・67-72号溝状遺構実測図
 第120図 M17(33)・18-67号溝状遺構出土遺物実測図
 第121図 M13(14)号溝状遺構出土遺物実測図
 第122図 M12号溝状遺構出土遺物実測図
 第123図 M12(55)号溝状遺構出土遺物実測図
 第124図 M12(55)・20号溝状遺構出土遺物実測図
 第125図 M30～32・36(69)・67・62・5・79号溝状遺構出土遺物実測図
 第126図 ビット平面図(1)及び出土遺物実測図
 第127図 ビット平面図(2)
 第128図 ビット平面図(3)
 第129図 1号坑列状遺構実測図
 第130図 U3遺物集中区出土遺物実測図(1)
 第131図 U1-2・3-8遺物集中区接合関係図及び種別図
 第132図 U3遺物集中区出土遺物実測図(2)
 第133図 U3遺物集中区出土遺物実測図(3)
 第134図 U2・3-8遺物集中区出土遺物実測図
 第135図 U4・6遺物集中区出土遺物実測図
 第136図 U4-6遺物集中区接合関係図及び種別図
 第137図 U6遺物集中区接合関係図
 第138図 U6遺物集中区出土遺物実測図(1)
 第139図 U6遺物集中区出土遺物実測図(2)
 第140図 U6遺物集中区出土遺物実測図(3)
 第141図 U6遺物集中区出土遺物実測図(4)
 第142図 U7-9遺物集中区接合関係図及び種別図
 第143図 U7遺物集中区出土遺物実測図

- 第144図 U7-9遺物集中区出土遺物実測図
 第145図 U11遺物集中区接合関係図及び種別図
 第146図 U11遺物集中区出土遺物実測図(1)
 第147図 U11遺物集中区出土遺物実測図(2)
 第148図 U11遺物集中区出土遺物実測図(3)
 第149図 U11遺物集中区出土遺物実測図(4)
 第150図 遺構外出土遺物実測図(1)
 第151図 遺構外出土遺物実測図(2)
 第152図 遺構外出土遺物実測図(3)
 第153図 遺構外出土遺物実測図(4)

図版目次

- 図版1 ①東側調査区全景(西より)
 ②西側調査区全景(北より)
 図版2 ①北側調査区全景(西より)
 図版3 ①H1号住居址 ②H1号住居址カマド
 ③H1号住居址カマド断面 ④H1号住居址掘り方
 ⑤H1号住居址調査状況
 図版4 ①H2号住居址 ②F2号住居址伊
 ③H2号住居址掘り方 ④H2号住居址遺物出土状況
 ⑤H2号住居址遺物出土状況
 図版5 ①H3号住居址 ②H4号住居址
 ③H6号住居址
 図版6 ①H8号住居址 ②H8号住居址掘り方
 ③H8号住居址伊 ④H8号住居址遺物出土状況
 図版7 ①H9号住居址 ②H9号住居址カマド
 ③H9号住居址カマド掘り方 ④H9号住居址掘り方
 ⑤H9号住居址カマド遺物出土状況
 図版8 ①H10号住居址 ②H10号住居址掘り方
 ③H15号住居址
 図版9 ①H11号住居址 ②H11号住居址掘り方
 図版10 ①H11号住居址(第2床面)
 ②H11号住居址遺物出土状況
 ③H11号住居址遺物出土状況
 ④H11号住居址カマド
 図版11 ①H12号住居址 ②H12号住居址掘り方
 ③H19号住居址
 図版12 ①H14号住居址 ②H14号住居址掘り方
 ③H16号住居址 ④H16号住居址掘り方
 図版13 ①H13号住居址(北側) ②H13号住居址(南側)

図版目次

- 図版14 ①H13号住居址掘り方(北側) ②H13号住居址掘り方(南側)
 ③H13号住居址炉2 ④F13号住居址炉2
 ⑤調査風景 ⑥H13号住居址炉2
 ⑦H13号住居址炉1 ⑧H13号住居址炉掘り方
- 図版15 ①H17号住居址 ②H17号住居址遺物出土状況
 ③H17号住居址カマドセクション ④H17号住居址セクション
- 図版16 ①H17号住居址掘り方(北側) ②H17号住居址掘り方(南側)
- 図版17 ①H18号住居址 ②H18号住居址掘方
 ③H18号住居址遺物出土状況 ④H18号住居址炉
- 図版18 ①H20号住居址 ②H20号住居址炉掘り方
 ③H22号住居址 ④H22号住居址炉
- 図版19 ①H21号住居址 ②H21号住居址掘り方
- 図版20 ①H23号住居址 ②H23号住居址掘り方
- 図版21 ①H23号住居址第2床面 ②H23号住居址カマド
 ③H23号住居址遺物出土状況
 ④H23号住居址掘り方セクション
- 図版22 ①H24号住居址 ②H24号住居址掘り方
- 図版23 ①H24号住居址炉 ②H24号住居址炉土層断面
 ③H24号住居址遺物出土状況
 ④北沢調査区全景
- 図版24 ①H25号住居址 ②H25号住居址掘り方
 ③H25号住居址カマド ④H25号住居址遺物出土状況
 ⑤H25号住居址遺物出土状況
- 図版25 ①H26号住居址 ②H26号住居址掘り方
 ③H26号住居址遺物出土状況
 ④H26号住居址炉 ⑤H26号住居址炉掘り方
- 図版26 ①H27号住居址 ②H27号住居址カマド
 ③H27号住居址カマドセクション
 ④H30号住居址
- 図版27 ①Ta1号竪穴状遺構
 ②Ta1号竪穴状遺構遺物出土状況
 ③Ta1号竪穴状遺構遺物出土状況
 ④調査状況
- 図版28 ①Ta2号竪穴状遺構 ②Ta3号竪穴状遺構
- 図版29 ①F1号掘立柱建物址 ②F2号掘立柱建物址
 ③F3号掘立柱建物址 ④F3号掘立柱建物址航空写真
 ⑤F4号掘立柱建物址 ⑥F5号掘立柱建物址
 ⑦F6号掘立柱建物址 ⑧F7号掘立柱建物址
- 図版30 ①F8号掘立柱建物址 ②F9号掘立柱建物址
 ③F11号掘立柱建物址 ④F12号掘立柱建物址
 ⑤F13号掘立柱建物址 ⑥F14号掘立柱建物址
 ⑦F15号掘立柱建物址 ⑧F16号掘立柱建物址
- 図版31 ①F17号掘立柱建物址 ②F18号掘立柱建物址
 ③F19号掘立柱建物址 ④F20号掘立柱建物址
 ⑤F21号掘立柱建物址 ⑥F22号掘立柱建物址
 ⑦F24号掘立柱建物址 ⑧F25号掘立柱建物址
- 図版32 ①F26号掘立柱建物址 ②F27号掘立柱建物址
 ③F28号掘立柱建物址
 ④F17・18・20・27・28号掘立柱建物址(ラジコン撮影)
 ⑤F29号掘立柱建物址 ⑥F30号掘立柱建物址
 ⑦F31号掘立柱建物址 ⑧F32号掘立柱建物址
- 図版33 ①D1号土坑 ②D2号土坑
 ③D4号土坑 ④D5号土坑
 ⑤D7号土坑 ⑥D10号土坑
 ⑦D11号土坑 ⑧D12号土坑
- 図版34 ①D3号土坑 ②D3号土坑堆積状況
 ③D3号土坑遺物出土状況
 ④D3号土坑赤沼状況
 ⑤D3号土坑藍積換出状況
- 図版35 ①D6号土坑 ②D6号土坑木製品出土状況
 ③D8号土坑井戸枠出土状況
 ④D8号土坑 ⑤D8号土坑
- 図版36 ①D9号土坑 ②D9号土坑木製品出土状況
 ③D9号土坑井戸枠出土状況
 ④D9号土坑井戸枠 ⑤遺構測量
- 図版37 ①D13号土坑 ②D14号土坑
 ③D15号土坑 ④D16号土坑
 ⑤D17号土坑 ⑥D18号土坑
 ⑦D19号土坑 ⑧D21号土坑
- 図版38 ①D20号土坑 ②D20号土坑堆積状況
 ③D20号土坑遺物出土状況
 ④D20号土坑骸骨出土状況
- 図版39 ①D22号土坑 ②D23号土坑
 ③D24号土坑 ④D26号土坑
 ⑤D28号土坑 ⑥D29号土坑
 ⑦D30号土坑 ⑧D31号土坑
- 図版40 ①D32号土坑 ②D33号土坑
 ③D35号土坑 ④D37号土坑
 ⑤D38号土坑 ⑥D39号土坑
 ⑦D41・42号土坑 ⑧D43・44号土坑
- 図版41 ①D40号土坑 ②D40号土坑井戸枠出土状況
- 図版42 ①D46号土坑 ②D46号土坑
 ③D47号土坑 ④D49号土坑
 ⑤D48号土坑 ⑥D48号土坑遺物出土状況
 ⑦D50号土坑 ⑧D50号土坑遺物出土状況

图版目次

- 图版43 ①D51号土坑 ②D51号土坑遺物出土状况
③D52号土坑 ④D53号土坑
⑤D54号土坑 ⑥D56号土坑
⑦D59号土坑 ⑧D60号土坑
- 图版44 ①D65号土坑 ②D57号土坑
- 图版45 ①D63号土坑并严桦 ②D63号土坑
- 图版46 ①D63号土坑并严桦(石椁出土状况)
②D63号土坑并严桦
- 图版47 ①D61号土坑 ②D62号土坑
③D64号土坑 ④D65号土坑
⑤D66号土坑 ⑥D67号土坑
⑦D68号土坑 ⑧D69号土坑
- 图版48 ①D78号土坑 ②D72号土坑
③D71号土坑 ④D71号土坑繼出土状况
⑤D73号土坑 ⑥D74号土坑
⑦D77号土坑 ⑧D79号土坑
- 图版49 ①D80号土坑 ②D81号土坑
③D82号土坑 ④D83号土坑
⑤D84号土坑 ⑥D86号土坑
⑦D86号土坑 ⑧D85号土坑遺物出土状况
- 图版50 ①D87号土坑 ②D88号土坑
③D89号土坑 ④D90号土坑
⑤D91号土坑 ⑥D92号土坑
⑦D93号土坑 ⑧D94号土坑
- 图版51 ①D95号土坑 ②D96号土坑
③D98号土坑 ④D99号土坑
⑤D100号土坑 ⑥D101号土坑
⑦D102号土坑 ⑧D103号土坑
- 图版52 ①D104号土坑 ②D104号土坑遺物出土状况
③D105号土坑 ④D106号土坑
⑤D107号土坑 ⑥D109号土坑
⑦D110号土坑 ⑧D111号土坑
- 图版53 ①D112号土坑 ②D113号土坑
③D114号土坑 ④D115号土坑
⑤D116号土坑 ⑥D117号土坑
⑦D118号土坑 ⑧D119号土坑
- 图版54 ①D120号土坑 ②D121号土坑
③D122号土坑 ④D123号土坑
⑤D124号土坑 ⑥D128号土坑
⑦D130号土坑 ⑧D131号土坑
- 图版55 ①D132号土坑 ②D133号土坑
③D134号土坑 ④D135号土坑
⑤D136号土坑 ⑥D137号土坑
⑦D138号土坑 ⑧D139号土坑
- 图版56 ①D140号土坑 ②D141号土坑
③D142号土坑 ④D143号土坑
⑤D144号土坑 ⑥D145号土坑
⑦D146号土坑遺物出土状况 ⑧D146号土坑
- 图版57 ①M1·2号溝状遺構 ②M7号溝状遺構
③M6号溝状遺構 ④M6号溝状遺構土層断面
⑤M8~10号溝状遺構 ⑥M6~10号溝状遺構
⑦M12~19号溝状遺構⑧M12~17(33)号溝状遺構
- 图版58 ①M22·23号溝状遺構 ②M11号溝状遺構
③M22·23号溝状遺構土層断面
④M22·23号溝状遺構内土坑
- 图版59 ①M18~67号溝状遺構
②M18~67号溝状遺構土層断面(北側)
③M18~67号溝状遺構土層断面(南側)
④M26号溝状遺構(南側) ⑤M26号溝状遺構
⑥M25号溝状遺構(北側) ⑦、⑧M27号溝状遺構
⑨M31·32号溝状遺構 ⑩M34号溝状遺構
⑪M37·38·91号溝状遺構 ⑫M35号溝状遺構
- 图版60 ①M42号溝状遺構 ②M39号溝状遺構
③調查風景 ④M36号溝状遺構
⑤M48号溝状遺構 ⑥M49号溝状遺構
⑦M47号溝状遺構 ⑧M42·47·49号溝状遺構
⑨M49(52·64)号溝状遺構⑩M12(55)·57号溝状遺構
⑪M36(58)号溝状遺構 ⑫M30(60)号溝状遺構
- 图版61 ①M49·65号溝状遺構②M49(52·64)·65号溝状遺構
③、④、⑤M65号溝状遺構遺物出土状况
- 图版62 ①M36(59)号溝状遺構 ②M63号溝状遺構
③M61号溝状遺構 ④M68号溝状遺構
⑤M71号溝状遺構 ⑥M77号溝状遺構
⑦M66号溝状遺構 ⑧M73·74号溝状遺構
⑨M70号溝状遺構 ⑩M81号溝状遺構
⑪1号坑列状遺構
- 图版63 ①、②、③U3遺物集中区
④、⑤U2遺物集中区 ⑥~⑧U4遺物集中区
⑨~⑬U7遺物集中区 ⑭~⑯U11遺物集中区
- 图版64~65 U6遺物集中区
- 图版66~95 出土土器·石器·金屬製品·土製品
- 图版96~102 出土木製品

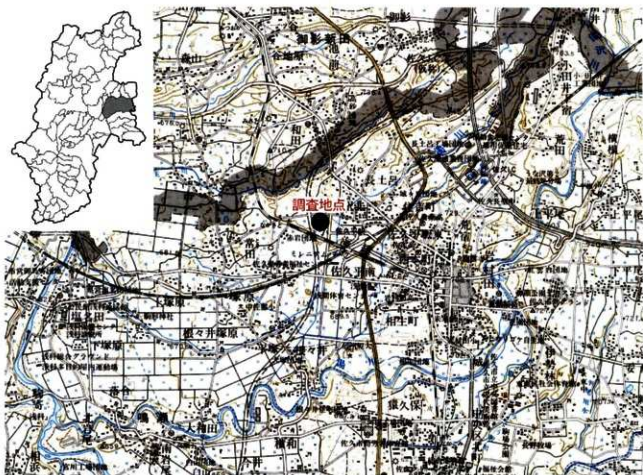
第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

今回調査を行った大豆田遺跡Ⅳは周防畑遺跡群の南端部分に所在し、標高700mを僅かに越える台地先端に位置する。調査地点の地形はいわゆる「田切地形」が消滅し沖積低地へと続く南傾斜である。遺跡周辺では田切地形を扶んで西に接する台地上で近年「中部横断自動車道」が建設され、それに伴う埋蔵文化財発掘調査により、国内最大級の弥生時代後期の堅穴住居址や古代律令期の銅印が発見された西近津遺跡群や本遺跡の南西側低地を調査した周防畑遺跡群があり、円形周溝墓等が調査されている。

今回調査された遺跡周辺は、平成9年に開業した長野新幹線佐久平駅の周辺部開発が進み、また国道141号の整備と伴に区画整理等がなされ急激な商業地化と人口の増加が起きている。この為、地域内の岩村小学校でマンモス校化と通学区の広域化が問題となっていた。これらの問題解決の為、新幹線駅北西部に新小学校の建設が佐久市教育委員会により計画された。

平成23年9月に佐久市教育施設課より文化財保護法94条が佐久市教育委員会に通知され、当該地の試掘調査が行われた。結果、予定地内から堅穴住居址等が発見され、周辺部の調査事例より計画地全体に遺跡が広がる事が予想された。試掘調査の結果を受け保護協議がなされ、工事による遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなり、佐久市文化財課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 大豆田遺跡Ⅳ位置図 (1/50000)

第2節 調査体制

平成24～26年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	土屋 盛大 (H26.5月退任)				
			構澤 晴樹 (H26.5月着任)				
事務局	社会教育部長	伊藤 明弘 (H24)					
		矢野 光宏 (H25)					
		山浦 俊彦 (H26)					
	文化財課長	吉澤 隆 (H24)					
		三石 宗一 (H25.26)					
	文化財調査係長	三石 宗一 (H24)					
		比田井清美 (H25.26)					
	文化財調査係	須藤 隆司 (H24.25)	小林 眞寿	羽毛田卓也 (H24)			
		富沢 一明	上原 学	久保浩一郎	神津 一明		
		嘱託職員	林 幸彦				
調査担当	富沢 一明	上原 学	久保浩一郎				
主任調査員	佐々木宗昭	森泉かよ子					
調査員	赤羽根 篤	赤羽根充江	浅沼 勝男	浅沼ノブ江	阿部 和人		
	安藤 孝司	上原美千代	飯塚 一男	飯森 成英	磯貝 律子		
	市川 光吉	浅見 孝子	岩崎 重子	岩松 茂年	碓氷 知子		
	白田 絢佳	江原 富子	小幡 弘子	風間 敏	柏木 義雄		
	加藤ひろ美	河原田三男	木内 勇	木内 修一	菊池 喜重		
	小井戸秀元	神津 和子	神津 千春	神津 僚平	小島 真		
	小林 妙子	小林 節子	小林 千勝	小林百合子	小山 功		
	堺 益子	坂井 一夫	里見 理生	澤井 知春	清水 澄生		
	清水 律子	副島 充子	高橋 章	滝沢 三男	田中ひさ子		
	土屋 邦子	土屋 武士	中澤 登	中嶋フクジ	中条 勝良		
	中山 清美	羽毛田利明	橋詰 勝子	橋詰 信子	林 まゆみ		
	比田井久美子	日向 昭次	広瀬梨恵子	細萱ミスズ	細谷 秀子		
	堀籠 保子	武者 幸彦	柳沢亜矢子	柳澤 孝子	横尾 敏雄		
	吉田 信行	依田 三男	依田 好行	渡辺 長子	渡辺 広野		
	渡辺 学						



平成24年秋・現場にて

第3節 調査日誌

平成23年度

平成23年

- 9月6日 佐久市より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（保護法94条第1項）
- 9月8日 長野県教育委員会教育長に23佐教文財第125-2号にて副申。
- 9月16日 長野県教育委員会教育長より23教文第8-119号にて通知。

平成24年

- 2月20日～3月23日 市教育委員会文化財課により試掘調査

平成24年度

- 4月5日 教育施設課より埋蔵文化財発掘調査の実施についての依頼。
- 4月19日 周防畑遺跡群 大豆田遺跡Ⅳとして発掘調査開始。
- 5月11日 測量支援システム運用開始
- 6月5日 第1回ラジコン撮影
- 6月6日 遺物集中区より翡翠勾玉出土
- 7月11日 D20土坑完掘
遺物集中区より管玉出土
- 8月2・3日 少年考古学教室開催
- 8月30日 第2回ラジコン撮影
- 9月10日 M55号溝状遺構から軒丸瓦が出土
- 9月24日 D63号土坑から木枠が出土
- 10月31日 第3回ラジコン撮影
- 11月1日 調査区北側の黒色土下検出作業
- 11月2日 調査区西側の弥生住居址群調査終了
- 11月19日 機材撤収を行い現場作業を終了する。
- 12月～3月 室内作業を行う

平成25年度

- 4月5日～ 教育施設課より調査依頼
室内作業を開始する。
- 5月9日 遺構編集システムによる整理開始
- 6月12日 骨鑑定を山梨県立歴史博物館に依頼する。
- 9月30日 科学分析を依頼する。

平成26年

- 2月5日 陶磁器鑑定を長野県埋蔵文化財センターに依頼する。

平成26年度

- 4月15日 報告書の作成を開始
遺物写真撮影、版下作成、原稿執筆を行う。
- 10月27日 報告書原稿入稿

平成27年

- 3月31日 報告書を刊行し全ての作業を終了する。



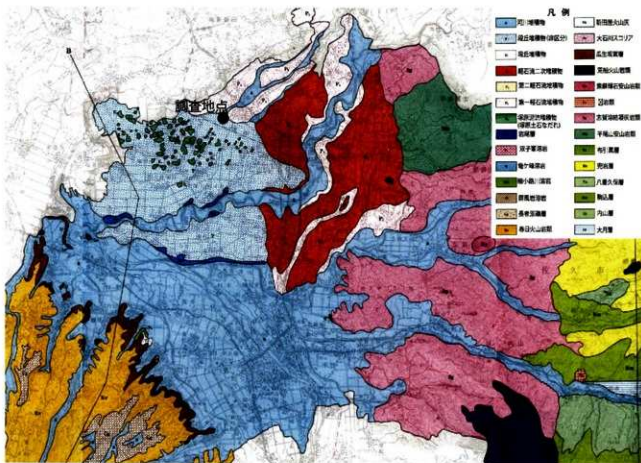
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

佐久地域は、周辺を山地や台地に囲まれた盆地状を呈する。標高は700m前後であり、夏涼しく、冬寒し高原性の気候を特徴とする。北には現在も噴煙を上げる浅間山が聳え、南には蓼科連峰が東西に連なる。東は関東山地が南北に連なり、群馬県との境をなしている。西には隆起地形である御牧ヶ原・八重原台地が広がっている。佐久盆地の中央には甲武信岳の山麓に水源を持つ千曲川が蓼科連峰や関東山地から流れ出た中小河川を集めて北流している。

このように、佐久盆地は周囲を山々に囲まれ幾多の河川に潤された大地が広がるが、地質学的にみると南北に大きく二分することができる。境界は関東山地より流れ出て、盆地のほぼ中央を西に流れる滑津川付近であり、滑津川と千曲川が合流する付近では北部地域との比高差は20m内外を示す。ここを境として北部地域は浅間山から広がる山麓が緩やかに傾斜する地形で、浅間山の噴火によって堆積した火砕流や火山灰により形成された台地が広がっている。この台地は雨水等の浸食に弱く、浅間山の麓から放射状に幾筋ものいわゆる「田切り」と呼ばれる谷が伸び、切り立った崖により台地を細長く分断している。これとは対照的に、南部地域は千曲川の氾濫原とする沖積地や滑津川や志賀川といった中小河川により形成された谷口扇状地が広がっている。このため、地表下は河床礫層と沖積粘土層が広がり、現在では佐久地域の穀倉地帯となっている。

今回の調査地点は北部地域に広がる田切りに挟まれた台地が終わる末端部分に位置し、塚原土石なだれを埋めるように堆積した第一軽石流(P1)やその二次堆積土が調査区全体に広がっている。



第2図 佐久市地質図 (佐久市志 自然編より 一部改編)

第2節 歴史的環境

今回調査した周防畑遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに付随する開発等で1980年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。本遺跡に隣接する近津遺跡群からは縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は発見されていない。本調査地点でも、縄文時代中期・後期の土器片及び土穴は検出されたが、住居址は検出されなかった。縄文期の集落が発見されるのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側であり、縄文時代に佐久平中心部の平坦地は主に狩場として利用されていたと考えられる。

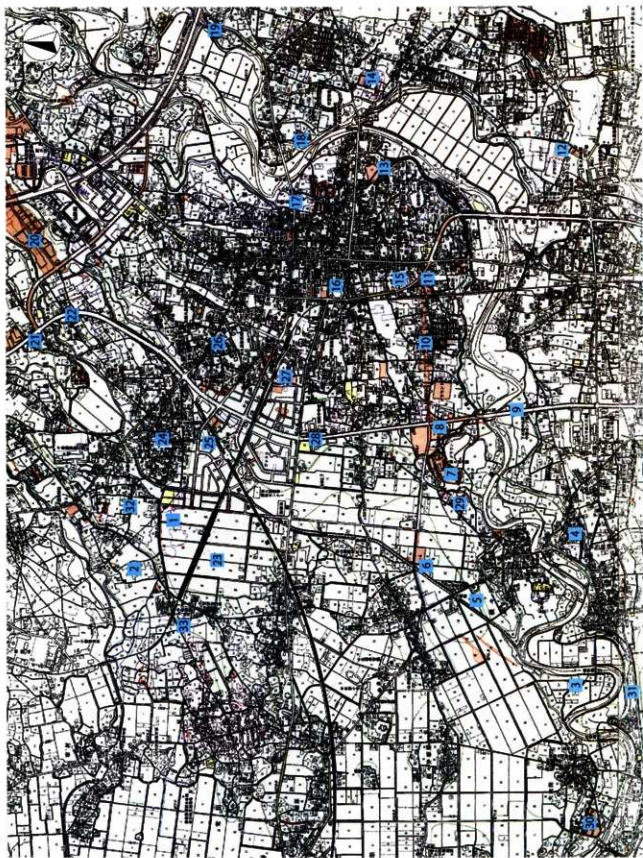
次に弥生時代では、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少なく、集落も発見されていない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑よりⅡ式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡Ⅱからは包含層からの出土であるが、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。これらの遺跡はいずれも湯川沿いに立地する遺跡であり、佐久北部においては弥生前期の人々が湯川を意識して活動していたことが解る。次に中期になると遺跡数も増え集落址が確認されるようになる。湯川沿いの下流より、川原端遺跡・森平遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相に位置づけられるのは根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになって遺跡立地は湯川沿岸を指向する傾向にあり、佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の生産或いは流通・移動等の諸々の活動において重要な要素を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該時期の遺跡からは遺構として西近津遺跡より国内で最大級となる18×9.5mの大型住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅剣15本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上聖畑遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で100軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落遷地の理由が大きく変わった。或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居址数は増すが、住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に当遺跡付近の調査事例で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代「大井郷」の核地域であろうことが推測されている。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚載』によれば「その賑わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村市田街地付近に集中し、苑池の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。



第3图 周边遗址位置图

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	周防深遠跡群	大豆田遺跡IV	長土呂		本報告書
2	近津遺跡群		長土呂字西近津・森下	竪穴住605(縄文～平安)、竪立80、土坑3、周溝溝13	臥藤亮
3	高平遺跡		横和字高平	竪穴住(弥生中期11)、周溝溝1、溝溝、溝3、配石遺構2	臥藤亮
4	宮の上遺跡群	横々井字芝宮遺跡	横々井字芝宮	竪穴住(弥生43・古墳3・平安14)、竪立5、土坑27、溝5	第99集
5	横々井大塚古墳		横々井字大塚	方形墳丘墓1	年報9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	竪穴住(弥生後期11)、周溝溝1、溝溝、土坑7、溝6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	竪穴住(弥生中期91・弥生後期38・古墳中期20)	
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡Ⅱ・Ⅳ	岩村田字西一本柳	竪穴住201(弥生～平安)、竪立46、土坑12、溝11	第72集
		西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田字上樋田	竪穴住(弥生中期3・弥生後期1・古墳後期2・奈良1)、溝	第91集
		西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期7・後期2・古墳後期6・奈・平1)、竪立5、土坑8、溝6	年報8
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期9・弥生後期7・古墳中期6・古墳後期42・奈良16・平安9・不明2)、竪立30、土坑31、溝13	第109集
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田字西一本柳	竪穴住(古墳後期16・奈良1・平安2・竪穴2)、竪立9、土坑12	第113集
		西一本柳遺跡Ⅸ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期54・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、竪立14、土坑19、溝14	年報14
		西一本柳遺跡ⅩⅠ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期1・弥生後期1)、溝	年報13
		西一本柳遺跡ⅩⅡ	岩村田字下樋田	竪穴住(古墳後期5・奈良1・竪穴遺構6)、竪立2	第125集
		西一本柳遺跡ⅩⅢ	岩村田字下樋田	竪穴住(弥生中期13・弥生後期9・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、竪立5	第139集
		西一本柳遺跡ⅩⅣ	岩村田字上樋田	竪穴住(弥生中期17・後期17・古墳中期3・後期7・奈・平1)、竪立10、土坑16、溝13	第175集
西一本柳遺跡ⅩⅤ	岩村田字青木上	竪穴住(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈・平6)、竪立3、土坑5	第154集		
西一本柳遺跡ⅩⅥ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期12・後期1・古墳後期4・奈良1)、竪立6、溝3	第160集		
西一本柳遺跡ⅩⅦ	岩村田字西一本柳	竪穴住(弥生中期1・後期2・奈良2)、溝	第169集		
9	寺深遺跡群	伴田遺跡	猿久保字伴田	竪穴住(古墳中期4・後期6・奈良10・平安6)、竪立11、土坑6、H15より花弁双雄八毛織出土	第66集
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡Ⅲ	岩村田字北一本	竪穴住4、土壇墓1、溝2	年報14
		北一本柳遺跡Ⅳ	岩村田字北一本	竪穴住(弥生後期48・古墳後期11・中世37)、竪立13、土坑310、溝32	第175集
		北一本柳遺跡Ⅴ	岩村田字北一本	竪穴住3、溝2	第184集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡Ⅱ	岩村田字東大門先	竪穴住(古墳後期2・奈良・平安16)、竪立21、土坑9、溝10	第175集
12	野馬塚遺跡群	野馬塚遺跡Ⅱ・Ⅲ	猿久保字野馬塚	竪穴住1、竪穴遺構17、竪立13、土坑234	第170集
13	下信濃石遺跡	下信濃石遺跡	岩村田字仁王前	寺院関連1、竪穴遺構10、土坑47 古瀬戸灰軸木簡出土	第134集
14	蛇塚古墳		安原字蛇塚	後原古墳3基、竪穴住3、竪立1	第78集
15	岩村田遺跡群	観音堂遺跡	岩村田字観音堂	竪穴住(平安1・中世27)、土坑170、土壇墓4、竪立1	第70集
16	岩村田遺跡群	柳立遺跡	岩村田字柳立	竪穴住(弥生後期2・平安1・中世33)、竪立2、土坑203、周溝溝3、池	第85集
17	大井城址		岩村田字古城	竪穴住(古墳後期15・中世64)、竪立3、土坑285	
18	下小平遺跡		岩村田字下小平	竪穴住(弥生後期5・古墳後期1)、方形周溝溝2	
19	柳巻遺跡		上平尾字柳巻	竪穴住(弥生後期1・古墳前期4・平安2)、溝4	
20	長土呂遺跡群	壱原遺跡	長土呂字壱原	竪穴住(古墳後期135・奈良平安663)、竪立860、土坑370、溝40	第103集一
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下芝宮	竪穴住(古墳中期5・後期2・平安2)、竪立5	第99集
22	長土呂遺跡群	下敷遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下敷	竪穴住(弥生後期4・古墳中期13・後期25・奈良1・平安16)、竪立18	第99集
23	周防深遠跡群		長土呂	竪穴住92(弥生～平安)、竪立29、内形周溝溝15、土坑422	臥藤亮
24	長土呂遺跡群	長土呂無址	長土呂	中世館址	
25	長土呂遺跡群	下前留遺跡	長土呂字下前留	竪穴住(弥生後期489)、溝、溝溝	第110集
26	松尾坂遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	竪穴住(弥生後期2)、溝網	年報6
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生中期2・弥生後期1・古墳後期2・平安2)、竪立1、古墳1、土坑8	第53集
		円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊	竪穴住(古墳中期7・後期23・平安4)、方形・内形周溝溝10	第102集
		円正坊遺跡Ⅴ	岩村田字円正坊	竪穴住37、竪立4、遺構墓1、土坑26	年報15
		円正坊遺跡Ⅶ	岩村田字円正坊	竪穴住(弥生～平安44)、竪立2、土坑11、溝3、内形周溝溝1	第185集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田字松の木	竪穴住(弥生～古墳10)、竪立2、土坑1、溝6	第91集
29	鳴矢遺跡群	五里田遺跡	横々井字五里田	竪穴住(弥生中期43)、周溝溝5、古墳址2、土坑37	第74集
30	大倉田遺跡群	川原塚遺跡	鳴瀬字川原塚	竪穴住(弥生中～後期13・古墳49)、竪立20、土坑22、溝24	第89集
31	宮塚遺跡群	宮塚遺跡	横和字宮塚	竪穴住13(弥生中期後半・古墳前期)、竪立6、土坑17	第157集
32	四辺塚遺跡群	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ他	長土呂字宮の前	竪穴住187(弥生後期～平安)、竪立50、土坑183	第198集
33	近津遺跡群	上大豆塚遺跡	長土呂上大豆塚	竪穴住2(弥生後期)	第217集



第5図 大豆田遺跡IVグリッド図

M=溝状遺構(環濠、水路、道路、堀等) Ta=中世の竪穴建物址あるいは竪穴状遺構
 U=遺物集中区

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って2分割し、半截により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は半截された区を東西南北の英語頭文字を区として取り上げた。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともにトータルステーションを用い3次元データを取得した。取得したデータは株式会社CUBICの「遺構くん」により図化した。測量基準座標はグリッド杭を用いた。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

遺構の図面修正は株式会社CUBICの「遺構くん」により行った。遺物洗浄は竹ブラシを用い手で洗い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り取蔵庫に収納した。

報告書

文章はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。また、遺物実測図は「イラストレーター」によりデジタルトレースを行い、写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿を作成し、イラストレーターでのファイル形式で入稿した。

第2節 基本層序

右に示した標準土層堆積は調査区北西かどの状態である。本調査区の土層は基本的にI～III層の圃場整備時の盛土、IV・V層の圃場前の水田耕作土、VI層以下の自然堆積土に分かれ、調査区東側の低地部分ではVI層の砂層が厚く堆積するようになる。

遺構確認面はVII層下で中世と古代の遺構が確認でき、VIII層下で弥生の遺構が確認された。

- I層 10YR6/1 褐灰色土
- II層 10YR6/2 灰黄褐色土
- III層 10YR6/1 褐灰色土
- IV層 10YR4/1 褐灰色土 水田耕作土
- V層 10YR5/1 褐灰色土 水田耕作土
- VI層 10YR7/4 にぶい黄橙色土 シルト層で砂を多く含む

- VII層 10YR4/2 灰黄褐色土 小石を含みじりじりした土。赤色粒子を含む。中世遺構の覆土
- VIII層 10YR3/2 黒褐色土 しまり弱く、粘性あり。
- IX層 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり。黒色土ブロックとロームの混合土 X層の漸移層
- X層 10YR8/6 黄橙色土 浅間第1・第2軽石流
- A層 10YR4/2 灰黄褐色土 古代遺構の覆土
- B層 10YR2/1 黒色土 弥生遺構の覆土

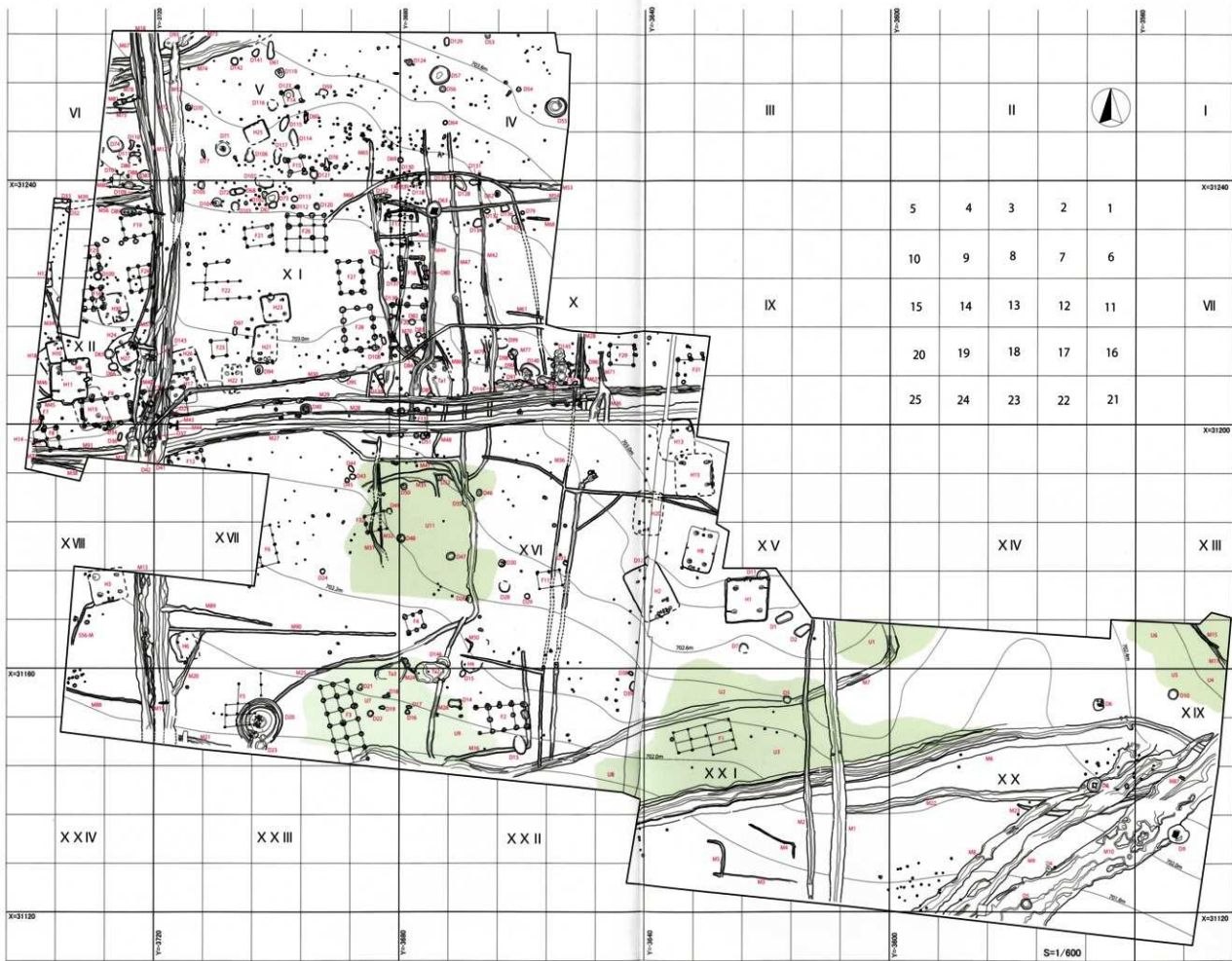


第3節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構	竪穴住居址	26軒	竪穴状遺構	3棟	掘立柱建物址	33棟	溝状遺構	76本
	土坑	139基	遺物集中区	10箇所	単独ピット			

遺物 縄文土器（中期）、弥生土器（箱清水式土器、関東系縄文施文土器）、石器類（石鎌・打製石斧・敲き石・砥石）土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、中世陶磁器類、鉄製品（鉄鎌・刀子・釘）、古銭、ガラス小玉、管玉、翡翠勾玉



第6図 大豆田遺跡IV(Nsoiv) 調査全体図

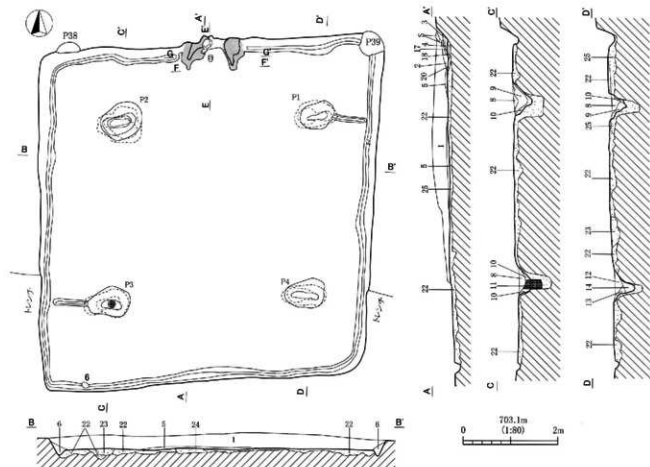
第IV章 調査の成果

第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址

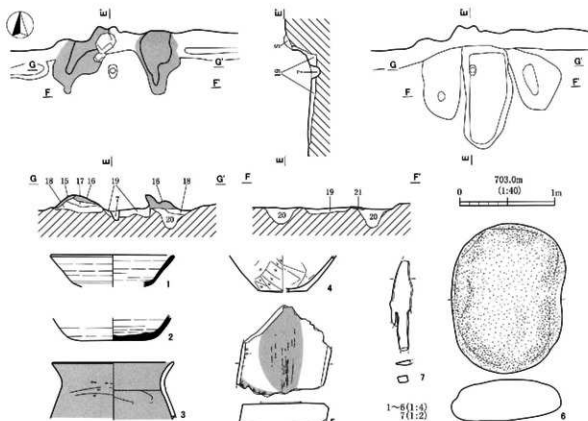
本住居址は調査区中央部のX V-18・19・23・24Grに位置する。残存状態は南側検出部分が上部を削平されている他は良好である。

形態はほぼ正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央につくられている。規模は南北の長軸で6.80m、東西の



1. 母褐色土(10YR3/3) ローム・軽石・砂・炭化物を含む。
2. 黒褐色土(7.5YR2/3) 粘土・灰・炭化物・粘土を含む。
3. 暗赤褐色土(2.5YR3/3) 粘土・灰主体。
4. 赤褐色土(2.5YR2/3) 灰主体。
5. 黒色土(7.5YR2/1) しまりあり、灰・炭化物を含む。
6. 暗褐色土(10YR3/4) ローム・炭化物を含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1) しまり強く、粘性やや強い、ローム少量含む。
8. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや弱い。
9. 黒褐色土(10YR3/1) しまり強く、粘性やや強い、φ5-10mm軽石少量含む。
10. 黒褐色土(10YR1/1) しまり・粘性やや弱い、φ5-10mm軽石少量含む。
11. 黒褐色土(10YR3/1) しまりや強く、粘性やや強い、φ1-5mm軽石少量含む、柱礎。
12. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性やや弱い、φ2-3cmロームブロック少量含む。
13. 黒褐色土(10YR3/1) しまりや強く、粘性やや強い、φ5-10mm軽石少量含む。
14. 黒褐色土(10YR3/1) しまり強く、粘性やや強い、φ2-3cmロームブロック少量含む。
15. 黒褐色土(10YR4/1) しまり強く、粘性やや強い、ローム含む、粘土。
16. 黒褐色土(10YR4/1) しまり強く、粘性やや強い、φ1-2cmの黒色土ブロック少量含む、粘土。
17. 浅黄褐色土(7.5YR8/3) しまりや強く、粘性やや弱い、ローム土。
18. 黒褐色土(10YR2/1) しまりや強く、粘性やや強い、ローム多量を含む。
19. 黒褐色土(10YR4/1) しまり強く、粘性やや強い、ローム・粘土多量を含む、炭化物少量含む。
20. 黒褐色土(10YR3/1) しまりや強く、粘性やや強い、ローム少量含む。
21. 黒褐色土(10YR5/1) しまり・粘性強い、ローム・砂少量含む、粘土。
22. 浅黄褐色土(7.5YR8/3) しまり強く、粘性弱い、φ1-2cm黒褐色シルトブロック・軽石を多量含む、粘土。
23. 浅赤褐色土(2.5YR7/3) しまり強く、粘性強い、ローム・軽石を少量含む、灰を含む、φ1-5cm黒褐色シルトブロックを多量含む、柱礎。
24. 淡赤褐色土(2.5YR7/3) しまり強く、粘性弱い、φ1-2cm黒褐色土ブロック・ローム土を少量含む。
25. 浅黄褐色土(7.5YR8/3) しまり強く、粘性強い、φ1-2cm黒褐色シルトブロック・軽石を少量含む、灰を含む。

第7図 H1号住居址実測図



第8図 H1号住居址カマド及び出土遺物実測図

短軸で6.44m、壁高さは住居址北東コーナー付近で0.29mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は43.91㎡を測る。覆土はおおむね単層であり、自然堆積を示している。床は全体に硬質であったが、特にカマド前面が硬質であった。貼床は住居全体に広がっており、貼床の厚みは住居址南側で0.32mを測る。壁溝は住居址全体で確認され、壁溝の規模は幅0.13~0.3m、深さ0.06~0.11mである。P1とP3には壁側から延びる間仕切り溝が検出された。ピットは4か所確認された。P1~P4までが主柱穴と考えられ、規模はP1が径0.75m・深さ0.65m、P2は径0.89m・深さ0.57m、P3は径0.91m・深さ0.69m、P4は径0.87m・深さ0.61mを測る。住居掘り方はほぼ平坦であった。

カマドは北壁中央に検出された。煙道や袖部の残存状況は不良で、袖部に粘性の黒色土がわずかに検出されたのみで、明瞭な火床部は確認されなかった。煙道部は壁よりもわずかに飛び出るタイプであった。また、中央部に支脚石の抜き穴と考えられるピットが1か所確認された。規模は径0.14m・深さ0.09mである。

本址からの遺物は覆土からの出土が主で、遺物量は非常に少なかった。1と2は須恵器杯、3と4は土師器甕で、3は内外面に黒色処理が施されている。5は磨り石、6は顕著な使用痕はないが編み物石と考えられる。7は鉄鏃である。これらの出土遺物より、本址は8世紀第IV四半期に比定される。

第2表 H1号住居址出土遺物観察表

No.	種別	形状	法 量			成形・施器・文様		測定値() 残存値() 丸窓●	備 考	出土位置
			口径(底)	底径(底)	高さ(底)	内 面	外 面			
1	須恵器	杯	(12.0)	(8.8)	(2.4)	コタロナダ	コタロナダ一底面部軸ヘタ切り	同軸実測	I区	
2	須恵器	杯	-	(8.8)	(2.7)	コタロナダ	コタロナダ一底面部軸ヘタ切り	同軸実測	I区後背面	
3	土師器	甕	(12.0)	-	(6.1)	口縁ヨコナダ→胴部ヘタナダ→黒色処理	口縁ヨコナダ→胴部ヘタナダ→黒色処理	同軸実測	後山面	
4	土師器	甕	-	(6.2)	(2.8)	ヘタナダ	胴部ヘタナダ	同軸実測	窪区	
No.	器 種	実 材	最大径	最大径	最大径	重 量	所 見	出土位置		
5	磨り石	輝石安山岩	(9.0)	(10.0)	(2.7)	(37.87)	上下文様 正面にすり面 擦痕あり	窪区		
6	台石	輝石安山岩	15.9	12.1	4.5	1221.44	右側に磨れた面 使用痕小	窪区		
7	鏃	鉄	(4.7)	(1.1)	(6.4)	(3.68)	細身部 基部欠損	窪区		

本址は調査区中央のXV-15・20・25、XVI-11・16Grに位置する。残存状態は住居中央部が南北に用水路に削平されている。形態は南北方向に長軸をもつ長方形で、炉は北側柱穴間につくられている。規模は長軸8.78m、短軸6.18mを測る。壁高さは北東コーナー付近で最大0.3mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向はN-27°-Wを示す。住居の床面積は推定で52.38㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は炉周辺を中心に全体的に硬質でありよく踏み固まっていた。貼床は住居全体で確認され、厚さ0.06~0.18mを測る。

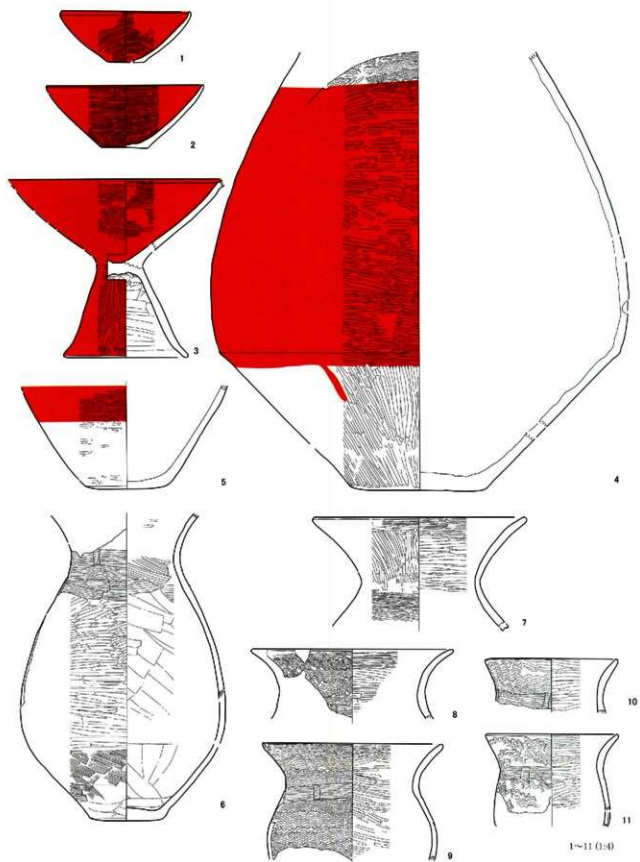
ピットは16か所確認された。P1~P3が主柱穴で、P1-P2間が4.69m、P2-P3が2.32mを測る。P4は棟持柱、P5~P8は出入り口ピットと考えられ、その配置からつくりかえが考えられる。各ピットの規模はP1が径0.62m・深さ0.43m、P2が径0.60m・深さ0.50m、P3が径0.77m・深さ0.56m、P4が径0.46m・深さ0.17m、P5が径0.79m・深さ0.36m、P6が径0.88m・深さ0.35m、P7が径0.43m・深さ0.41m、P8が径0.43m・深さ0.39m、P9が径0.74m・深さ0.32m、P10が径0.38m・深さ0.16m、P11が径0.34m・深さ0.10m、P12が径0.42m・深さ0.12m、P13が径0.36m・深さ0.23m、P14が径0.28m・深さ0.21m、P15が径0.48m・深さ0.13m、P16が径0.51m・深さ0.23mを測る。

第3表 H2号住居址出土遺物観察表

(cm)

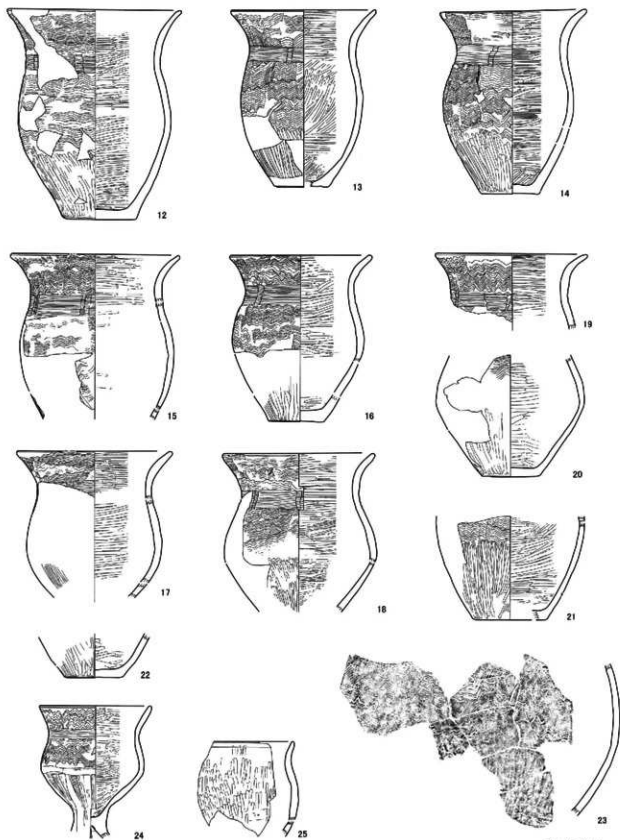
No.	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		埋定層() 検出層() 凡例●		
			口径(底)	口径(頂)	高さ(頂)	内 容	外 容	備 考	出土位置	
1	弥生	鉢	(14.0)	(4.1)	5.5	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	昭和末期	Ⅱ区	
2	弥生	鉢	(16.0)	8.2	6.7	ミガキ・赤色塗彩	ミガキ・赤色塗彩	完全実測		
3	弥生	高坪	-	13.2	(18.8)	管筒ミガキ・赤色塗彩 胴部ヘラナデ	胴部コナデ	ミガキ・赤色塗彩	完全実測 遺残	Ⅳ区
4	弥生	壺	-	14.3	(46.9)	検出のため判別できない	ミガキ・赤色塗彩 縞線状文	完全実測	伊	
5	弥生	壺	-	8.0	(11.0)	検出のため判別できない	胴部ミガキ・赤色塗彩 胴部縞線のため判別できない	完全実測		
6	弥生	壺	-	7.8	(22.9)	口縁ミガキ 胴部ハケ目の残るヘラナデ 胴部ヘラナデ	胴部ハケ目の残るヘラナデ・ミガキ 胴部縞線並平行縞文 縞線状文(位連) 9本	完全実測 遺残		
7	弥生	壺	22.8	-	(12.0)	胴部ヘラナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	完全実測		
8	弥生	壺	(21.4)	-	(7.4)	ミガキ	縞線状文 縞線状文	昭和末期	Ⅳ区	
9	弥生	壺	(19.2)	-	(12.7)	ミガキ	縞線状文(位連) 10本 縞線状文	昭和末期		
10	弥生	壺	14.1	-	(5.7)	ミガキ	縞線状文	完全実測		
11	弥生	壺	(14.0)	-	(10.9)	ミガキ	縞線状文(位連) 9本 縞線状文	昭和末期	Ⅰ区	
12	弥生	壺	18.3	7.6	22.4	ミガキ	胴下半・底縁ミガキ 縞線状文(位連) 14本 縞線状文	完全実測		
13	弥生	壺	(15.4)	(5.8)	19.8	ミガキ	胴下半ミガキ 縞線状文(位連) 12本 縞線状文	完全実測	Ⅳ区 Ⅲ 116-290/449/507	
14	弥生	壺	15.4	6.1	19.6	ミガキ	胴下半・底縁ミガキ 縞線状文(位連) 11本 縞線状文	完全実測		
15	弥生	壺	17.8	-	(17.0)	ミガキ	ミガキ 縞線状文(位連) 15本 縞線状文	完全実測 内外残	Ⅱ区 検出層 Ⅲ 164 369 179 177-389 184	
16	弥生	壺	15.2	5.9	17.8	ミガキ	ミガキ 縞線状文(位連) 15本 縞線状文	完全実測	Ⅲ 1-9 Ⅳ区	
17	弥生	壺	(16.4)	-	(15.3)	ミガキ	ハケ目ミガキ 縞線状文(位連) 10本 縞線状文	昭和末期	Ⅱ区 Ⅳ区	
18	弥生	壺	16.2	-	(16.0)	ミガキ	ミガキ 縞線状文(位連) 12本 縞線状文	完全実測	Ⅳ区 Ⅲ 372 373	
19	弥生	壺	16.1	-	(8.2)	ミガキ	縞線状文(位連) 10本 縞線状文	完全実測		
20	弥生	壺	-	(6.2)	(12.9)	ミガキ	胴下半・底縁ミガキ 縞線状文	昭和末期 外面縞線薄し	Ⅳ区	
21	弥生	壺	-	(7.8)	(11.0)	ミガキ	ミガキ 縞線状文	昭和末期	Ⅲ 363 374	
22	弥生	壺	-	6.2	(4.7)	ミガキ	縞線ミガキ 縞線ナデ	完全実測	P157層	
23	弥生	壺	-	-	-	ミガキ	ミガキ 縞線状文	伊	Ⅲ 297 255 296	
24	弥生	付付壺	11.8	-	(14.2)	ミガキ 胴部ナデ	胴下半部ナデ・ミガキ 縞線状文 6本 縞線状文	完全実測		
25	弥生	壺	-	-	-	胴部ヘラナデ・口縁ミガキ	口縁コナデ・胴下半部ヘラナデ・ミガキ	昭和末期	Ⅳ区	

No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
26	二次加工のある割片	黒色燧石 安山岩	(4.1)	(2.7)	0.8	(10.95)	上部欠損	
27	台石	輝石安山岩	(11.1)	(9.2)	(2.2)	(387.05)	上部以外欠損 正面は使用面	Ⅰ区
28	礎石	角閃石安山岩	19.3	6.6	4.2	374.21	下部部に敲打痕 赤色の部分あり 付着物あり	Ⅱ区
29	礎石?	輝石安山岩	9.8	4.8	3.9	310.07		Ⅱ区
30	礎石	輝石安山岩	19.3	6.1	2.8	243.37	下部部に敲打痕 正面に糸痕	Ⅱ区
31	礎石片	輝石安山岩	(6.5)	(3.7)	(1.8)	(42.10)	金剛欠損 左側にすり面	Ⅰ区
32	礎石	輝石安山岩	(5.5)	(4.8)	(2.3)	(104.97)	上部欠損 正面にすり面 糸痕あり	
33	礎石	輝石安山岩	7.1	2.7	1.9	(46.60)	背面一部欠損 正面にすり面 糸痕あり	Ⅱ区
34	礎石	輝石安山岩	7.5	4.1	2.2	111.52	正面にすり面	
35	円板	土製品	6.8	4.8	1.6	26.70	ミガキ・赤色塗彩 弥生土器の二次利用	Ⅰ区



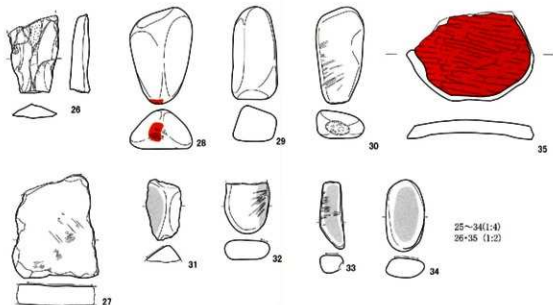
1~11 (1:0)

第10图 H2号住居址出土遗物实测图(1)



第11图 H2号住居址出土遺物実測図(2)

12~25 (1:4)



第12図 H2号住居址出土遺物実測図(3)

炉はほぼ円形の掘り込みに、図示した4の赤彩された壺が傾けておかれていた。所謂「土器敷炉」の様相を呈する。壺内の覆土からは顕著な焼土は検出されなかった。炉掘り込みの形態は円形で、規模は長径0.48m・短径0.47m・深さ0.14mを測る。

また、本址は第9図の遺構実測図に青線で示したように、ピット掘り込みが南西方向に約30～40cmずれを起こしている。ずれを起こしている地層の深さは標高702m付近の地層である。これらの現象は、今までの調査事例でも長土呂地籍周辺で、特に弥生時代後期の遺構で顕著に確認される現象である。ただ、この地殻変動はその規模やずれの方向が一律ではなく、同一遺構内であってもずれの起きている遺構と起きている遺構が存在する。このことは遺構の存在する場所の地殻構造が一律ではなく、力の伝わりやすい場所にこのずれの現象が起こっていると考えられる。

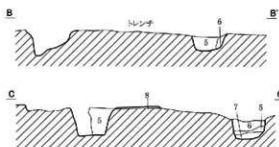
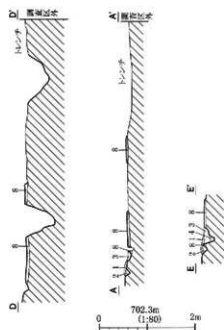
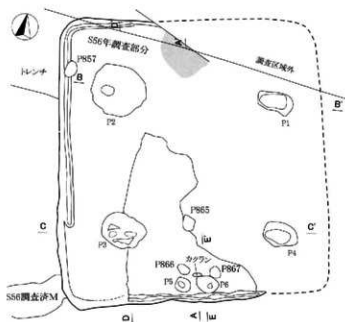
本址からの出土遺物は豊富で、特に住居址南側の出入口付近等からまとまって出土した。また、後述する遺物集中区から出土した土器片とも接合関係が確認され、土器廃棄について行動の一例となる。図示した遺物は34点である。1と2は赤彩された鉢である。3は高環で口唇部が欠損している。4～7は壺である。4は炉に使用されていた土器で内面は剥落し荒れている。6と7は無彩の壺で、特に7は頸部に文様帯をもたない。8～23は甕である。文様構成は基本的に口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文、胴部上半に櫛描波状文、胴部下半と内面ミガキが施されている。24は小型の台付甕である。25は甕としたが無紋の土器であり、形態も口縁部が外反しないためミニチュアの土器とも考えられる。26～34は石器類である。26は二次加工のある剃片で、それ以外のものは敲きかきい磨りの使用痕が確認できる。特に28は石先端に敲き痕があり、その周辺には赤色の付着物が観察できる。35は土製円板で赤彩された弥生土器の二次利用である。

これらの出土遺物から本址は弥生時代後期中葉に位置づけられる。

(3) H3号住居址

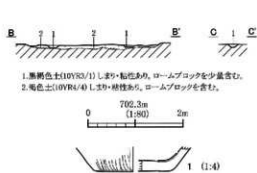
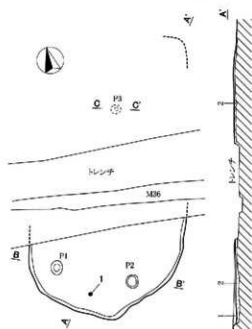
本址は調査区西端のXⅧ-16・17Grに位置する。本址の残存状態は北側が調査区域外となり、遺構全体が圃場整備時の地形改変で上部が大きく削平されていた。よって遺構の確認された部分は4本の主柱穴と一部床面、住居址の南西コーナー一部である。また、本址は西側の一部が昭和56年の周防畑B遺跡発掘調査時のH8号住居址と重なるため同一遺構と判断される。重複遺構はP857・P865・P866・P867で本址の方が古い。

形態はほぼ正方形で、規模は推定で南北軸が5.89m、東西軸が5.87mを測る。住居址の面積は33.31㎡と推定される。カマドは昭和56年調査時に北壁中央で確認されている。ピットは6か所確認されている。P1～P4までは主柱穴と考えられ、規模はP1が径0.78m・深さ0.49m、P2が径1.17m・深さ0.61m、P3が径0.94m・深さ0.71m、P4が径0.76m・深さ0.47mを測る。柱間の長さはP1-P2が3.51m、P2-P3が3.10m、P3-P4が3.13m、P1-P4が2.85mを測る。



- 1.黒褐色土(10YR3/4)しまりやや強く、粘性やや弱い、炭化物少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/4)しまり弱く、粘性やや弱い、ローム多量を含む。
- 3.黒褐色土(10YR3/4)しまりやや強く、粘性やや弱い、ローム・軽石多量含む。
- 4.暗灰色土(10YR5/4)しまりやや強く、粘性やや弱い、ローム多量含む。
- 5.黒褐色土(10YR3/4)しまり・粘性弱く、砂多量、ローム少量含む。
- 6.にがい黄褐色土(10YR6/6)しまりやや弱く、粘性弱い、軽石少量、ローム多量含む。
- 7.にがい黄褐色土(10YR6/6)しまりやや弱い、粘性弱い、砂多量含む。
- 8.にがい黄褐色土(10YR6/6)しまり強く、粘性やや弱い、ロームに黒褐色土ブロック少量含む。

第13図 H33号住居址実測図



- 1.黒褐色土(10YR3/4)しまり・粘性あり、ロームブロックを少量含む。
- 2.褐色土(10YR4/4)しまり・粘性あり、ロームブロックを含む。

第14図 H4号住居址及び出土遺物実測図

貼床は部分的にしか残存していなかったが、0.02mの厚みで貼られていた。壁溝は南壁でしか確認されなかったが、幅0.18m・深さ0.04mを測る。壁高さは残存部分で0.06mを測る。

本址は今回の調査で遺物は出土せず、時期決定には至らないが、昭和56年度の調査では北側にカマドと考えられる粘土範囲が確認されていることから、古代の範疇で捉えられようとする。

(4) H4号住居址

本址は調査区中央南よりのXVI-24、XVII-4Grに位置する。残存状況はM36号溝状遺構により中央部分が削平され、住居址全体も上部が削られ南側の一部が残存するのみである。

形態は推定で長方形で、規模は南北軸6.04m、東西軸3.11mを測る。長軸方位はN-16°-Eを示し、面積は残存で4.48㎡を測る。壁はなだらかに立ち上がり、最大で0.08mを測る。床は軟弱であったが、0.04~0.13mの厚みで貼られていた。ピットは床面で2か所、掘り方時に1か所が検出された。P1とP2は主柱穴、P3は棟持柱と考えられるが、いずれも掘り込みが浅く確認を得ない。ピットの規模はP1が径0.30m・深さ0.06m、P2が径0.29m・深さ0.04m、P3が径0.21m・深さ0.08mを測る。

本址からの出土遺物は僅かであったが、南壁際からまともな土器小片が出土した。実測可能なものは図示した壺底部の1点のみであった。よって本址の帰属時期は非常に不確実であるが弥生時代後期と考えたい。

第4表 H4号住居址出土遺物観察表

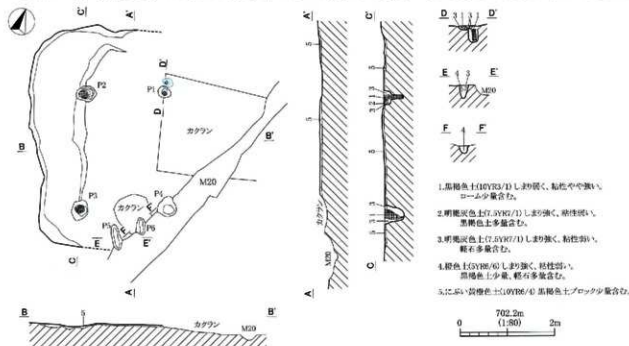
(cm)

No.	種別	形状	法 製		成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		規定値() 検出値() 凡例(●)		
			口径(直径)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	赤土	壺	-	(5.2)	(2.6)	新縄-滑石のため判別できない	胴部ニガキ 底部ニガキ	(5) 壺底部	

(5) H6号住居址

本址は調査区西端のXVII-25Grに位置する。重複関係はM20号溝状遺構に切られている。残存状況は住居址東側と遺構上部が圃場整備により削平されており、住居址掘り方とピットが残存するのみであった。形態は長方形と考えられ南北の長軸が4.69m、東西の短軸が3.93mを測る。長軸方位はN-20°-Wを示す。面積は推定で17.82㎡を測る。床は一部に残存し、残存する床の厚みは0.10mを測る。

ピットは6か所で確認され、P1からP4が主柱穴、P5とP6が出入り口施設のピットと考えられる。各ピットの規模は、



第15図 H6号住居址(掘り方)実測図

P1が径0.29m・深さ0.35m, P2は径0.43m・深さ0.46m, P3は径0.45m・深さ0.42m, P4は残存で径0.43m・深さ0.40m, P5は残存で径0.54m・深さ0.29m, P6は残存で径0.32m・深さ0.19mを測る。ピット間の規模はP1-P2が1.69m, P2-P3が2.43m, P3-P4が1.86mを測る。P1からP3は柱痕が確認できた。また、P1はH2号住居跡でも述べたように南西方向へのずれが確認できた。

本址からの出土遺物は全く無かった為、遺構の帰属時期は不明であるが、出入り口施設があることやピットがずれている事などから弥生時代後期の住居跡と推定できる。

(6) H8号住居跡

本址は調査区中央のXV-14・15・19Grに位置する。残存状況は全体に削平が行われ不良であるが、住居跡の南側壁やピット・炉を確認した。

形態は南北方向に長軸をもつ長方形で、規模は長軸残存で6.91m、短軸4.69mである。面積は残存部分で32.15㎡を測る。長軸方位はN-15°-Eを示す。炉は北側支柱穴間で確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南東コーナー部で0.15mを測る。覆土は自然堆積である。床はやや軟質であったが、0.01~0.12mの厚みではられていた。ピットは掘り方時も含めて16か所が確認された。P1~P4は支柱穴、P7とP8は出入り口施設、P5は棟持ち柱、P6は貯蔵穴、P9・P10・P12~P14は壁柱穴と考えられる。支柱穴間の距離は、P1-P2が2.29m、P2-P3が4.69m、P3-P4が2.56m、P1-P4が4.72mである。また、出入り口施設ピット間はP7-P8で0.83mを測る。各ピットの規模はP1が径0.76m・深さ0.45m, P2は径0.90m・深さ0.54m, P3は径0.78m・深さ0.44m, P4は径0.71m・深さ0.59m, P5は径0.47m・深さ0.38m, P6は径0.65m・深さ0.29m, P7は径0.46m・深さ0.41m, P8は径0.43m・深さ0.40m, P9は径0.28m・深さ0.32m, P10は径0.25m・深さ0.29m, P11は径0.45m・深さ0.20m, P12は径0.28m・深さ0.19m, P13は径0.29m・深さ0.38m, P14は径0.45m・深さ0.33m, P15は径0.38m・深さ0.20m, P16は径0.27m・深さ0.18mを測る。

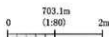
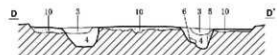
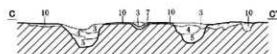
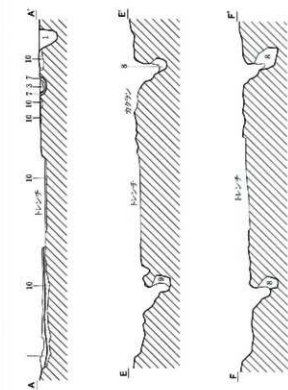
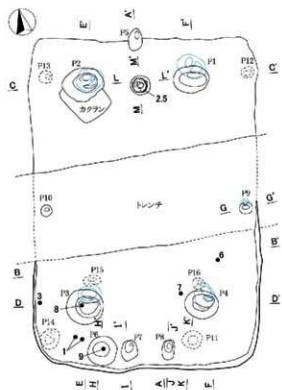
炉は所謂「土器敷き炉」である。炉に使用された土器は図示した5の赤彩された壺であり、胴部下半を底部を意図的に打ちかいて使用している。炉の掘り込みは円形で、規模は長径0.44m・短径0.41m・深さ0.15mを測る。炉の覆土は顕著な焼けこみ等はなく、炭化物が僅かに確認された。

本址の掘り方はほぼ平坦であったが、本址もH2号住居跡と同じく、南西方向に掘り込みのずれが確認された。ずれは主にピットに現れ、第16図に示した青線がずれる前のピット位置である。ずれを起こした地層は海拔702.5m付近であり、H2号住居跡よりも50cm程海拔が上がっている。このことは本址が地形的には上部に位置するからと考えられ、近くのずれは表層から一定の深さの部分がずれを起こしていると推察できる。

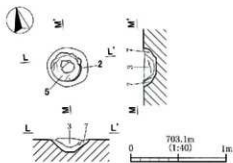
本址からの出土遺物は、南壁付近からまとまって出土した。図示可能なものは9点であり、7の壺はH2号住居跡と同じく遺物集中区より出土した土器と接合関係が確認された。1は鉢と考えられるが底部を欠損するため傾き等が不確実である。2は無彩の壺であり、胴部上半まで残存している。頸部に櫛描横走平行線文を施す。3は赤彩の壺である。頸部にヘラ描横走平行線文とヘラ描斜走文が施されている。またH13号住居跡P4から出土した口縁部破片が接合関係にある。5は赤彩された壺の胴部下半で、炉に使用されていた土器である。4は赤彩された壺胴部破片であり、頸部にヘラ描横走平行線文とヘラ描斜走文が施されている。6と7は壺の底部と考えられる。8と9は甕であり、8は櫛描横線文、9は櫛描波状文が施されている。9はH2号住居跡出土破片と接合関係にある。

第5表 H8号住居跡出土遺物観察表

No.	種別	形状	寸法			成形・装飾・文様		測定値() 推定値() 丸部()	
			口径(φ)	口径(φ)	底径(φ)	内部	外部	備考	出土位置
1	弥生 鉢	(10.5)	-	(14.2)	ミガキ→口縁部赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	図形実測 厚焼	Ⅱ区 P8	
2	弥生 壺	(25.0)	-	(18.4)	口縁→傾斜ミガキ 胴部ナツ	ミガキ 櫛描横走平行線文	図形実測 内底磨粒	Ⅱ区ホリ方 P1ホリ方	
3	弥生 壺	(22.5)	-	(25.8)	口縁ミガキ→赤色塗彩 胴部ヘラナツ	完全実測 厚焼	Ⅱ・Ⅲ区 Ⅲ区ホリ方 P3ホリ方 H13P3 SB011ET18 P		
4	弥生 壺	-	-	-	ナツ	ミガキ→赤色塗彩 ヘラ描横走平行線文	断面実測 IV区 検出		
5	弥生 壺	-	-	(16.7)	ヘラ目→ミガキ	ミガキ→赤色塗彩	完全実測	伊	
6	弥生 壺	-	(11.4)	(4.9)	ナツ	傾斜ミガキ 底部ミガキ?	図形実測 厚焼		
7	弥生 壺	-	(14.8)	(4.4)	ナツ	傾斜ミガキ	断面実測 内底磨粒 外底磨粒	Ⅲ 349	
8	弥生 甕	(18.8)	-	(4.4)	ミガキ	傾斜横線文	断面実測		
9	弥生 甕	-	-	-	ミガキ	傾斜波状文	断面実測	IB26.9 IV区	

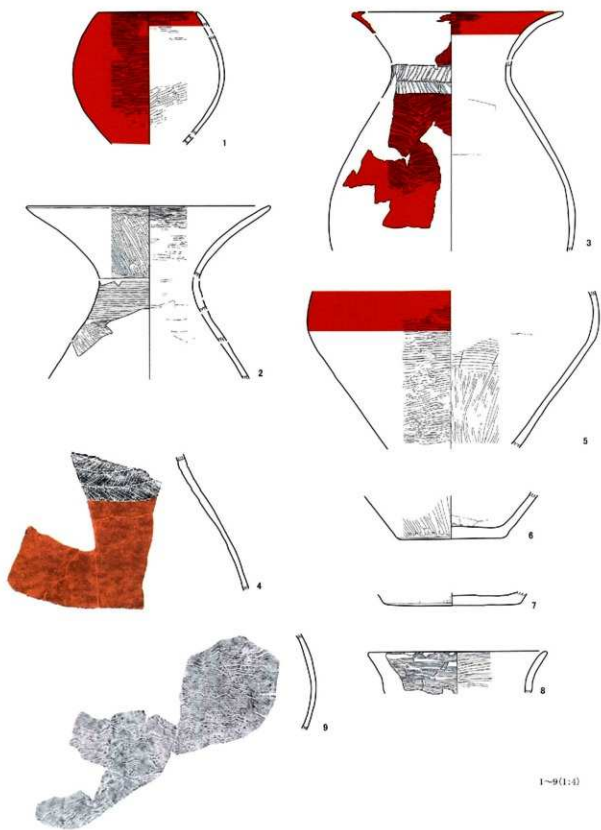


1. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い。
2. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い、ロームブロック多い。
3. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い、ローム粒子多く含む。
4. 緑褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり、軽石を多く含む。
5. 濃い・黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性あり、大粒のロームブロックを含む。
6. 濃い・黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性弱い、ロームブロックを含む。
7. 黒褐色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、炭化物を含む。
8. 灰白色土(10YR8/2) しまり・粘性弱い、ロームの粗い塊れ、黒色土ブロックを含む。
9. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い、ローム粒子を少量含む。
10. 黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性あり、ロームブロックを含む、腐葉。
11. 黒褐色土(10YR2/1) しまり・粘性弱い、φ2-3cmの軽石を含む。



炉

第16図 H18号住居実測図



第17图 H8号住居址出土遗物实测图

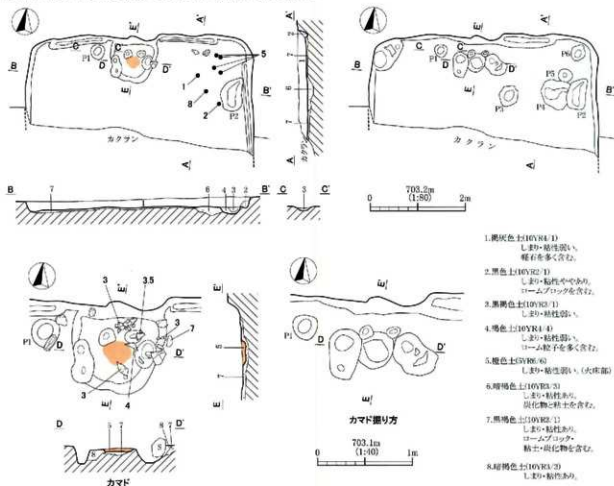
(7) H9号住居址

本址は調査区西側のXⅡ-17Grに位置する。残存状態は、住居南側半分が面場整備の水田区画により削平されているが、カマドを中心とする北側は良好であった。

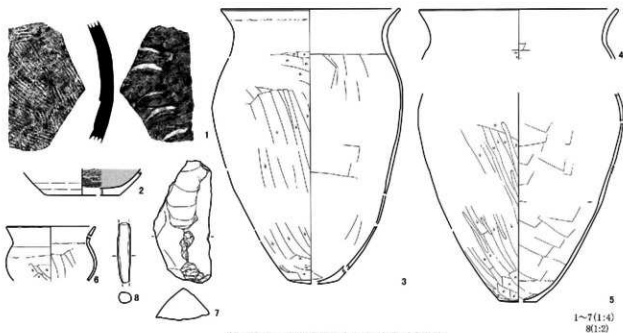
形態は、残存部分から推定すると方形と考えられる。カマドは北壁中央部につくられている。規模は東西長が4.50m、南北長が残存で1.90mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは西壁中央部で0.22mを測る。主軸方位は、カマドからN-5°-Wを示す。住居址の床面積は残存で8.78㎡を測る。覆土は単層で自然堆積の状況を示す。床は、ほぼ平坦で、カマド前面が特に硬質であった。貼床は約0.10mの厚みで貼られていた。壁溝は北壁の一部と東壁で検出された。規模は幅0.14～0.16m・深さ0.02mほどであった。ピットは掘り方時のものも含め6か所検出された。規模はP1が径0.32m・深さ0.08m、P2が径0.76m・深さ0.16m、P3が径0.48m・深さ0.06m、P4が径0.69m・深さ0.24mを測る。P5が径0.30m・深さ0.12m、P6が径0.36m・深さ0.11mを測る。

カマドは北壁中央部で検出された。煙道部が壁よりもあまり飛び出さないタイプのものである。火床部と袖構築材の掘り方、支脚石掘り込みピットは検出されたが、袖部などの高まりは検出できなかった。火床部はよく焼けており、焼土径0.33m・厚み0.03mを測る。また袖構築材の掘り方は左右で長径0.51～0.52m・深さ0.16～0.23mを測る。支脚石掘り込みピットは左が径0.21m・深さ0.09m、右が径0.19m・深さ0.07mを測る。

本址からの出土遺物はカマド内と住居北東コーナー付近からまとまって出土した。図示した遺物は8点である。1は須恵器の横瓶胴部破片と考えられる。外面にタキ目で、内面に当て具痕が確認できる。2は土師器杯で内面が黒色処理されている。底部はヘラズリである。3から5は土師器甕であり、所謂「武蔵型甕」である。3は全体の器形が解るもので、主にカマド内より出土した。6は小型甕の上部破片である。7は敲き石、8は鉄製品で釘と考えられる。本址はこれらの出土遺物より8世紀代の所産と考えられる。



第18図 H9号住居址実測図

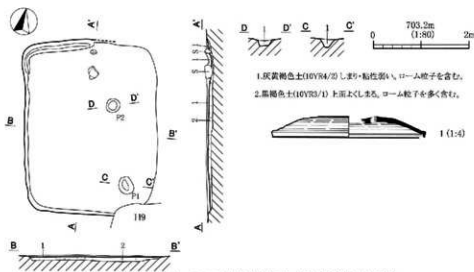


第19図 H9号住居址出土遺物実測図

第6表 H9号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	群種	寸 量			形状・図様・文様		推定産() 携存() 元器●	
			口径(横)	口径(縦)	口径(深)	内 面	外 面	産 地	出土位置
1	灰土器	模灰	-	-	-	タタキ目	当て具痕	新田実測	
2	土師器	牙	(7.8)	(2.8)		ミガキ一黒色処理	コタコナダ→底部手持ちヘラケズリ	沼形実測	
3	土師器	罎	(19.0)	5.3	23.0	胴部→底部ヘラナダ→口縁コナダ	口縁コナダ 4本筋ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区 カマド
4	土師器	罎	(21.0)	-	(5.3)	口縁コナダ→胴部ヘラナダ	口縁コナダ→胴部ヘラケズリ	沼形実測	
5	土師器	罎	-	3.9	(22.0)	ヘラナダ	胴部ヘラケズリ→ナダ 底部ヘラケズリ	完全実測	I・Ⅱ区 カマド
6	土師器	小形罎	(9.4)	-	(5.8)	口縁コナダ→胴部ヘラナダ	口縁コナダ 胴下半部ヘラケズリ	沼形実測	Ⅱ区 カマド
No.	種 類	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見		出土位置
7	礫石	輝石安山岩	12.9	6.1	3.5	254.00	下腹部を中心に縦打痕		
8	不明	鉄	(3.2)	(0.7)	(0.6)	(2.13)	上下欠損		



第20図 H10号住居址及び出土遺物実測図

(8) H10号住居址

本址は調査区西側よりのXⅡ-17・18Grに位置する。H9号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。残存状況は、東側半分が地形により削られており、壁立ち上がりは確認できなかった。

形態は長方形で、規模は南北の長軸が3.47m、東西の短軸が2.71mを測る。壁はなだらかに立ち上がり、西壁中央で0.04mを測る。面積は検出部分で8.89㎡であった。床は全体に硬質であり、厚みは約0.03～0.13mで貼られていた。周溝は北壁の一部で検出された。規模は幅が0.16m・深さ0.03mを測る。ピットは2か所確認され、規模はP1が径0.32m・深さ0.19m、P2が径0.31m・深さ0.14mを測る。カマドは検出されなかったが、北壁中央部に礫が2点、床面上から出土した。顕著な被熱等の痕跡は確認できなかったが、カマドの構築材とも考えられる。

本址からの出土遺物は少なく、図示可能なものは覆土中から出土した須恵器蓋のみであった。このことから本址の所産時期は不明である。

第7表 H10号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	図例	位置			形状・数量・文様		特定塗() 残存塗() 丸底(●)		
			西壁()	東壁()	南壁()	内面	外面	塗色	出土位置	
1	須恵器	蓋	(16.2)	-	3.22	ロクロナデ	ロクロナデ→天卦部回転ヘラズリ	黒・赤・黄	内外底穴大さき	検出面

(9) H11号住居址

本址は調査区西側のXⅡ-17・18・22・23Grに位置する。重複関係はH9号住居址、H10号住居址、F9号掘立柱建物址、P125があり、いずれの遺構よりも本址が古い。残存状況は南側半分が圃場整備水田により遺構上部が削平されている。

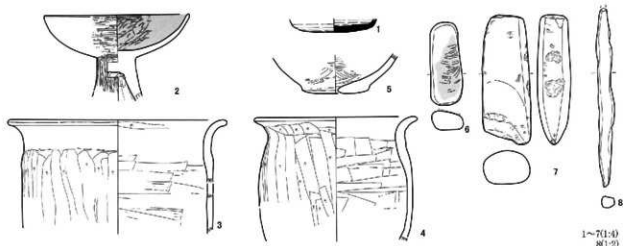
形態は南側に張出部をもつ長方形で、北壁にカマドを持つ。規模は張り出し部も含めた南北軸で6.36m、東西短軸で5.58mを測る。張出部の規模は東西1.49m・南北0.59mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは北西コーナー付近で0.41mを測る。住居址の床面積は32.70㎡を測る。また、本址は床が2面確認された。主柱穴が西に僅かにずれ、東壁側の壁溝は、東側に広がられている。このことから本址は拡張住居と考えられる。床の厚みは拡張後の南側部分が厚く0.16～0.39m、拡張前が0.05～0.45mの厚みで貼られていた。壁溝は北壁の一部、西壁の全部、南壁の一部で検出された。いずれも幅0.14～0.32m・深さ0.09～0.17mを測る。また、拡張前後で主柱穴間より所謂間仕切り溝が確認された。特に拡張前のP6とP7間では西壁に向かって「コ」字状の間仕切り溝が検出された。

ピットは掘り方時に検出されたものを含めると、23か所が確認された。この内P1～P4は最終段階の床に伴うものであり、P5～P17までが拡張前、P18～P23までが掘り方検出時のものである。ピットの規模はP1が径0.59m・深さ0.56m、P2が径0.55m・深さ0.51m、P3が径0.44m・深さ0.62m、P4が径0.56m・深さ0.61m、P5が径0.78m・深さ0.67m、P6が径0.63m・深さ0.67m、P7が径0.70m・深さ0.63m、P8が径0.86m・深さ0.62m、P9が径0.38m・深さ0.20m、P10が径0.45m・深さ0.17m、P11が径0.96m・深さ0.28m、P12が径0.68m・深さ0.27m、P13が径0.54m・深さ0.13m、P14が径0.47m・深さ0.43m、P15が径0.32m・深さ0.15m、P16が径0.25m・深さ0.43m、P17が径0.54m・深さ0.23m、P18が径0.31m・深さ0.27m、P19が径0.72m・深さ0.25m、P20が径0.53m・深さ0.40m、P21が径0.29m・深さ0.27m、P22が径0.31m・深さ0.20m、P23が径0.40m・深さ0.26mを測る。ピット間の距離はP1-P2が3.33m、P2-P3が2.97m、P3-P4が3.37m、P1-P4が2.90mを測る。

本址の掘方は南西コーナーに向かって一段づつ深くなる掘り方であり、北西コーナー部と張出部に上土状の掘り込みが確認された。拡張部の掘り込みは長軸1.18m・短軸0.72m・深さ0.16mを測る。北西コーナー部のものは長軸1.86m・短軸1.02m・深さ0.4mを測る。

カマドは北壁中央部につくられていた。煙道部が壁から飛び出さないタイプのカマドであり、火床部と袖部が検出された。袖は左側が大きくつぶれ、袖構築材である粘土が住居側に流れ出したような状態であった。火床部は径0.40m・焼土の厚み0.02mを測るが、焼土は柔らかく、焼けこみは弱かった。カマド掘り方時にピットが2か所確認され、径0.16m・深さ0.09m、径0.25m・深さ0.13mを測る。

本址からの出土遺物は少なく、カマド東脇から少量がまとまって出土したのみである。図示したものは8点である。1は須恵器の坏底部であり、底部回転ヘラ切りが行われている。2は土師器の高坏であり、坏部は内面に黒色処理が施されている。3と4は土師器の甕である。3は胴が張らないタイプのものと考えられる。5は土師器の単孔甕である。



第21図 H11号住居址出土遺物実測図

第8表 H11号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	種類	寸法		成形・調整・文様		推定産() 焼存層() 瓦産層	備考	出土位置
			口径(高)	底径(高)	内面	外面			
1	滑蓋器	鉢	-	7.7	(1.4)	口縁コナダ	口縁コナダ一様調整面ヘリ切り	完全実装	Ⅱ区
2	土師器	灰坪	15.2	-	(9.1)	外面とがや一帯色地埋 胴部ヘラナダ	外面ヘラクスリ→ミガキ 胴部ヘラナダ→ミガキ	完全実装	Ⅰ区
3	土師器	甕	(23.0)	-	(12.2)	口縁コナダ一様調整ヘラナダ	口縁上部に数か所ヘラクスリ 口縁コナダ一様調整ヘラクスリ	部分実装	Ⅰ区検出層 F10
4	土師器	甕	17.4	-	(13.1)	口縁コナダ一様調整ヘラナダ	口縁コナダ一様調整ヘラクスリ	完全実装	Ⅰ・Ⅱ区
5	土師器	瓶	-	(7.0)	(4.1)	ハタ目	胴部ヘケ目 底部ハケ目→焼成後穿孔	部分実装	Ⅱ区 Ⅱ区ホリ方
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	消	出土位置	
6	磨石	輝石安山岩	8.8	3.4	2.9	112.65	下面にすり面 条痕あり	Ⅱ区ホリ方	
7	磨石	石英閃緑岩	13.8	5.2	3.5	442.90	両側と裏面に磨行面 刀痕は欠損後再度研磨		
8	不明	鉄	(8.5)	(0.8)	(0.7)	(8.42)	土器文様		

穿孔は焼成後である。6は磨石であり、磨り面に波打つような擦痕が観察できる。7は磨製の蛤型石斧である。周辺部の弥生期住居からの混入品と考えられる。刃は欠損後再度研磨が行われている。8は鉄製品であるが種別は不明である。

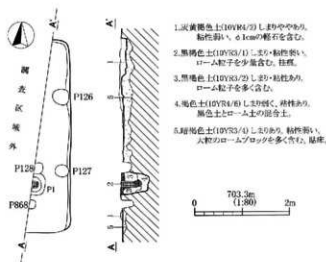
これらの遺物から本址は7世紀代の所産時期が考えられる。

(10) H12号住居址

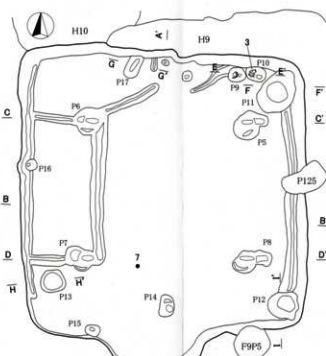
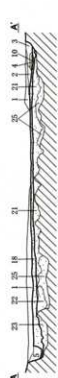
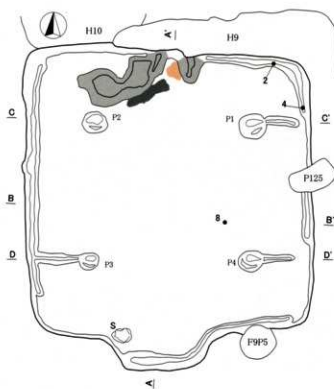
本址は調査区西端のXⅡ-8・13Grに位置する。住居址の西側が調査区域外となるため、形態等は不明である。規模は南北長で3.93m、東西長で0.63m、住居址の面積は検出部分で2.33㎡である。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは0.04mを測る。ピットが1か所確認され、断面観察では柱痕が確認できた。規模は径0.49m・深さ0.51mを測る。

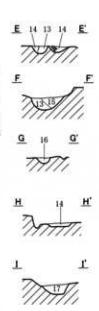
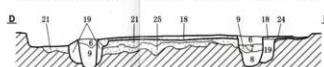
本址からの出土遺物は弥生土器壺片と甕片があったが、いずれも小片である。よって本址の帰属時期は不明である。



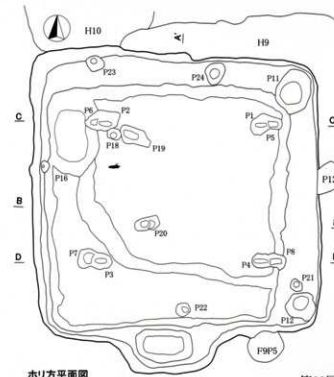
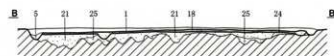
第22図 H12号住居址実測図



第2床平面図

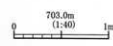
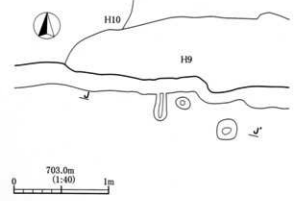
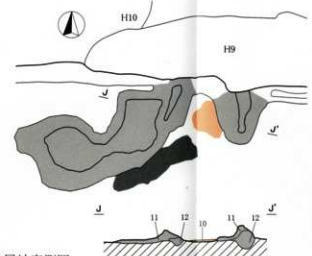


- 1.黒褐色土(10V93/1) しまり・粘性ややあり、軽石ブロックを含む。
- 2.黒色土(10V82/1) しまり・粘性あり、炭化物を多量含む。
- 3.灰黄褐色土(10V84/2) しまり・粘性あり、炭化物・焼土粒子を含む。
- 4.黄褐色土(10V86/3) しまり・粘性あり、粘土層の混れ。
- 5.黒色土(10V82/1) しまりややあり、粘性やや強い、ローム粒子を含む。
- 6.黒褐色土(10V93/1) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロックを少量含む。
- 7.灰黄褐色土(10V84/2) しまり・粘性やや強い、ローム・軽石やや多い。
- 8.灰黄褐色土(10V84/2) しまり弱く、粘性やや強い、ロームブロックを少量含む。
- 9.褐色土(10V94/1) しまり・粘性やや強い、ロームブロックを多量含む。
- 10.黄褐色土(7.SY87/8) 焼土層。
- 11.灰黄褐色土(10V88/3) しまり・粘性あり、粘土層。
- 12.にじい 黄褐色土(10V86/3) しまり弱く、粘性あり、粘土・焼土・軽石ブロックを含む。
- 13.明黄褐色土(10V86/4) しまり・粘性あり、ローム混れ。
- 14.暗褐色土(10V93/3) しまり・粘性を少量含む。
- 15.暗褐色土(10V93/3) しまり・粘性あり、ローム粒子を少量含む、粘土・炭化物を含む。
- 16.黒褐色土(10V93/3) しまり・粘性強い、ローム混れ。
- 17.黒褐色土(10V93/1) しまり・粘性強い、ローム粒子を含む。
- 18.黄褐色土(10V85/4) しまり・粘性あり、ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 19.にじい 黄褐色土(10V85/3) しまり・粘性あり、ロームブロックを多く含む。
- 20.明黄褐色土(10V86/4) しまり・粘性あり、ロームブロックを多く含む。
- 21.暗褐色土(10V93/3) しまり・粘性あり、上面硬質、一部に粘土を含む。
- 22.黄褐色土(10V87/8) しまり弱く、粘性あり、黄色ローム、黒色土の混合土。
- 23.暗褐色土(10V93/3) しまり・粘性ややあり、砂を多く含む。
- 24.灰黄褐色土(10V88/3) しまり・粘性あり、ローム主体。
- 25.明黄褐色土(10V87/4) しまり・粘性強い、黒色粒子を含む。

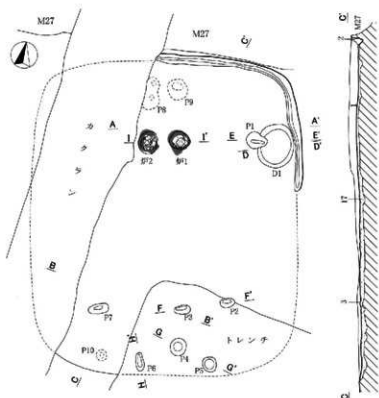


第1床平面図

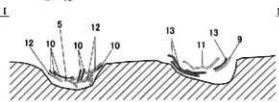
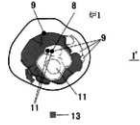
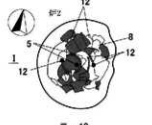
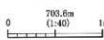
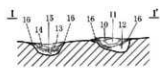
第23図 H11号住居址実測図



カマド



1. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、ローム粒子・礫石ブロックを多く含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性強い、ローム粒子を多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/2) しまり・粘性強い、ローム粒子を多く含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、軽石粒子を含む。
5. 黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性強い。
6. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり、ローム主体、黒色土混在。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、軽石粒子含む。
8. 黒褐色土(10YR2/1) しまり・粘性ややあり、黒色土とロームブロックを含む。
9. にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまり・粘性強い。
10. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い。
11. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、炭化物を多く含む。
12. 黒色土(10YR2/1) しまりあり、ロームブロックを含む。
13. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い。
14. 明黄褐色土(10YR5/3) しまり・粘性あり、ロームブロックを多く含む。
15. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり、炭化物を多く含む。
16. 黒色土(10YR2/1) 炭化物層。
17. 明黄褐色土(10YR5/3) しまり・粘性弱い、ローム主体で黒色土ブロックを含む。
18. にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性強い、ロームブロック主体。



第24図 H13号住居址実測図

(11) H13号住居址

本址は調査区中央のIX-25、X V-4・5Grに位置する。重複関係は推定範囲でH15号住居址とあり、本址の方が古い。残存状況は住居址西側を用水路に、南側を圃場整備によりそれぞれ削平されている。

形態は隅丸方形と推定でき、規模は南北長6.63m、東西長は推定5.94mを測る。住居址の主軸方位はN-6°-Wを測る。面積は推定で37.13㎡を測る。床は炉周辺部が硬質化していたが、南側がすでに削平されていて掘り方のような状態であった。床の厚さは0.01～0.19mであった。壁はゆるやかに立ち上がり、北西コーナーで0.13mを測る。覆土は単層であり自然堆積の状態であった。

ピットは掘り方時の検出も含めて10か所確認された。P1・P2・P7が主柱穴と考えられるがやや歪んでいる。P1-P2間は3.45m、P2-P7は2.74mを測る。P6が出入り口施設、P8とP9は棟持柱と考えられる。各ピットの規模はP1が径0.45m・深さ0.33m、P2が径0.32m・深さ0.33m、P3が径0.34m・深さ0.26m、P4が径0.38m・深さ0.11m、P5が径0.34m・深さ0.07m、P6が径0.38m・深さ0.18m、P7が径0.43m・深さ0.28m、P8が径0.71m・深さ0.19m、P9が径0.45m・深さ0.21m、P10が径0.24m・深さ0.14mを測る。また、本址はP1脇にD1とした掘り込みが検出された。形態はほぼ円形で、規模は長径0.93m・短径0.75m・深さ0.12mを測る。

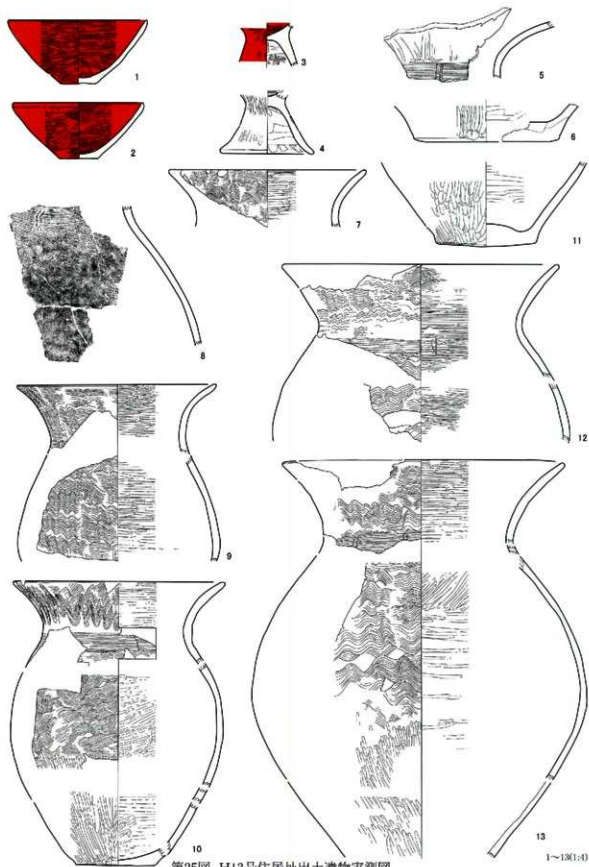
炉は2か所確認された。住居址内の北よりに位置し、2基が東西に並ぶような位置関係である。いずれも土器が掘り込み内にある所謂「土器敷き炉」のタイプである。ただ、土器の入れ方に相違があり、炉1は土器底部や甕の口縁部など土器の形が解るような大型の破片が入れられているのに対し、炉2はいずれも小片であるが図示した10のようにほぼ一個体分の土器が無作為に詰められているという状態である。このことから、炉内が整然としているのは炉1の方であり、本住居の最終使用の炉は炉1と考えられる。覆土にはどちらも顕著な焼土は含まれていなかったが、炉周辺には広く炭の広がりが確認できた。炉の掘り込み規模は炉1が長径0.43m・短径0.38m・深さ0.14m、炉2が長径0.48m・短径0.43m・深さ0.12mを測る。

本址からの出土遺物は2基の炉内から出土したものが多く、13点を図示した。1と2は赤彩された鉢であり、ほぼ同型のものである。1はP4から出土している。3は高坏脚の部分で坏部と脚外面に赤彩が施されている。4は台付甕の脚部と考えられる。外面はミガキが施されている。5は甕の頸部から口縁部にかけての破片で、無彩である。頸部に櫛描簾状文が施されている。6も壺底部と考えられる。7～13は甕である。いずれも口縁部は櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文、胴部上半が櫛描波状文、胴部下半と内面がミガキが施されている。

これらの出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

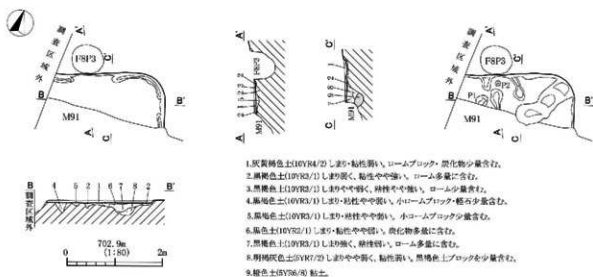
第9表 H13号住居址出土遺物観察表

No.	種別	種類	法量		成形・器型・文様		測定値() 残存値() 丸径()	備考	出土位置
			口徑(径)	底径(径)	器高(厚)	内面			
1	弥生	鉢	(14.8)	3.6	6.8	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	完全実測	P4
2	弥生	鉢	(14.0)	(4.2)	7.0	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩	同軸実測 外面塗料	輸出面
3	弥生	高坏	-	-	(4.0)	特別ミガキ→赤色塗彩	櫛描ハケ目	完全実測 外面塗料	輸出面
4	弥生	台付甕	-	10.0	(6.7)	ミガキ	ヘラナデ	完全実測	P5 SP9HET15 P
5	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	ハケ目→ミガキ	破片実測	甕群 P2
6	弥生	甕	-	(16.4)	(4.0)	ヘラナデ	特別ミガキ 底部ナデ	同軸実測	輸出面 輸出面
7	弥生	甕	(20.8)	-	(6.0)	ミガキ	櫛描波状文	同軸実測	輸出面
8	弥生	甕	-	-	-	ミガキ	櫛描簾状文(口縁止) 櫛描波状文	外面実測	P1 No.2-17-10
9	弥生	甕	21.2	-	(18.8)	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(口縁止) 櫛描波状文	口縁完全実測	胴部同軸実測 P1
10	弥生	甕	(22.5)	8.4	(20.5)	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(口縁止) 櫛描波状文	口縁・胴部同軸実測	底面完全実測 P2
11	弥生	甕	-	10.6	(9.0)	ミガキ	ミガキ	完全実測	Ⅱ区 P1
12	弥生	甕	(29.2)	-	(19.9)	ミガキ	櫛描簾状文(口縁止) 櫛描波状文	同軸実測	P2
13	弥生	甕	(29.8)	-	(42.5)	ミガキ	ミガキ 櫛描簾状文(口縁止) 櫛描波状文	口縁完全実測	胴部破片実測 P1・Ⅱ区

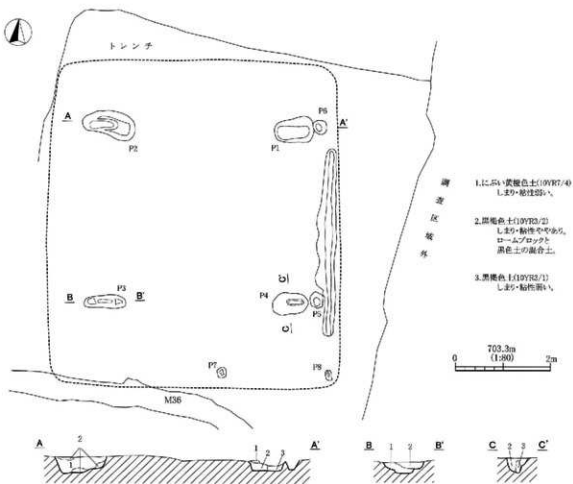


第25图 H13号住居址出土遗物实测图

1~130:0



第26図 H14号住居址実測図



第27図 H15号住居址実測図

(12) H14号住居址

本址は調査区西端のXⅧ-3Grに位置する。残存状況は西側が調査区域外、南側がM91号溝状遺構に切られ、住居址の北東コーナー付近のみ検出された。形態は不明で、規模は南北残存長0.72m・東西検出長2.31mを測る。北壁をもとにした長軸方位はN-17°-Wを測る。面積は検出部分で1.65㎡である。壁はゆるやかに立ち上がり、北東コーナーで0.08mを測る。床はやや軟質で、貼床は0.02～0.35mの厚みで貼られていた。壁溝は北壁と東壁の一部で確認され、規模は幅0.09～0.12m・深さ0.03～0.06mを測る。ピットは掘り方検出時に2か所確認され、P1が径0.26m・深さ0.16m、P2が径0.11m・深さ0.10mを測る。住居掘り方は北東コーナー部分に一段掘り込まれた深い部分があり、また北壁際にはカマド袖の芯部分のような地山掘り残しが確認された。

本址からの出土遺物は須恵器坏と土師器甕の所謂「武蔵甕」の破片が出土しているが、いずれも小片で図示できない。よって本址の帰属時期も不明であるが、古代の範疇で捉えたい。

(13) H15号住居址

本址は調査区中央部のXⅤ-4・5・9・10Grに位置する。残存状態は圃場整備により遺構上面は削平され、ピットと壁溝が一部しか残存していなかった。重複関係はM36号溝状遺構と重複関係にあり、本址の方が古い。

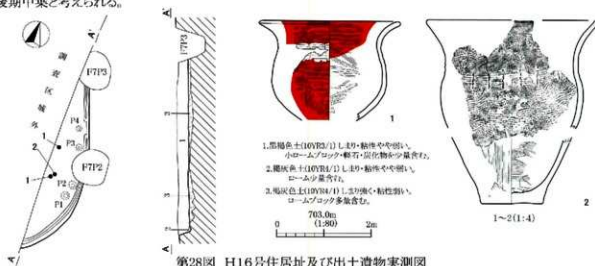
形態は柱穴の配置から長方形と考えられる。規模は南北の長軸長6.92m、東西の短軸長6.20mを測る。面積は推定で41.81㎡である。ピットは8か所検出された。規模はP1が径0.84m・深さ0.26m、P2が径1.12m・深さ0.41m、P3が径0.87m・深さ0.32m、P4が径0.77m・深さ0.39m、P5が径0.36m・深さ0.21m、P6が径0.32m・深さ0.24m、P7が径0.23m・深さ0.14m、P8が径0.23m・深さ0.10mを測る。P1からP4までが主柱穴であり、P1-P2が4.09m、P2-P3が3.73m、P3-P4が4.03m、P1-P4が3.60mを測る。東壁下と考えられる壁溝は幅0.23～0.41m・深さ0.07～0.16mを測る。

本址からの出土遺物はなく、よって帰属時期も不明である。

(14) H16号住居址

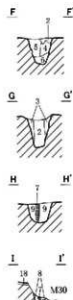
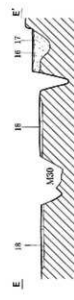
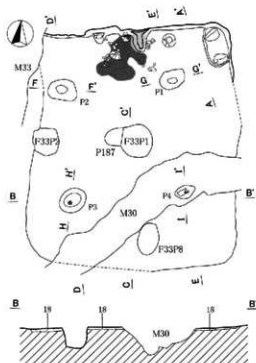
本址は調査区西端のXⅡ-23、XⅧ-3Grに位置する。F7号掘立柱建物址と重複関係にあるが、本址の方が古い。形態は不明である。規模は検出された南北軸が2.31m、東西軸が0.78mで、面積は検出部分で1.81㎡を測る。検出された壁には壁溝があり、規模は幅0.07～0.14m・深さ0.02～0.04mを測る。ピットは4か所検出され、規模はP1が径0.19m・深さ0.33m、P2が径0.18m・深さ0.30m、P3が径0.15m・深さ0.18m、P4が径0.14m・深さ0.16mである。

本址からの出土遺物は非常に少なく、2点の土器を図示した。1は鉢で2は甕である。本址の所産時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

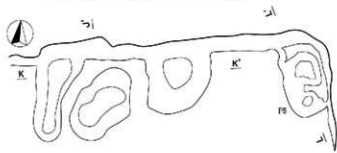
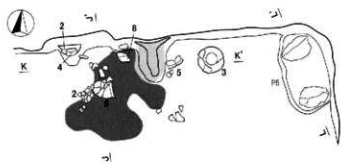


第10表 H16号住居址出土遺物観察表

No.	種類	規格	法 量		成 形 ・ 産 量 ・ 文 様		推 定 産 地 () 残 存 地 () 丸 塚 ●		
			口徑(奥)	底径(輪)	底径(厚)	内 面	外 面	産 者	出土位置
1	赤土 鉢	(15.0)	-	(19.6)	ミガキ・赤色磁粉	ミガキ・赤色磁粉	朝霧集灰土 (1遺跡)	藤岡灰土	戸部・高野
2	赤土 甕	-	-	-	ハク軟工具によるナデ	ナデ・ミガキ	朝霧集灰土 (2遺跡)	藤岡集灰土	朝霧・同前・高野



0 703.1m
(1:300) 2m



カマド

0 703.1m
(1:300) 1m

- 1.黒褐色土(10YR3/2)しまりやや強く、粘性やや弱い、軽石を含む。壁上・灰化物を少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、ロームを少量含む。
- 3.灰黄褐色土(10YR6/2)しまり・粘性やや弱い、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 4.暗灰色土(10YR4/1)しまり・粘性やや弱い、黒褐色土ブロックを多量に含む。
- 5.灰黄褐色土(10YR6/2)しまりやや強く、粘性やや弱い、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 6.灰黄褐色土(10YR6/2)しまりやや強く、粘性やや弱い、黒褐色土を多量に含む。
- 7.黒色土(10YR2/1)しまりやや強く、粘性やや弱い、小ロームブロックを少量含む。柱頭。
- 8.明黄褐色砂質土(10YR7/6)しまり・粘性弱い、黒色土ブロックを少量含む。
- 9.にじみ・黄褐色土(10YR6/4)しまり・粘性弱い、黒色土ブロックを少量含む。
- 10.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、小ロームブロックを少量含む。
- 11.黒色土(10YR2/1)泥。
- 12.灰黄褐色土(10YR4/2)しまり・粘性強い、黒土ブロックを多量に含む。粘土層。
- 13.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性強い、粘土層。
- 14.灰黄褐色土(10YR4/2)灰黄褐色粘土・黒土ブロックを少量含む。
- 15.黒褐色土(10YR3/1)しまり強く、粘性やや弱い、ロームブロック・粘土を少量含む。
- 16.黒褐色土(10YR3/1)しまり強く、粘性やや弱い、ロームブロック・粘土を少量含む。
- 17.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、ロームブロックを多量に含む。
- 18.明黄褐色土(10YR7/6)黒色土ブロックを少量含む。

第29図 H17号住居址実測図

(15) H17号住居址

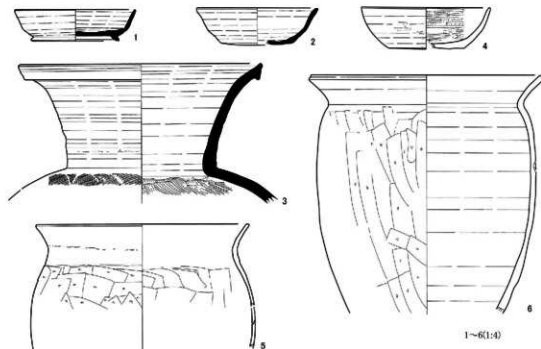
本址は調査区西側のX I -20・25Grに位置する。残存状態は南側が圍場整備により遺構上面が削平され、住居掘り方とピットが残存しているのみである。重複はF33号掘立柱建物址とM30・33号溝状遺構、単独ピットとあり、いずれの遺構よりも本址が古い。

形態は南北に長軸を持つ長方形で、面積は検出部分で20.53㎡を測る。カマドは北壁につくられている。規模は長軸4.95m、短軸4.26mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナーで0.20mを測る。ピットは5か所検出された。P1からP4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。P5内からは大型の縄が並ぶように配置されていた。ピットの柱間はP1-P2が2.33m、P2-P3が2.40m、P3-P4が2.47m、P1-P4が2.36mを測る。P3とP4は柱痕が確認された。ピットの規模はP1が径0.57m・深さ0.68m、P2が径0.61m・深さ0.56m、P3が径0.60m・深さ0.43m、P4が径0.45m・深さ0.21m、P5が径0.83m・深さ0.10mを測る。床はカマド周辺が硬化化しており、0.02～0.39mの厚みで貼られていた。

カマドは北壁中央につくられており、煙道が壁から飛び出さないタイプである。袖部は右側が残存しており、粘質の強い粘土層で構築されていた。顕著な火床部は検出されず、炭化物層がカマド内に広がっていた。カマド掘り方は両袖部が深さ0.09～0.20mで掘り込まれていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺とカマド内からまとまって出土した。特に3で図示した須恵器甕の口縁部は、カマド脇に正位で置かれたような状態で出土し、置き台のような状態であった。1は須恵器高台坏である。2は須恵器坏で袖部とカマド内より出土した。3は須恵器甕の口縁部から頸部であり、口縁部は全周する。4は土師器坏であり、2の須恵器坏と同じようにカマド袖部から出土した。5と6は土師器甕で、6は所謂「ロクロ甕」である。

これらの出土遺物から本址は8世紀後半から9世紀初頭の所産時期と考えられる。



第30図 H17号住居址出土遺物実測図

第11表 H17号住居址出土遺物観察表

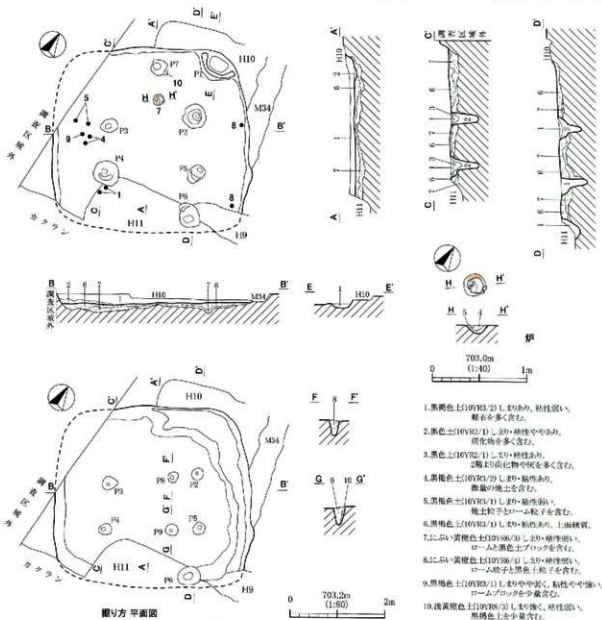
(cm)

No.	種別	形状	寸法			成形・器態・文様		推定産() 検出層() 丸底()		
			口径(径)	底径(径)	器高(厚)	内面	外面			
1	須恵器	高台坏	(12.8)	(9.4)	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底面手持ちヘラケズリ→高台貼付	図録未測	F6	
2	須恵器	坏	(12.6)	(7.7)	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底面削削ヘラ切り	図録未測		
3	須恵器	甕	26.0	-	(14.0)	ロクロナデ	頸部ハケナデ	口縁ハケナデ	完全実測	
4	土師器	坏	(13.6)	(6.0)	(4.2)	ロクロナデ→イガキ	ロクロナデ→底面糸切り後ナデ→イガキ	図録未測		
5	土師器	甕	(22.7)	-	(13.2)	ロクロコナデ→頸部ヘラナデ	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	図録未測	II区	
6	土師器	甕	(24.6)	-	(23.2)	ロクロナデ	ロクロナデ→胴部ヘラケズリ→ヘラナデ	図録未測	カマド心3ヶ所 III区	

(16) H18号住居址

本址は調査区西端のXⅡ-17・18Grに位置する。残存状態は南側をH9.10号住居址に削平されているが、掘り方検出時に南壁の立ち上がりを確認できたため、ほぼ住居址の全容が把握できた。新旧関係はH9.10.11号住居址及びM34号溝状遺構と重複関係にあり、いずれの遺構よりも本址の方が古い。

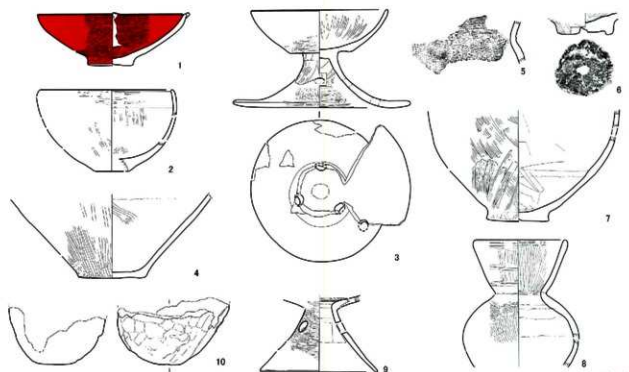
形態は方形を呈する。規模は南北軸が推定で3.84m、東西軸が3.96mを測る。面積は先に述べたように、南壁で掘り方時に住居址立ち上がりが検出されたことから推定で13.92㎡を測る。床は全体に硬質で、特に炉周辺部が顕著であった。床は全体に貼られており、床の厚みは0.04～0.25mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、北壁中央部で0.17mを測る。ピットは掘り方検出時も含め9か所が確認された。P1は貯蔵穴、P2～P5は主柱穴、P7は棟持柱と考えられる。ピットの規模はP1が長径0.57m・深さ0.09m、P2が径0.52m・深さ0.49m、P3が径0.38m・深さ0.59m、P4が径0.57m・深さ0.56m、P5が径0.41m・深さ0.59m、P6が径0.60m・深さ0.41m、P7が径0.37m・深さ0.09m、P8が0.24m・深さ0.33m、P9が径0.27m・深さ0.46mを測る。ピット間の距離はP2-P3が1.91m、P3-P4が0.96m、P4-P5が2.04m、P2-P5が1.15mを測る。なお、掘り方検出時に確認されたP8とP9は、配置から主柱穴の補助穴と考えられる。



炉は北壁より検出された、形態は円形で内部から図示した7の甕が置かれた状態で出土した。所謂「土器敷き炉」である。炉の規模は径0.24m・深さ0.09mで、土器の下には顕著な焼土が確認された。住居址の掘り方は、壁際が一段高くなる掘り方で、特に東壁側が顕著であった。

本址からの遺物は、住居址規模からすると床面を中心に比較的多く出土した。1は鉢である。口縁部の一部に片口の痕跡が残る。内外面ともに赤彩されている。2も鉢であるが1と形態が異なり、半球状の形である。赤彩は行われておらず、丁寧なミガキが施されている。3は小型高坏であり、脚部に上段で3か所、下段に1箇所の穿孔が確認できる。下段の穿孔も3か所か。4は蓋の胴部下半から底部の破片である。5は甕で頸部に櫛描簾状文、胴部と口縁部に櫛波状文が施されている。6は甕の底部と考えられる。底部外面には成形時に意図的にできたと考えられる窪みがある。7は甕であり、炉に使われていた。胴部下半から底部にかけて残存する。外面には細かなハケ目の残るナデが施され、底部にはミガキがある。8は小型丸底甕である。底部を欠損するがほぼ全容を把握できる。口縁部にはやや粗いがココ方向のミガキがある。9は小型器台で口縁部を欠損する。10は土製品と考えられるが用途は不明である。

これらの出土遺物より本址は在地の箱清水式土器がほぼなくなり、東海及び畿内系土器が主体を占める古墳時代前期中葉の時期と考えられる。



第32図 H18号住居址出土遺物実測図

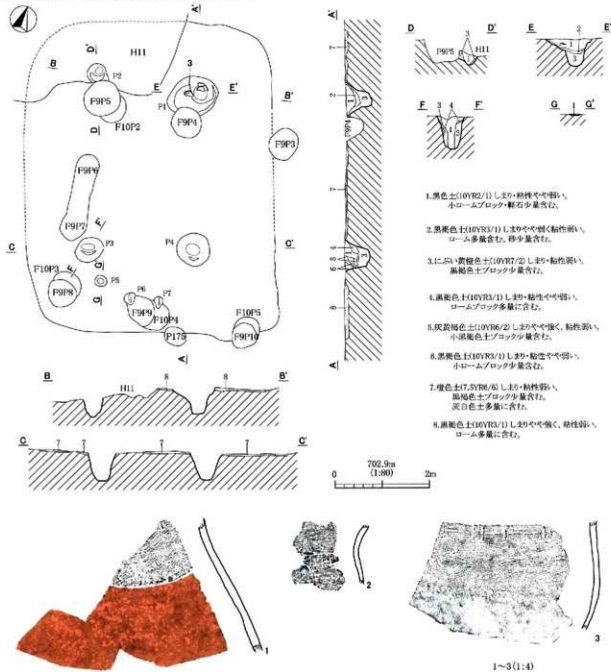
第12表 H18号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	種類	造 型			成形・磨製・文様		埋蔵層(○) 残存層(●) 丸底●	
			口径(高)	底径(高)	胴高(厚)	内 面	外 面	表 意	出土位置
1	物生	鉢	(15.8)	4.8	5.6	ミガキ→赤色塗彩	口縁ミガキ→赤色塗彩 甕部ナデ	完全実測	
2	古式土師	鉢	(14.2)	(3.8)	8.7	ミガキ	ミガキ	図録実測 磨製	Ⅱ区 IV区 IV区ホリ方
3	古式土師	高坏	14.5	(18.7)	19.5	何部ミガキ 胴部ミガキ	ハケ目→ミガキ→透し穿孔(焼成前)	完全実測 磨製	Ⅱ区 Ⅲ区ホリ方
4	古式土師	蓋	-	7.2	(8.9)	ハケ目 磨製	胴部ミガキ 底部ミガキ	完全実測	Ⅱ区 Ⅲ区
5	物生	甕	-	-	-	ミガキ	櫛波簾状文 櫛波状文	磨製実測	
6	古式土師	甕	-	5.8	(2.2)	ヘラナデ	ナデ	完全実測	Ⅱ区
7	古式土師	甕	-	6.6	(11.3)	ヘラナデ	胴部ハケ目 底部ミガキ	完全実測	Ⅱ区 Ⅲ区
8	古式土師	小型丸底	(10.0)	-	(12.5)	口縁ミガキ	ミガキ	完全実測	Ⅰ区 Ⅱ区 IV区
9	古式土師	器台	-	(12.5)	(8.1)	ミガキ	胴部コナデ→ヘラナデ	完全実測	Ⅱ区ホリ方 Ⅲ区
10	土製品	不明	(12.0)	(7.1)	(16.2)		ナデ		

(17) H19号住居址

本址は、調査区の中央西端のXⅡ-21・22、XⅧ-1・2Grに位置する。残存状態は遺構上面を圍場整備により削平され住居壁は確認されず、貼り床の範囲とピットが確認されたのみである。重複関係はH11号住居址とF9.10号掘立柱建物址があり、いずれの遺構よりも本址が古い。



第33図 H19号住居址及び出土遺物実測図

第13表 H19号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	類別	種類	法量			形状・残存・文様			測定値() 残存値() 丸底●	出土位置
			口径(深)	底径(深)	高さ(厚)	内面	外面	備考		
1	弥生	土	-	-	-	楕円	ヒガキ→赤色土	網縷葉状文 網縷波状文 ヘラ歯縁平行線文	断面実測	
2	弥生	土	-	-	-	ヒガキ	ヒガキ	網縷葉状文 網縷波状文	断面実測	P1
3	弥生	土	-	-	-	ヒガキ	ヒガキ	網縷葉状文(逆巻) 網縷波状文	断面実測	

本址の形態は南北方向に長軸を持つ長方形と考えられる。規模は残存部で長軸6.66m、短軸5.03mで、面積は32.77㎡を測る。炉は検出されなかった。ピットは7か所検出された。P1～P4が主柱穴、P6とP7は出入り口施設と考えられる。ピットの規模はP1が径1.11m・深さ0.59m、P2が残存で径0.48m・深さ0.45m、P3が径0.61m・深さ0.68m、P4が径0.72m・深さ0.56m、P5が径0.25m・深さ0.06m、P6が残存径0.26m・深さ0.41m、P7が残存径0.21m・深さ0.51mを測る。床は硬質面がすでに削平されていたが、貼床の厚みとして0.13mが確認された。

本址からの出土遺物は非常に少なく、P1からの出土がほとんどである。図示した遺物は3点で、1は壺の頸部から胴部であり、赤彩が確認された。頸部の文様は櫛描簾状文と櫛描波状文をへら描横線文で区画している。2と3は甕の破片であり、いずれも櫛描簾状文と櫛描波状文が施文されている。

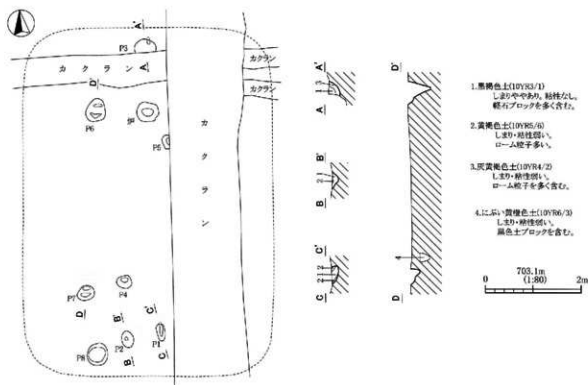
これらの遺物から本址は弥生時代後期の範疇として捉えられる。

(18) H20号住居址

本址は調査区中央部のXV-10・15、XVI-6・11Grに位置する。残存状況は圃場整備により削平を受け非常に悪い。検出された部分は炉とピットのみである。住居の形態はピットの配置から南北に長軸を持つ長方形と考えられる。規模は推定で南北軸7.28m、東西軸4.75mを測る。面積は推定で32.54㎡を測る。

ピットは8か所確認でき、P6とP7が主柱穴で、ピット間距離は3.87mを測る。P1とP2が出入り口施設、P3が棟持柱と考えられる。ピットの規模はP1が径0.37m・深さ0.17m、P2が径0.36m・深さ0.18m、P3が残存で径0.47m・深さ0.52m、P4が径0.33m・深さ0.20m、P5が残存で径0.30m・深さ0.09m、P6が径0.50m・深さ0.47m、P7が径0.38m・深さ0.17m、P8が径0.49m・深さ0.12mを測る。このうちP1とP2とP7はH2号住居址で述べたようにピット掘り方が南西方向にずれている。炉は主柱穴間で確認され、わずかに焼土が検出された。掘り込み規模は長径0.47m・短径0.38m・深さ0.08mを測る。

本址からの出土遺物は少なく、炉内より弥生壺破片2点とP5より壺破片2点が出土しているのみである。いずれも小片のため図示はできなかったが、これらの壺破片は箱清水式土器の範疇で捉えられるものであり、ピット等の配列から、本址は弥生時代後期に含まれると考えられる。

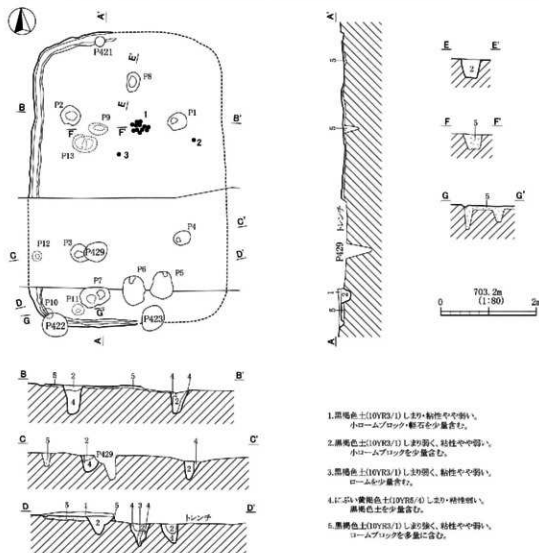


第34図 H20号住居址実測図

(19) H21号住居址

本址は調査区西側のX I-13・18・19Grに位置する。残存状況は住居址東側が岡場整備により削平されている。形態は南北方向に長軸を持つ長方形で、長軸方位はN-2°-Eを測る。規模は長軸6.08m、短軸3.74mで、面積は推定で21.67㎡を測る。炉は顕著な焼土の焼けこみ等は確認されなかったが、P1とP2間に土器の出土が集中する範囲があり、この場所が炉と考えられる。壁の残存状況は非常に悪かったが、住居南西コーナー部で0.06mを測る。壁溝は壁が検出された部分は全周するように発見され、規模は幅0.16~0.23m、深さ0.02~0.05mを測る。ピットは掘方も含め13か所が確認された。P1からP4が主柱穴、P5とP6が入り口施設、P8が棟持柱と考えられる。各ピットの規模はP1が径0.42m・深さ0.45m、P2が径0.43m・深さ0.46m、P3が径0.42m・深さ0.35m、P4が径0.37m・深さ0.39m、P5が径0.59m・深さ0.51m、P6が径0.62m・深さ0.62m、P7が径0.63m・深さ0.30m、P8が径0.43m・深さ0.41m、P9が径0.40m・深さ0.35m、P10が径0.23m・深さ0.51m、P11が径0.26m・深さ0.29m、P12が径0.21m・深さ0.30m、P13が径0.51m・深さ0.32mを測る。本址のピットで横ずれを起こしているものは確認されなかった。床は検出された部分は軟質であり、床の厚みは0.03~0.10m程貼られており、掘り方はほぼ平坦であった。

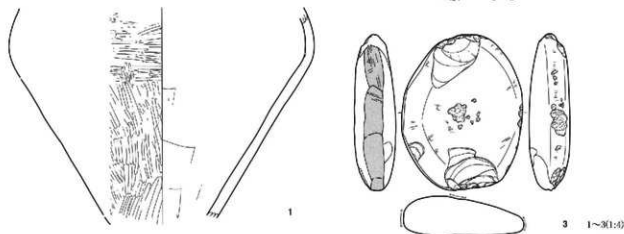
本址からの出土遺物は少なく、先にも触れたが炉推定位置と考えられる付近からまとめて出土した土器がほとんどである。図示した遺物は3点である。1は壺の胴部下半である。炉の推定位置から小片の状態で出土した。2は甕の口縁部でP1脇から出土した。頭部に櫛描簾状文と胴部と口縁部に櫛描波状文が施されている。3は顕著な磨り面を



第35図 H21号住居址実測図

持つ石器で、住居址ほぼ中央の床面上から出土した。
側面と中央部に蔽き痕がある。

これらの出土遺物より本址は弥生時代後期に位置すると考えられる。

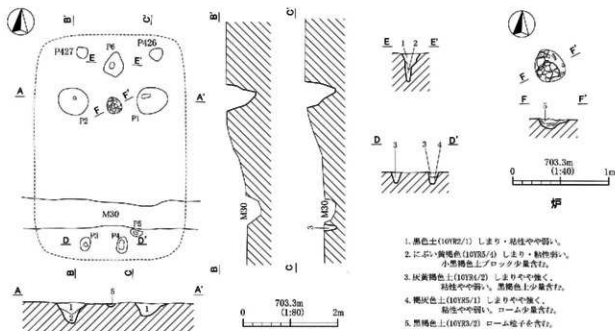


第36図 H21号住居址出土遺物実測図

第14表 H21号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	副種	証 量			形 状 ・ 図 案 ・ 文 様		埋 定 層 () 埋 存 層 ()		丸 籠 印
			口徑(長)	底徑(幅)	柄長(厚)	内 面	外 面	溝 槽	出土位置	
1	弥生	産	-	-	(22.8)	ヘウナヅ	ヒガキ	埋定層	6F	
2	弥生	産	-	-	-	ヒガキ	ヒガキ 彫造線状文 彫造線状文	埋定層		
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	形 状	発 見	出土位置	
3	磨・緑石	硬質砂岩	18.5	12.7	4.3	1276.75	全周にすり 上下層部に彫刻線	飛行によるものか 正面と右側に縦行痕 左側に縦取り状のすり面		



第37図 1122号住居址実測図

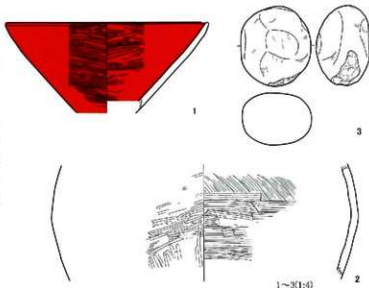
1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性やや弱い。
2. にぶい黄褐色(10YR5/5) しまり・粘性弱い。
小黑褐色土ブロック少量含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや強く。
粘性やや弱い。黒褐色土少量含む。
4. 黄褐色土(10YR5/1) しまりやや強く。
粘性やや弱い。ローム少量含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を含む。

(20) H22号住居址

本址は、調査区西側のX I - 19・24Grに位置する。残存状況は非常に悪く、炉と考えられる土器が集中して出土する範囲と、主柱穴と棟持柱が検出されたのみで、壁や床面等は圃場整備の削平等で検出されなかった。

形態は、出入り口施設のビットと棟持柱の配置から推定すると、南北に長軸をもつ長方形で、長軸方位はN-2°-Wを示す。規模は推定で長軸長4.75m、短軸長3.22mで、面積は14.38㎡を測る。ビットは6か所検出され、P1とP2が主柱穴でビット間が1.51m、P3とP4が出入り口施設で、ビット間が0.77m、P6が棟持柱と考えられる。ビットの規模はP1が径0.67m・深さ0.66m、P2が径0.65m・深さ0.66m、P3が径0.30m・深さ0.24m、P4が径0.36m・深さ0.27m、P5が0.27m・深さ0.27m、P6が径0.53m・深さ0.66mを測る。柱痕等は確認されなかった。炉は北側の主柱穴間にあり、顕著な焼土は検出されなかったが、図示した2の壺胴部が破砕した状態で出土し、所謂「土器敷き炉」の形態と考えられる。

本址からの出土遺物は非常に少なく、図示可能なものは3点であった。1は赤彩が施された鉢であり、P1から出土した。2は前述したように炉からの出土であり二次焼成を受けている。3は磨り面と敲き痕がある石器で、炉内より出土している。これらの出土遺物から本址は弥生時代後期に位置すると考えられる。



第38図 H22号住居址出土遺物実測図

第15表 H22号住居址出土遺物観察表

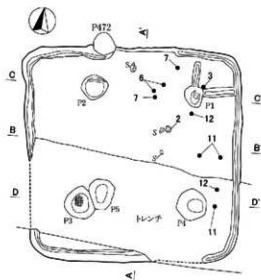
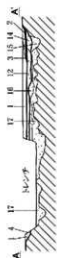
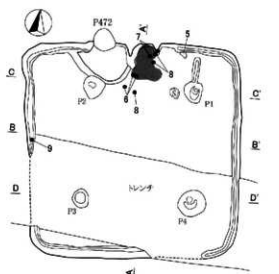
(cm)

No.	種別	器種	法 量		成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値() 残存値() 丸出し			
			口径(長)	底径(短)	内 面	外 面	備 考	出土位置		
1	弥生	鉢	(21.6)	-	0.67	ミガキ一赤色塗彩	ミガキ一赤色塗彩	昭和36美	P1	
2	弥生	壺	-	-	(12.3)	ヘケ目	ミガキ	昭和36美	炉	
No.	器 種	材 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出 土 位 置		
3	磨・敲石	花崗岩	8.5	7.3	5.6	499.96	全体にすり 下部に磨打痕			炉

(21) H23号住居址

本址は、調査区の西側X I - 13Grに位置する。残存状態は住居址南側がトレンチによって削平されている他は良好である。形態は方形である。長軸方位はN-9°-Wを示す。規模は南北長軸4.19m・東西短軸4.17m、面積は17.33㎡を測る。カマドは北壁中央に造られている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁中央で0.16mを測る。床はカマド周辺が硬質であった。なお、本址は床の張り替えが確認できたが、柱穴や住居本体の拡張は確認できなかった。壁溝は住居を巡るように検出され、幅0.16～0.20m・深さ0.05～0.08mを測る。ビットは掘り方時の検出も含め5か所が確認できた。P1～P4は主柱穴と考えられる。柱間はP1-P2間が2.21m、P2-P3が2.39m、P3-P4が2.33m、P1-P4が2.29mをそれぞれ測る。各ビットの規模はP1が径0.47m・深さ0.35m、P2が径0.49m・深さ0.46m、P3が径0.40m・深さ0.18m、P4が径0.60m・深さ0.43m、P5が径0.66m・深さ0.30mをそれぞれ測る。なお、床張り替えにあたりP1のみ掘り直しが行われておらず、壁際に向かって北方向と東方向に所謂、間仕切り溝が検出された。また、掘り方検出時にこの間仕切り溝に囲まれた部分が長軸1.08m・深さ0.52mの規模で掘り込まれているのが確認できた。検出位置より、貯蔵穴の埋戻し址とも考えられる。

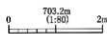
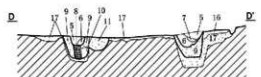
カマドは北壁中央につくられており、左右の袖部が検出された。しかし、顕著な火床部は確認できず、焼燃部と考えられる範囲全体に炭化物層が検出された。煙道部は壁から飛び出さないタイプのものである。また、カマド西側には一部硬質の床が盛り上がっている部分が確認された。



第2床平面図



掘り方平面図



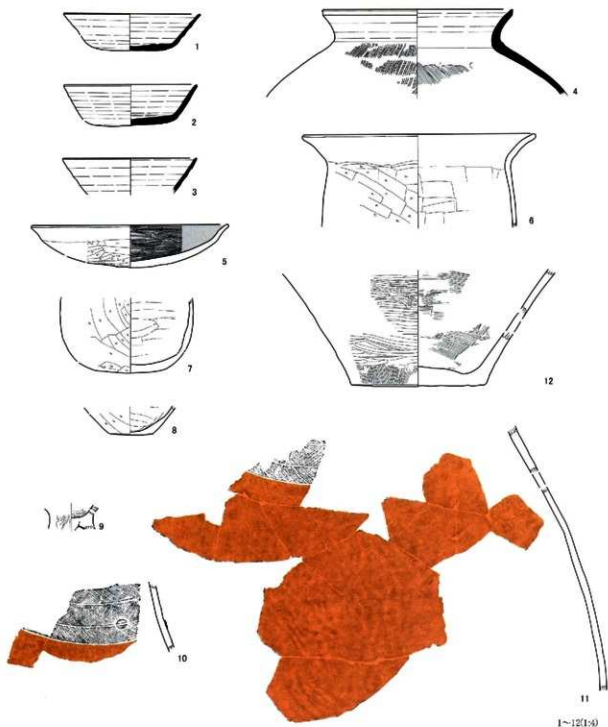
1. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや強い、礫石少量含む。
2. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性やや強い、炭と黒土ブロック多量含む。
3. 黒色土(10YR2/1) 炭化物層。
4. 黒色土(10YR2/1) しまり弱く、粘性やや強い、ローム・砂少量含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや強い、小ロームブロック少量含む。
6. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや強い、小ロームブロック多量含む。
7. におい・黄褐色土(10YR6/4) 黒褐色土ブロック少量含む。
8. 黒褐色土(10YR3/1) しまり弱く、粘性やや強い、ロームブロック・黒色土ブロック多量含む。
9. におい・黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性やや強い、黒色土ブロック多量含む。

10. におい・黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性やや強い、黒色土ブロック少量含む。
11. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや強い、ロームブロック少量含む。
12. 黒褐色土(10YR3/1) しまりやや強く、粘性弱い、ロームブロック・炭化物多量含む。
13. 黒色土(10YR2/1) しまり弱く、粘性強い、礫石少量含む。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや強い、ロームブロック・黒褐色土ブロック多量含む。
15. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性やや強い、小ロームブロック少量含む。
16. 黒褐色土(10YR3/1) しまり強く、粘性やや強い、ローム多量含む。
17. におい・黄褐色土(10YR6/4) しまり弱く、粘性やや強い、黒色土ブロック多量含む。

第39図 H23号住居址実測図

本址からの出土遺物は比較的多く、特にカマド周辺と住居址東側から小片ではあるが出土した。また、図示した9～12は弥生土器であり、本址に伴うものではないが、床張り替えの土の中より出土しているものが多く、床土搬入時に周辺から持ち込まれたと考えられる為図示した。

1～3は須恵器環である。1と2は底部が回転ヘラケズリである。4は須恵器甕であり、口縁部から頸部までが残存している。P4から出土した。5は土器器皿としたが環の範疇でも捉えられる。内面は黒色処理が行われている。



第40図 H23号住居址出土遺物実測図

6は土師器甕で、カマド周辺より出土した。7と8は土師器の小型甕底部と考えられ、7は丸底タイプのものである。いずれも外面ケズリが施されている。前述したように9～12は弥生後期の箱清水式土器である。9は無彩の蓋、10～12は壺であり、10と11は頸部にヘラ描横走平行線文とヘラ描連続斜走文が施されている。また10は平行線文にかかるとよに円形貼付文が確認できる。いずれも外面は赤彩が施される。

これらの遺物より本址は8世紀前半に位置づけられると考えられる。

第16表 H23号住居址出土遺物観察表

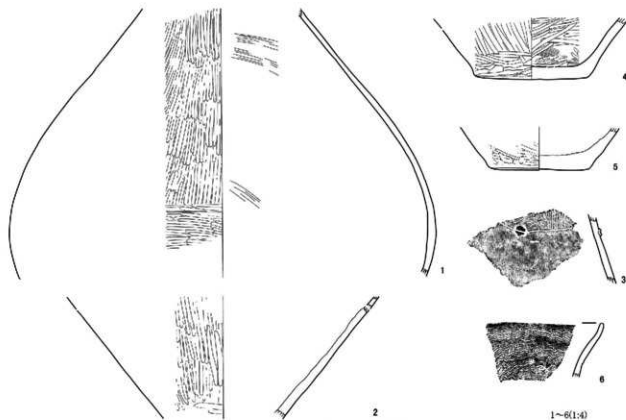
(cm)

No.	種別	図号	活 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		埋定層() 埋付層() 出土位置
			口径(長)	底径(幅)	底高(厚)	内 面	外 面	
1	瓦葺部	併	(14.4)	7.7	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→瓦葺部→ヘラ切り	完全実測 Ⅱ区
2	瓦葺部	併	14.1	8.7	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ→瓦葺部→ヘラ切り	完全実測 底部層 Ⅱ区
3	瓦葺部	併	(14.2)	-	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	図転実測 Ⅰ区(層) P1
4	瓦葺部	兼	(20.6)	-	(9.3)	ロクロナデ→銅線出で具旗→ヘラナデ	ロクロナデ→銅線タキ目	図転実測 P4
5	土師器	並	(20.7)	19.6	4.5	ミガキ→黒色粘土	(1)縁コロナデ→底部ヘラケズリ	完全実測 Ⅰ区
6	土師器	兼	(24.7)	-	(10.0)	口縁コロナデ→銅線ヘラナデ	口縁コロナデ→銅線ヘラケズリ	図転実測 Ⅰ区
7	土師器	小形兼	-	7.1	(3.0)	ナデ	ヘラケズリ	完全実測 図転実測 3層
8	土師器	兼	-	4.6	(3.0)	ヘラナデ	銅線ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	完全実測
9	弥生	兼	-	-	-	ミガキ	ミガキ	図転実測
10	弥生	兼	-	-	-	ハケ目→コロナデ	ミガキ→赤色塗部 ヘラ指線銅線走文 ヘラ指線走平行線文 鬚付文	断面実測 Ⅳ区
11	弥生	兼	-	-	-	ハケ目	ミガキ→赤色塗部 ヘラ指線銅線走文 ヘラ指線走平行線文	断面実測 Ⅱ区 Ⅳ区 Ⅰ区ホリ方
12	弥生	兼	(14.0)	(12.3)	-	ハケ目 ハケナデ	ハケ目→ミガキ	図転実測 Ⅳ区 P4

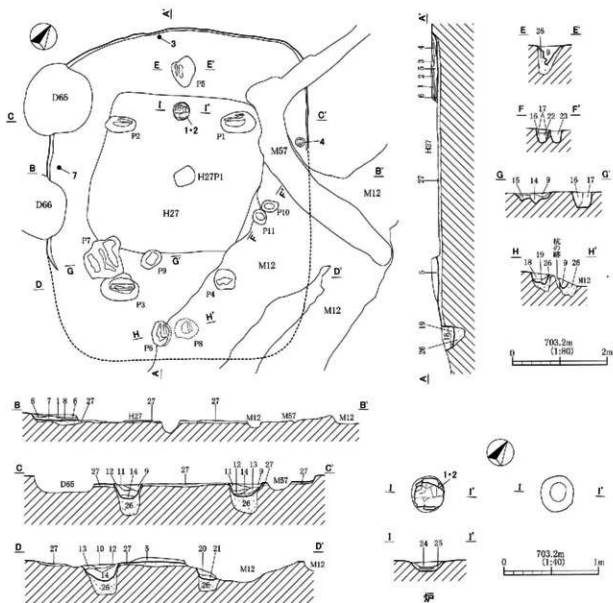
(22) H24号住居址

本址は調査区西側のXⅡ-16・17・21Grに位置する。重複関係はH27号住居址、D65・66号土坑、M12・57号溝状遺構とあり、いずれの遺構よりも本址が古い。残存状態は住居址中央部をH27号住居址が削平し、住居址東側が各溝状遺構、南側が圃場整備によりそれぞれ削られており、あまりよくない。

住居の形態はピットの配置から推定して長方形と考えられる。規模は長軸長6.86m、短軸長5.40mで、面積は推定で34.23㎡を測る。長軸方位はN-30°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁で0.18mを測る。床は残存している部分は硬質でよく踏み固められていた。ピットは11か所確認された。P1～P4が主柱穴、P5は棟持柱、P6とP8が出入り口施設と考えられる。本址のピットは掘り方がいずれも楕円形が多く、所謂「五平柱」の特徴を持つ。



第41図 H24号住居址出土遺物実測図



- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性弱い。軽石・砂少量含む。
- 2.明黄褐色土(10YR6/6)しまりやや強く、粘性弱い。黒褐色土多量含む。
- 3.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性やや弱い。軽石少量含む。
- 4.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性やや弱い。
にぶい黄褐色土ブロック少量含む。
- 5.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い。小ロームブロック少量含む。
- 6.黒色土(10YR2/1)しまり弱く、粘性やや強い。ローム少量含む。
- 7.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い。砂・ローム少量含む。
- 8.黒褐色土(10YR3/2)しまり・粘性やや弱い。ローム多量含む。
- 9.黒褐色土(10YR3/2)しまり弱く、粘性やや強い。小ロームブロック少量含む。
- 10.黒褐色土(10YR3/2)1層に粘土ブロック含む。
- 11.明黄褐色土(10YR6/6)しまり弱く、粘性やや弱い。黒褐色土少量含む。
- 12.黒色土(10YR2/1)しまり弱く、粘性やや強い。ロームブロック少量含む。
- 13.黒褐色土(10YR3/1)しまり弱く、粘性やや弱い。小ロームブロック少量含む。
- 14.黒褐色土(10YR3/2)しまりやや強く、粘性弱い。ローム多量含む。
- 15.にぶい黄褐色土(10YR7/6)しまり強く、粘性弱い。
黒褐色土ブロック少量含む。

- 16.灰黄褐色土(10YR4/2)しまり弱く、粘性やや弱い。
小ロームブロック少量含む。
- 17.灰黄褐色土(10YR4/2)しまり・粘性やや強い。ローム多量を含む。
- 18.灰黄褐色土(10YR4/2)しまりやや強く、粘性やや弱い。ローム少量含む。
- 19.灰黄褐色土(10YR4/2)しまり・粘性やや弱い。小ロームブロック少量含む。
- 20.黄褐色土(10YR4/4)しまり弱く、粘性やや強い。
ロームブロック少量・灰黄褐色土多量を含む。
- 21.黄褐色土(10YR4/4)しまり弱く、粘性やや強い。ローム多量を含む。
- 22.灰黄褐色土(10YR4/2)しまり弱く、粘性やや強い。
ローム多量を含む。
- 23.灰黄褐色土(10YR4/2)しまりやや強く、粘性やや弱い。
ロームブロック多量を含む。
- 24.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性弱い。炭化物物多量を含む。
- 25.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性弱い。小ロームブロック少量含む。
- 26.明黄褐色土(10YR6/6)しまりやや強く、粘性弱い。
黒褐色土ブロック少量含む。
- 27.明黄褐色土(10YR6/6)しまり強く、粘性やや弱い。
黒褐色土ブロック多量含む。

第42図 H24号住居址実測図

第17表 H24号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	数量	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		埋 没 状 態 (残 存 部) < 丸 底 部	
			口径(径)	底径(径)	口径(径)	内 面	外 面	表 面	出土位置
1	弥生 甕	-	-	(28.5)	ハタ目	ヒガキ	四輪深割	炉	
2	弥生 甕	-	-	(13.1)	刻線	ヒガキ	四輪深割	宮内 炉	
3	弥生 甕	-	-	-	ヨコナデ	縦線横走平行線文 柳描垂下文	四輪深割 貼付文	御釜深割	
4	弥生 甕	-	11.9	(5.5)	ハタ目→ヒガキ	縦線ヒガキ 長筋ヒガキ	完全深割	御釜深割	
5	弥生 甕少量	-	(10.5)	(4.0)	刻線	縦線ハタ目→ヒガキ 武部ナデ	四輪深割	検出直	
6	弥生 甕	-	-	-	ヒガキ	柳描波状文	御釜深割	1次	

ピットの間隔は、P1-P2が2.35m、P2-P3が3.53m、P3-P4が2.16m、P1-P4が3.46mを測る。ピットの規模は、P1が径0.74m・深さ0.36m、P2が径0.64m・深さ0.49m、P3が径0.80m・深さ0.55m、P4が径0.50m・深さ0.52m、P5が径0.65m・深さ0.57m、P6が径0.52m・深さ0.51m、P7が径1.01m・深さ0.27m、P8が径0.51m・深さ0.47m、P9が径0.48m・深さ0.39m、P10が径0.37m・深さ0.32m、P11が径0.33m・深さ0.30mを測る。

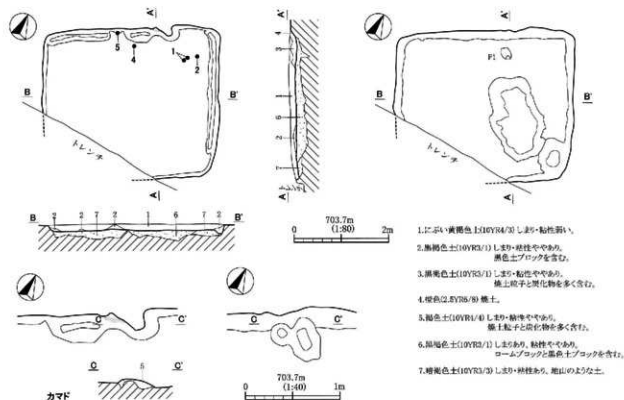
炉は北側主柱間で検出された。顕著な焼土は確認されなかった。形態は円形で、炉掘り方内に土器を敷く、所謂「土器敷炉」の形態と考えられる。炉の規模は径0.39m・深さ0.10mを測る。

本址からの出土遺物は比較的少なく、6点を図示した。1～4は甕で、1と2は炉内からの出土である。3は頸部の破片で、ヘラ描横走平行線文の区画の中に柳描横走線文と柳描垂下文を描き、円形の貼付文を施す。6は甕の口縁部であり、柳描波状文が施されている。

本址はこれらの出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

(23) H25号住居址

本址は調査区北側のV-18・19・23・24Grに位置する。残存状態は南西コーナーを一部欠損する他は良好である。形態は長方形で、北壁東よりにカマドがつくられている。規模は南北長2.98m・東西長3.43mを測る。住居址主軸方位



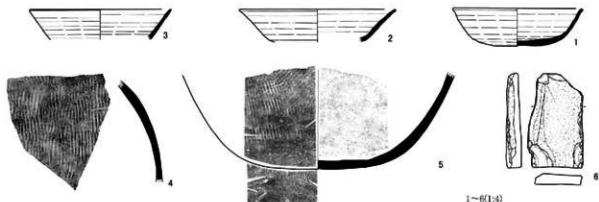
第43図 H25号住居址実測図

はN-24°-Wを示す。面積は推定で9.99㎡を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは0.09～0.15mを測る。床はカマド周辺が特に硬質で、貼床の厚みは0.07～0.16mであった。また、北壁の一部と東壁には壁溝がめぐり、規模は幅0.17～0.20m・深さ0.03～0.07mを測る。ピットは掘り方時に一か所が確認され、規模はP1が径0.28m・深さ0.20mを測る。住居掘り方は南東コーナー部に土坑状の掘り込みが一か所確認され、形態は楕円形で、規模は長軸1.82m・短軸1.07m、深さ0.17mを測る。

カマドは北壁東よりにつられており、煙道部の焼上と右軸の一部が確認された。また、カマド掘り方として径0.47m・深さ0.07mの掘り込みが軸下より検出された。

本址からの出土遺物は比較的少なく、カマド周辺よりまとまって出土した。1～3は須恵器坏である。4と5は須恵器甕であり、いずれもカマド脇から出土した。6は打製石斧で刃部は欠損している。住居掘り方検出時に出土した。

本址はこれらの出土遺物から8世紀前半に位置づけられる。



第44図 H25号住居址出土遺物実測図

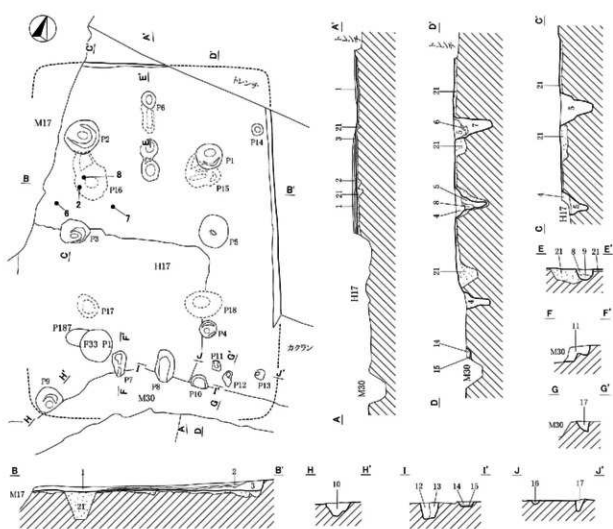
第18表 H25号住居址出土遺物観察表

No.	種別	形状	寸 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		測定値() 検存確() 丸磨(●)	出土位置
			口徑(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	内 面	外 面		
1	須恵器 坏	(13.6)	(8.6)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部中央へタタキ付	同軸実測	Ⅱ区	
2	須恵器 坏	(16.6)	(10.2)	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	同軸実測		
3	須恵器 坏	(13.0)	-	(3.3)	ロクロナデ	自然輪行者	同軸実測	I区 IV区	
4	須恵器 甕	-	-	-	打て具成→ロコナデ	タタキ付	自然輪付着	V-24	
5	須恵器 甕	-	(12.4)	(16.3)	打て具成	タタキ付→ロコナデ	同軸実測		
No.	形 種	原 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	所 属	出土位置	
6	打製石斧	安山岩	16.0	5.7	1.5	130.17	未製品? 正面～左側は自然型か 両側に割傷面	カマド 掘り方	

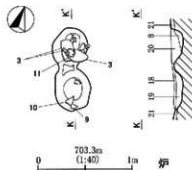
(24) H26号住居址

本址は調査区西寄りのX I-19-20・24・25Grに位置する。残存状態は重複遺構に削平され、一部壁と炉、柱の検出に止まった。重複遺構はH17号住居址、M17.30号溝状遺構、F33号掘立柱建物址であり、いずれの遺構よりも本址が古い。

形態は南北方向に長軸をもつ長方形で、長軸方位はN-18°-Wを示す。規模はいずれも推定で長軸7.23m、短軸4.92m、面積は推定で35.15㎡を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁中央で0.24mを測る。床は炉周辺は硬質であったが、その他の部分は軟質であり、全体に薄く貼床が施されていた。ピットは掘り方検出時のものも含め18か所が検出された。P1からP5が主柱穴と考えられ、南西コーナー部の柱穴は掘立柱建物址により削平されていると考えられる。また、掘方検出時のP15からP18の4本も配置より、建替え前の主柱穴と考えられる。P6は棟持柱、P7とP8は入口施設と考えられる。各ピットの規模はP1が径0.57m・深さ0.81m、P2が径0.75m・深さ0.71m、P3が径0.64m・深さ0.55m、P4が径0.37m・深さ0.57m、P5が径0.71m・深さ0.69m、P6が径0.37m・深さ0.21m、P7が残存で径0.54m・深さ0.35m、P8が残存で径0.69m・深さ0.35m、P9が残存で径0.52m・深さ0.30m、P10が残存で径0.27m・深さ0.10m、P11が径0.25m・



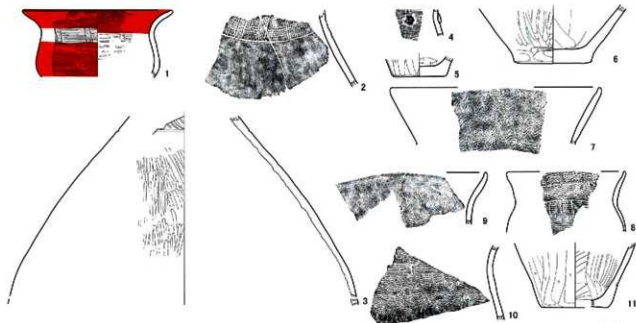
0 703.3m (1:40) 2m



- 15.黒色土(01YR2/1)しまりやや強く、粘性やや弱い、ロームを少量含む。
- 16.黒灰色土(01YR4/1)しまり・粘性やや弱い、小黒褐色土ブロックを多量に含む。
- 17.黒灰色土(01YR5/1)しまり・粘性やや弱い、黒褐色土を少量含む。
- 18.黒色土(01YR2/1)しまり・粘性弱い。

- 1.黒褐色土(01YR3/1)しまり・粘性やや強い、小ロームブロックを少量含む。
- 2.にぶい黄褐色土(01YR6/6)しまり・粘性やや強い、ローム主体、黒色土ブロックを少量含む。
- 3.黒色土(01YR2/1)しまり・粘性やや強い、ロームブロックを少量含む。
- 4.黒褐色土(01YR3/2)しまり・粘性やや強い、ロームブロックを少量含む。
- 5.黒褐色土(01YR3/1)しまり弱く、粘性やや弱い、小ロームブロックを少量含む。
- 6.黒褐色土(01YR3/1)しまり・粘性やや強い、小ロームブロックを多量に含む。
- 7.にぶい黄褐色土(01YR6/6)しまり弱く、粘性弱い、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 8.黒褐色土(01YR3/1)しまり・粘性やや強い、小ロームブロックを少量含む。
- 9.黒褐色土(01YR3/1)しまり・粘性やや強い、ロームを多量に含む。
- 10.灰黄褐色土(01YR4/2)しまりやや強く、粘性弱い、ローム・黒色土を多量に含む。
- 11.灰黄褐色土(01YR4/2)しまり強く、粘性弱い、ロームを多量に含む。
- 12.灰黄褐色土(01YR4/2)しまりやや強く、粘性弱い、ロームブロックを少量含む。
- 13.にぶい黄褐色土(01YR6/6)しまり強く、粘性弱い、ロームを多量に含む。
- 14.にぶい黄褐色土(01YR6/6)しまりやや強く、粘性弱い、礫石を少量含む。
- 19.黒褐色土(01YR3/1)しまりやや強く、粘性やや強い、ロームブロックを多量に、流土ブロックを少量含む。
- 20.黒褐色土(01YR3/1)しまり・粘性やや弱い、黒色土を少量含む。
- 21.にぶい黄褐色土(01YR6/6)しまりやや強く、粘性やや強い、黒褐色土ブロックを多量に含む。

第45図 I126号住居址実測図



第46図 H26号住居址出土遺物実測図

1~11(1:6)

第19表 H26号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	図種	図量		内面	外面	調査	所在地				
			口径(長)	口径(幅)								
1	赤土	鉢	(15.0)	-	(2.2)	ミガキ→赤色染付	櫛縹波状文(2連止)	ミガキ→赤色染付	櫛縹波状文(2連止)	図録実測	IV区 X1-19(山面)	
2	赤土	甕	-	-	-	ハケ目 ミガキ	ミガキ 櫛縹波状文	櫛縹波状文(2連止)	ヘラ櫛縹波状文	ヘラ櫛縹波状文	図録実測	IV区
3	赤土	甕	-	-	(20.1)	刺突	ミガキ	ヘラ櫛縹波状文	ヘラ櫛縹波状文	刺突	図録実測	IV区 X1-20
4	赤土	甕	-	-	-	ミガキ	櫛縹波状文(2連止)	櫛縹波状文	櫛縹波状文	図録実測	IV区	
5	赤土	甕の底	-	(5.8)	(2.1)	ナデ	図録	ヘラナデ→ミガキ	底部ヘラケズリ	図録実測	IV区 外面赤色顔料付着	
6	赤土	甕の底	-	(8.2)	(5.2)	ナデ	図録	底部ミガキ	底部ミガキ	図録実測		
7	赤土	甕	(22.3)	-	(8.1)	ミガキ	櫛縹波状文	櫛縹波状文	櫛縹波状文	図録実測		
8	赤土	甕	(12.0)	-	(8.5)	ミガキ	櫛縹波状文(2連止)	櫛縹波状文	櫛縹波状文	図録実測		
9	赤土	甕	-	-	-	ハケ目	ココナデ→ハケ目	櫛縹波状文	櫛縹波状文	図録実測	U1と接合	
10	赤土	甕	-	-	-	ハケ目→ミガキ	ハケ目→櫛縹波状文(2連止)	櫛縹波状文	櫛縹波状文	図録実測		
11	赤土	甕	-	(7.0)	(8.5)	ヘラナデ ミガキ	図録	ヘラナデ	底部ヘラケズリ	図録実測		

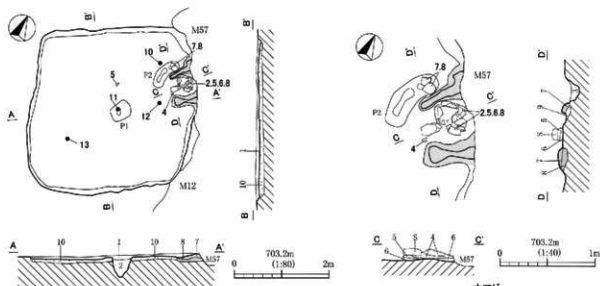
深さ0.09m、P12が径0.33m・深さ0.23m、P13が残存で径0.22m・深さ0.24m、P14が径0.26m・深さ0.11m、P15が径0.78m・深さ0.63m、P16が径1.15m・深さ0.58m、P17が径0.50m・深さ0.17m、P18が径0.79m・深さ0.35mを測る。

炉はP1-P2間に検出された。形態は円形の掘り込みが二つ連なるような状態で、作り変えの様相を示す。規模は長軸0.88m・深さ0.14mを測る。いずれの掘り込みも顕著な焼土は確認されなかった。

本址は先に述べた掘り方時検出のピットを含め支柱ピットの配置や炉の作り変えの状況から、同じ位置での建て替えが推定できる。また、炉・ピット・棟持柱の作り変え方向から、南北壁の拡張が考えられる。

本址からの出土遺物は比較的多く、住居址北西部から多く出土した。図が示したものは11点である。1は鉢であり、赤彩が施されている。頸部に2連止めの櫛縹波状文が施される。2と3は甕の胴部上半から頸部の破片である。2は櫛縹波状文と櫛縹波状文をヘラ櫛縹波状文で区画する。3は頸部にヘラ櫛縹波状文をヘラ櫛縹波状文で区画する。4は甕の頸部に櫛縹波状文と櫛縹波状文に刺突のついた円形貼付文が施されている。5と6は甕の底部である。7から8は甕の破片である。7は口縁部に櫛縹波状文が施されている。8は櫛縹波状文と頸部に櫛縹波状文が施される。9は口縁部の破片であるが、口唇部でやや内湾するタイプの甕である。

これらの出土遺物により、本址は弥生後期後半に位置づけられる。



- 1.黒褐色土(10YR2/1)しまり・粘性やや弱い、軽石少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR2/1)しまり強く、粘性やや強い。
- 3.黒褐色土(10YR2/1)しまり・粘性やや弱い、ルームブロック多量に含む。
- 4.黒褐色土(10YR2/1)しまり強く、粘性やや強い、炭化物粒・遺土ブロック多量に含む。
- 5.黒色土(10YR2/1)しまり強く、粘性やや強い、炭化物多量に含む、火灰?

- 6.黒褐色土(10YR2/1)しまり・粘性やや弱い、小ルームブロック少量含む。
- 7.褐色土(10YR4/1)しまり・粘性強い、黒褐色土ブロック少量含む、粘土。
- 8.灰褐色土(10YR4/1)しまりやや強く、粘性強い、軽石少量含む、粘質土。
- 9.灰褐色土(10YR4/2)しまりやや強く、粘性やや弱い、粘土少量含む。
- 10.黒褐色土(10YR2/1)しまりやや強く、粘性やや弱い、小ルームブロック少量含む。

第47図 H27号住居址実測図

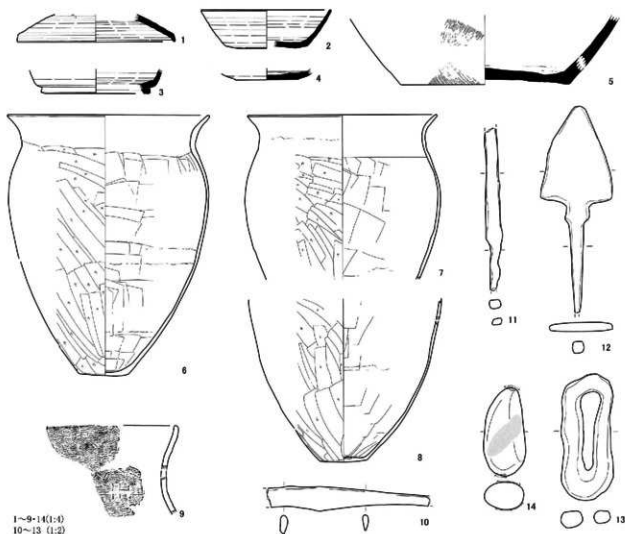
(25) H27号住居址

本址は調査区西側のX II-16Grに位置する。残存状況は東側をM12-57号溝状遺構に一部削平されている他は良好である。形態は方形で、カマドは西壁に作られている。長軸方位はN-65°-Eを測る。住居址の規模は、長軸3.32m、短軸3.24mで、面積は残存で10.11㎡を測る。床はカマド全面から住居中央部にかけて硬質であり、0.06～0.17mの厚みで貼られていた。ピットは2か所検出され、規模はP1が径0.45m・深さ0.35m、P2が径0.70m・深さ0.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高さは西壁中央で0.11mを測る。掘り方はほぼ均一であった。

カマドは西壁やや北寄りに作られている。煙道部は溝状遺構により削平されていたが、両袖が残存していた。袖の規模は右袖が長さ0.53m・袖高さ0.04m、左袖が長さ0.47m・袖高さ0.03mを測る。火床部に顕著な焼土は検出されなかったが、カマドに使用されたと考えられる土師器甕(図示6)が潰れた状態で出土した。

本址からの出土遺物はカマド内やその前面からまとまって出土した。1は須恵器蓋であり、天井部を欠損する。2と4は須恵器坏である。2は底部調整が回転ヘラケズリ、4は糸切り離しが行われている。3は須恵器有台坏である。5は須恵器甕の底部から胴部の破片で、胴部は平行タタキメが残る。カマド内より出土した。6～8は土師器甕で、所謂「武蔵甕」と呼ばれるタイプのものである。いずれもカマド内やカマド周辺から出土した。調整はいずれも外面ヘラケズリ、内面ナデが施されている。9は弥生箱清水期の甕と考えられ、混入遺物である。頸部に5連止めの櫛描籬状文が、口縁部と胴部には櫛描波状文が施されている。10～13は鉄製品で、10は刀子で切先が欠損している。11と12は鉄鏃と考えられ、11は鏃身部が欠損している。12は短頸鏃で、ほぼ完形である。カマド前面から出土した。13は楕円の鉄輪で馬具の一部と考えられる。14は磨りや敲き痕がある石器である。

本址はこれらの出土遺物より8世紀前半の所産と考えられる。



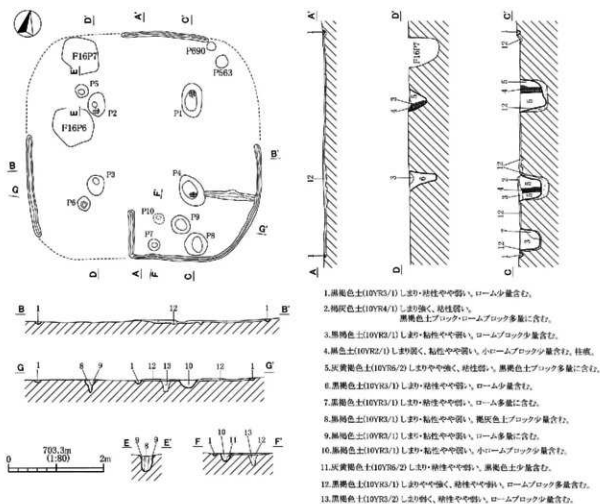
1~9-14(1:1)
10~13 (1:2)

第48図 H27号住居址出土遺物実測図

第20表 H27号住居址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	数量	法 量			成 形 ・ 陶 質 ・ 文 様		推定産() 残存箇() 丸底●	備 考	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 型	外 型			
1	須恵胎 壺	(167)	-	(29)	ロクロナデ	ロクロナデ-天井部付帯ヘラケズリ	同和実測	I区 赤石方		
2	須恵胎 罎	(138)	(8.6)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ-底部切り離し後部帯ヘラケズリ	同和実測	内外正火だすき有	I区	
3	須恵胎 有台罎	-	(11.4)	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ-高台貼付	同和実測	内外正火だすき有	II区	
4	須恵胎 罎	-	(6.6)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ-底部糸切り	同和実測			
5	須恵胎 罎	-	(17.8)	(7.3)	ナデ	自然輪付帯	朝野タタキ目 底部ナデ	自然輪付帯	I区 Ⅱ区	
6	土師胎 壺	(212)	5.2	27.8	口縁コナデ-胴-底部ヘラナデ	口縁コナデ-胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	完全実測	I区 Ⅱ区	Ⅱ57	
7	土師胎 壺	(202)	-	(17.3)	胴部コナデ-口縁コナデ	口縁コナデ-胴部ヘラケズリ	同和実測	Ⅱ区4枚出函	Ⅱ57	
8	土師胎 壺	-	(5.6)	(17.2)	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	同和実測	I区		
9	胎半 壺	-	-	-	ヒガキ コナデ	朝野葉状文(印遺志)	朝野葉状文	赤石実測	Ⅱ区Ⅱ層	
No.	器 種	材	器大長	器大短	器大厚	重 量	形 状		出土位置	
10	刀子	鉄	(8.7)	1.3	0.7	(8.78)				
11	鏃?	鉄	(8.5)	(0.9)	(0.7)	(7.84)	上下欠損			
12	短須弥	鉄	(10.9)	3.8	0.9	(26.60)	基部先端欠損			
13	筒瓦?	鉄	8.7	2.8	1.6	20.83				
14	磨石	輝石安山岩	9.4	4.4	3.0	196.95	正義に磨打痕 上下両面に磨打痕		IV区	



第49図 H130号住居址実測図

(26) H30号住居址

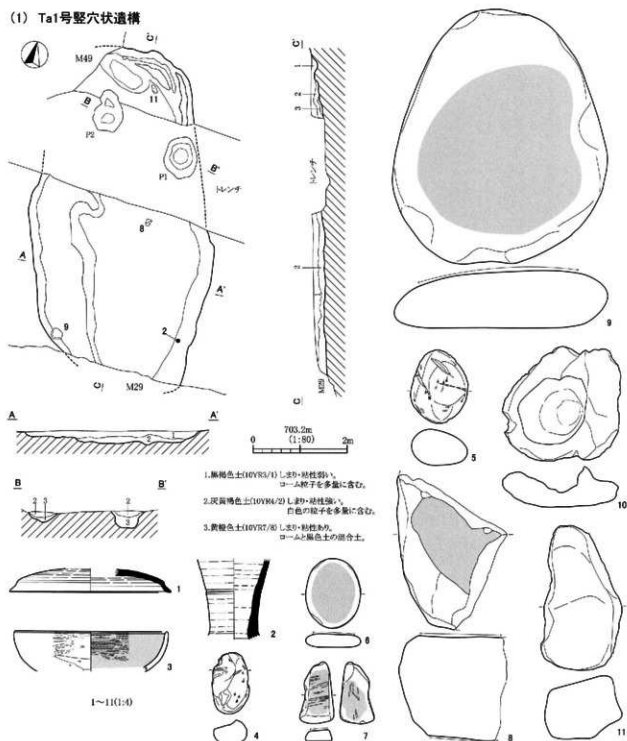
本址は調査区西側のX II-11-12Grに位置する。重複関係はF16号掘立柱建物址があり、本址の方が古い。残存状況は、住居址上面を圃場整備のおりに削平されており、ピットと壁溝の検出に止まっている。形態は方形で、主軸方位はN-14°-Wを測る。規模は南北長4.60m・東西長4.72m、面積は推定で22.22㎡を測る。床は部分的に残存していたが、当時の使用面は削られており硬質部分は不明であった。壁溝は住居南東コーナーと北壁と西壁の一部に検出された。また、南東コーナー部からはピットと住居内部に向けて間仕切り溝と考えられる溝が検出された。これらの溝はいずれも幅は細く、深さも浅い部分が多かった。規模は幅0.08～0.10m、深さ0.03～0.08mを測る。ピットは掘り方も含め10か所が確認された。規模はP1が径0.72m・深さ0.61m、P2が径0.50m・深さ0.42m、P3が径0.43m・深さ0.61m、P4が径0.72m・深さ0.63m、P5が径0.29m・深さ0.36m、P6が径0.31m・深さ0.38m、P7が径0.25m・深さ0.18m、P8が径0.49m・深さ0.45m、P9が径0.42m・深さ0.17m、P10が径0.25m・深さ0.23mを測る。P1～P4が主柱穴で、一部には柱痕も確認された。炉は検出されなかった。

本址からの出土遺物はまったく無く、所産時期は不明であるが、周辺部の検出遺構や住居形態より弥生末から古墳時代前期の住居址と考えられる。

第2節 竪穴状遺構

本節では3基の遺構を報告するが、遺構記号として「Ta」を冠してある。従来より佐久市においては、この遺構略記号を付すものは中世以降の竪穴状の大型掘り込み遺構に使用していた経過がある。今回の報告遺構がいずれも古代に帰属する遺構であることが調査後の検討で判明した為、本来であれば土坑等の名称を付け報告すべきであるが、他の土坑とは明らかに形態が異なる為、違いを表すために今回は「Ta」の記号をそのまま使用する。

(1) Ta1号竪穴状遺構



第50図 Ta1号竪穴状遺構及び出土遺物実測図

本址は調査区中央のX-20・24・25Grに位置する。残存状況は南側をM29号溝状遺構、北西側をM49号溝状遺構に削平されている。形態は南北方向に長い楕円形で、長軸方位はN-9°-Wを示す。規模は長軸6.75m・短軸3.86mで、掘り込み部分の面積は推定で21.77㎡を測る。壁は緩やかに立ち上がり、東側で0.30mの掘り込みを示す。硬質化した床などは確認されなかった。ピットは2か所を確認され、P1が径0.90m・深さ0.38m、P2が径0.90m・深さ0.24mを測る。底面は西側でテラス状の段が確認された。

本址からの出土遺物は覆土中と、壁際からの出土が多かった。1は須恵器蓋であり、返りが外反するタイプのものである。2は須恵器長頸壺の口縁部付近である。3は土師器杯で内面黒色処理が施されている。4と5は軽石製品で卵型への成形の後、太めの条痕が確認できる。6～9は磨り石である。9は西壁直下に置かれたような状態で出土した。10は軽石製窪み石で、穴径は7cmを測る。11は北壁よりの底面から出土し、顕著な使用痕は確認されなかった。

本址の性格は、M29号溝状遺構とM49号溝状遺構に分断され確定はできないが、中央部分が一段深くなる掘り方や、底面の凹凸状態などから判断して、或いは北から延びるM65号溝状遺構と本址の南に延びるM48号溝状遺構を繋ぐ溝の一部とも考えられる。なお、遺構の所産時期は図示できなかったが武蔵窯の破片等も多く出土しており、8世紀代と考えたい。

第21表 Ta1号堅穴状遺構出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	西横	法 量		成 形 ・ 諸 部 ・ 文 様		埋 藏 層 () 発 見 層 ()	出 土 位 置
			口径(底)	底径(底)	底高(底)	内 面		
1	須恵器 蓋	(17.0)	-	(2.5)	ロタロナダ 自然釉付着	ロタロナダ 自然釉付着	須恵器 Ⅱ区 X-20Gr	
2	須恵器 長頸壺	-	-	(8.5)	ロタロナダ	ロタロナダ-2条の紋	須恵器 Ⅱ区 X-20Gr	
3	土師器 杯	(16.2)	(14.0)	(4.2)	ミガキ→黒色処理	口縁にコナダ→底部へラケズリーミガキ	須恵器 Ⅰ区	

No.	種 別	産 地	最大径	最大幅	最大厚	法 量	所 属	出 土 位 置
4	軽石製品	軽石	6.7	4.6	2.5	26.91	全体にすり面 条痕あり	Ⅱ区
5	軽石製品	軽石	7.8	6.0	3.9	83.91	全体にすり面 条痕あり	Ⅳ区
6	磨石	輝石安山岩	7.4	5.8	1.8	100.94	全面にすり面	Ⅱ区
7	磨石	瑠璃灰岩	6.7	3.7	1.3	43.92	3面にすり面 浅い条痕あり	Ⅱ区
8	磨石	輝石安山岩	(16.5)	(11.6)	(11.2)	(24.6)	左側に外穴 正面にすり面	
9	磨石	輝石安山岩	27.0	22.6	6.3	87.000	全面にすり面	
10	窪み石	軽石	12.2	12.5	4.5	222.79	円径 7.0 円深 2.5	Ⅳ区
11	石製品?	輝石安山岩	15.3	8.7	6.5	904.03		

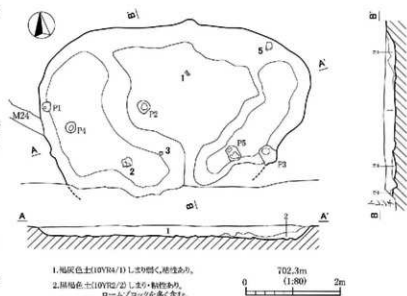
(2) Ta2号堅穴状遺構

本址は調査区中央南側のXIV-24・25 X X II-4・5Grに位置する。

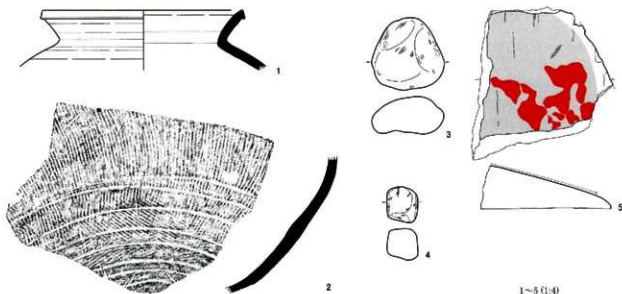
形態は不整形で、長軸方位はN-81°-Wを示す。規模は長軸5.61m、短軸は残存で3.56m、面積は検出部分で16.98㎡を測る。

壁は緩やかに立ち上がり、高い部分で0.30mを測る。遺構底面は僅かに中央が高くなる掘り方で、高低差は0.04m程である。貼床等は確認されなかった。

ピットは5か所を確認され、配置に規則性は確認できなかった。ピットの規模はP1が径0.22m・深さ0.18m、P2が径0.28m・深さ0.06m、P3が径0.42m・深さ0.24m、P4が径0.25m・深さ0.07m、P5が径0.35m・深さ0.32mを測る。



第51図 Ta2号堅穴状遺構実測図



第52図 Ta2号壑穴状遺構出土遺物実測図

第22表 Ta2号壑穴状遺構出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	材質	寸法		成形・修整・文様		指定館() 保存館() 丸番号		
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	土	(21.6)	-	(6.6)	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	国史実測	Ⅱ区
2	須恵器	土	-	-	-	可成具破 ナデ	タタキ目一式	南市実測	Ⅱ区
No.	種別	材質	最大径	最小径	最大厚	重量	所 属		出土位置
3	粘土製品	粘土	7.8	7.7	4.2	155.44	全体にすり		
4	土製品?	乾燥粘土	3.9	3.4	3.8	32.84	正面と両側に平砥面 正面に赤灰 全体にすり		Ⅰ区
5	磨石	安山岩	(16.3)	(16.0)	(5.3)	(1306.14)	正面にすり面 右側に片欠損 赤色部分あり		

本址からの出土遺物は覆土からのものが多かった。1は須恵器壺の口縁部から頸部である。ロクロ成形で内外面に自然釉が付着している。2は須恵器壺の胴部から底部付近の破片であり、平行タタキメを施した後、強い沈線が同心円状に巡っている。3は粘土製品で全体に磨りが確認でき、4は乾燥粘土で面どりを行っている。5は台石かミガキ石と考えられ、顕著な磨り痕跡の中に赤色顔料の付着が確認できる。本址はこれらの出土遺物から8～10世紀代の古代に所産時期を求めたい。

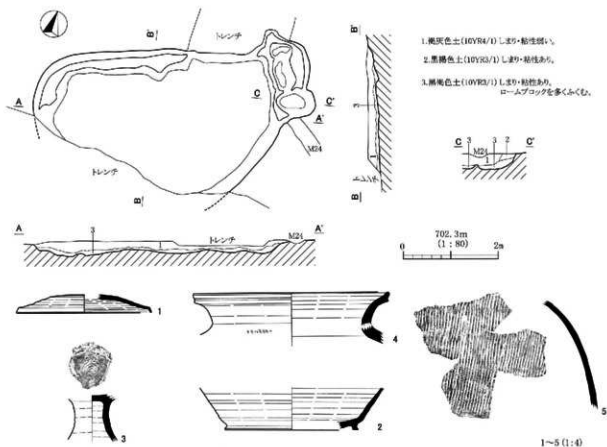
(3) Ta3号壑穴状遺構

本址は調査区中央南寄りのXVI-25、XVII-21、XXII-5、XXIII-1Grに位置する。Ta2号壑穴状遺構と東西に並ぶ位置関係である。形態は不整形で、南側を一部削平されている。長軸方位はN-74°-Eを示す。規模は長軸5.36m、短軸は残存で2.93m、面積は検出部分で13.48mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、東壁で0.20mの高さを測る。遺構底面はほぼ平坦であったが、北壁際に狭いテラス状の段差が確認された。また、北東コーナー付近には楕円形の上坑状の掘り込みが検出され、規模は長軸長さ1.79m、深さ0.32～0.39mを測る。

第23表 Ta3号壑穴状遺構出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	材質	寸法		成形・修整・文様		指定館() 保存館() 丸番号		
			口径(径)	底径(径)	高さ(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	土	(14.4)	-	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ→文庫新築館へラケズリ	国史実測	Ⅱ区
2	須恵器	有灰珐	-	(14.2)	(4.6)	ロクロナデ すれている	ロクロナデ→高台製付	国史実測	Ⅱ区
3	須恵器	高灰	-	-	-	残部タタキ目? 頸部にタタキ目	ロクロナデ 沈線	完全実測	Ⅱ区
4	須恵器	土	(20.8)	-	(5.6)	口縁にタタキ目 頸部にナデ	口縁にタタキ目 頸部タタキ目	国史実測	Ⅱ区
5	須恵器	土	-	-	-	可成具破	タタキ目 自然釉付着	南市実測	Ⅱ区 37



第53図 Ta3号壺穴状遺構及び出土遺物実測図

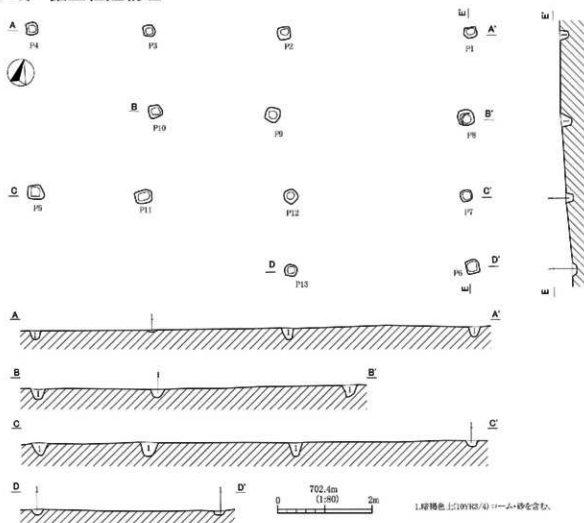
本址からの出土遺物は覆土からのものが多かった。図示したものは5点でいずれも須恵器である。1は蓋で天井部を欠損する。2は有台坏であり比較的大型品である。内面は使用痕がよく磨れている。3は高坏脚の部分と考えられ、坏見込み部に回転糸切りの痕跡が残る。4と5は壺の破片であり、4は口縁部から頸部、5が肩部と考えられる。5は内面にあて具痕と外面には平行タタキ目が施されている。

これらの遺物から本址も先のTa1号・2号壺穴状遺構と同じく古代に属する遺構と考えられ、須恵器の形態から8世紀を中心とする所産時期が考えられる。



遺構掘下げ・実測状況

第3節 掘立柱建物址



第54図 F1号掘立柱建物址実測図

(1) F1号掘立柱建物址

本址は調査区東側のX X I -9・10Grに位置する。桁方位はN-77°-Eを示す。形態は3間×3間の変則的な総柱式建物址である。規模はP1-P4の桁行き9.24m、P1-P6の梁行き4.95m、柱穴間に囲まれた面積は37.24㎡を測る。各ピットの規模はいずれも小規模で径が0.27m～0.39m、深さが0.09m～0.32mである。

本址からの出土遺物はなかったが、ピットの形態や覆土の状況から中世の所産と考えられる。

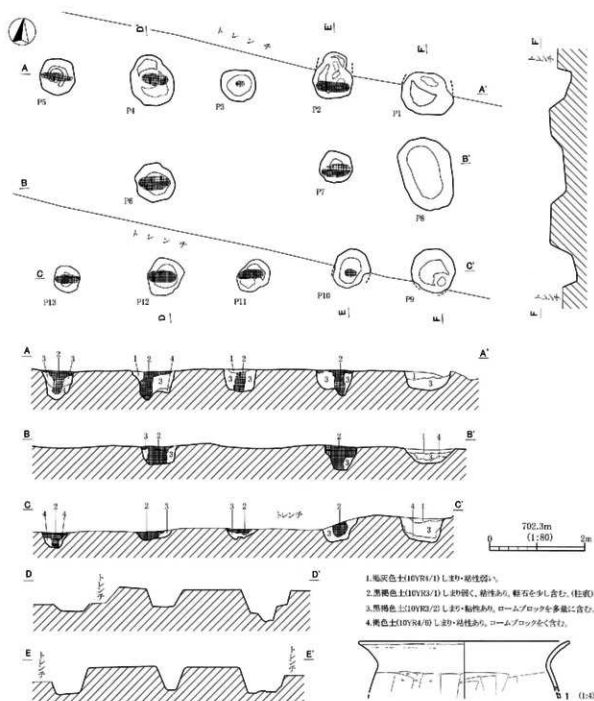
(2) F2号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX X II -3・4・8・9Grに位置する。桁方位はN-84°-Eを示す。形態は2間×4間の変則的な総柱式建物址で、規模はP9-P13間の桁行き7.94m、P1-P9間の梁行き4.23m、柱穴間に囲まれた面積は31.63㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく径が1.57m～0.60m、深さが0.62m～0.23mである。一部に柱痕が確認された。

本址からの出土遺物は各ピットより須恵器坏・甕片、土師器甕片などがあり、図示した土師器甕はP8より出土した。本址はこれらの出土遺物から古代の所産と考えられる。

(3) F3号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX X III -1・2・6・7Grに位置する。桁方位はN-14°-Wを示す。形態は2間×6間以上の総柱式建物址で、規模はP1-P9間の桁行き13.34m、P1-P3間の梁行き4.56m、柱穴間に囲まれた面積は推定で



第55図 F2号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

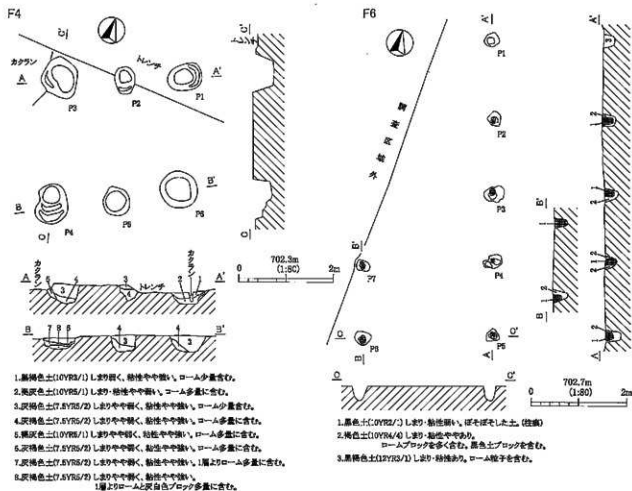
62.36㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく径が1.09m～0.57m、深さが0.16m～0.54mである。

今回、本址はひとつの建物址と報告したが、詳細に検討するとP1-P3-P6-P12間で囲まれた空間でひとつの建物址と捉えることも可能であり、とすると南側が調査区外となる為に確認は得ないが、2間×4間の建物址が南北に2棟配置されているとも考えられる。北側の建物址の面積は31.10㎡を測る。

本址からの出土遺物は各ピットより須恵器蓋・坏・甕片、土師器甕片などがある。図示した1の須恵器坏はP10より、2の土師器甕はP2より出土した。本址はこれらの出土遺物から古代の所産と考えられる。

(4) F4号掘立柱建物址

本址は調査区中央のXIV-20・25Grに位置する。桁方位はN-74°-Eを示す。形態は2間×1間の側柱式建物



第57図 F4・6号掘立柱建物址実測図

址で、規模はP4-P6間の桁行き2.74m、P3-P4間の梁行き2.52m、柱穴間に囲まれた面積は6.69㎡を測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.59m～0.85m、深さが0.31m～0.45mである。

本址からの出土遺物は各ピットより弥生後期壺・高坏、古墳坏、須惠器壺片などがあつた。本址の帰属時期は、出土遺物からの判断が難しく、覆土の状態からすると弥生・古墳期に該当すると考えられる。

(5) F5号掘立柱建物址

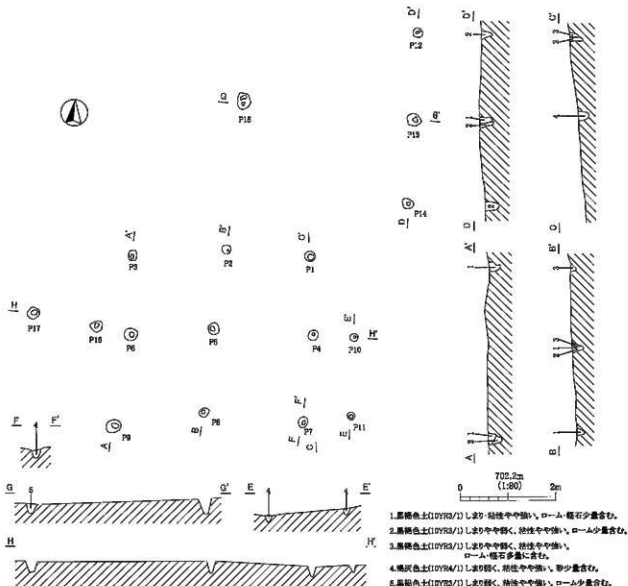
本址は調査区西よりのX XIII-3・4・8・9Grに位置する。桁方位はN-3°-Wを示す。形態は変則的な側柱式建物址であるが、遺構検出面が削平を受けており、いずれも浅い掘り込みであることから、本来はP15も含めての建物址と推定される。規模はP1-P3間が3.80m、P1-P7間が3.54m、P1-P3-P9-P7に囲まれた面積は13.52㎡を測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.16m～0.32m、深さが0.14m～0.34mである。

本址からの出土遺物は無かつたが、覆土の状態からすると中世に該当すると考えられる。

(6) F6号掘立柱建物址

本址は調査区西よりのX VII-13Grに位置する。桁方位はN-13°-Wを示す。形態は1間×4間の側柱式建物址で、規模はP1-P5間の桁行き6.26m、P6-P7間の梁行き2.74m、柱穴間に囲まれた面積は推定で17.16㎡を測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.28m～0.45m、深さが0.26m～0.33mである。

本址からの出土遺物は無かつたが、覆土の状態からすると中世に該当すると考えられる。



第58図 F6号掘立柱建物址実測図

(7) F7号掘立柱建物址

本址は調査区西端のX II-23、X VII-3Grに位置する。桁方位はN-16°-Eを示す。形態は横櫓が調査範囲外となる為不明である。検出された部分は総柱式建物址である。規模はP1-P3間で3.77mを測る。各ピットの規模は径が0.67m~0.84m、深さが0.45m~0.67mである。

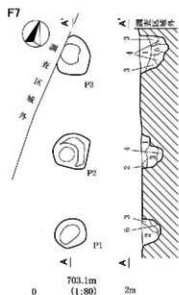
本址からの出土遺物はなかったが、ピットの形態や覆土の状況から古代の所産と考えられる。

(8) F8号掘立柱建物址

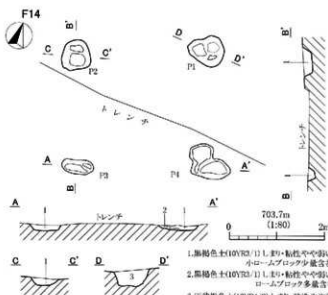
本址は調査区西端のX VII-2・3Grに位置する。桁方位はN-13°-Wを示す。形態は2間×2間の総柱式建物址と考えられ、規模はP1-P5間で3.49m、柱穴間に囲まれた面積は12.98㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく径が0.42m~0.88m、深さが0.13m~0.69mである。本址からの出土遺物は各ピットより須恵器杯・壺片、土師器壺片弥生後期壺片などがあり、本址はこれらの出土遺物から古代の所産と考えられる。

(9) F9号掘立柱建物址

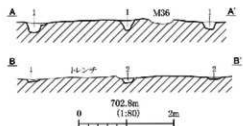
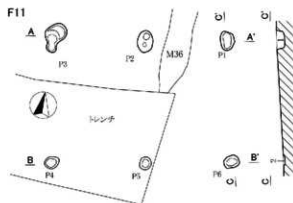
本址は調査区西寄りのX II-21・22、X VII-1・2Grに位置する。桁方位はN-82°-Wを示す。形態は3間×6間



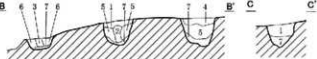
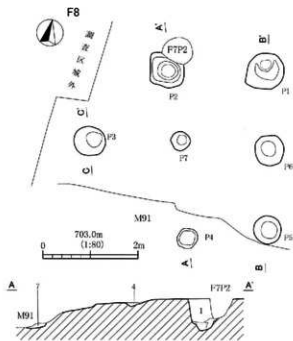
- 1.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ローム軽石少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック少量含む。
- 3.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック多量含む。
- 4.黒色土(10YR2/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック少量含む。
- 5.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ローム少量含む。
- 6.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ローム多量含む。



- 1.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、小ロームブロック少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック多量含む。
- 3.灰黄褐色土(10YR4/2) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック少量含む。

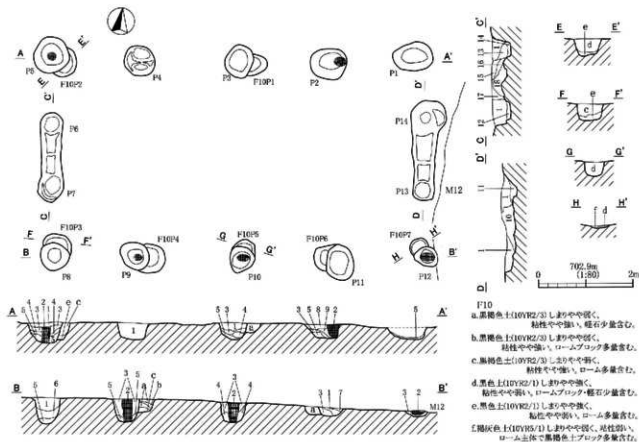


- 1.黒色土(10YR2/1) L.粘りやや弱く、粘性あり。
- 2.褐色土(10YR4/4) L.粘りやや弱く、粘性弱、ロームブロック多量含む。



- 1.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、小ロームブロック少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、黒褐色土含む。
- 3.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ローム少量含む。
- 4.2.に似る黄褐色土(10YR4/4) L.粘りやや弱く、粘性弱、ロームベースで黒褐色土ブロック多量含む。
- 5.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック多量含む。
- 6.黒褐色土(10YR3/1) L.粘りやや弱く、粘性やや強い、ローム多量、砂少量含む。
- 7.2.に似る黄褐色土(10YR4/4) L.粘りやや弱く、粘性弱、灰白色ロームブロック多量含む。

第59図 F7・F8・F11・F14号掘立柱建物址実測図



第60図 F9-10号掘立柱建物址実測図

の一部溝を伴う総柱式建物址で、規模はP8-P12間の桁行き7.89m、P1-P12間の梁行き4.25m、柱穴間に囲まれた面積は32.84㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく径が0.50m～0.86m、深さが0.17m～0.53mである。

本址からの出土遺物は各ピットよりいわゆる武蔵型と呼ばれる土器器残片や弥生後期壺・甍片が出土した。本址はこれらの出土遺物から古代の所産と考えられる。

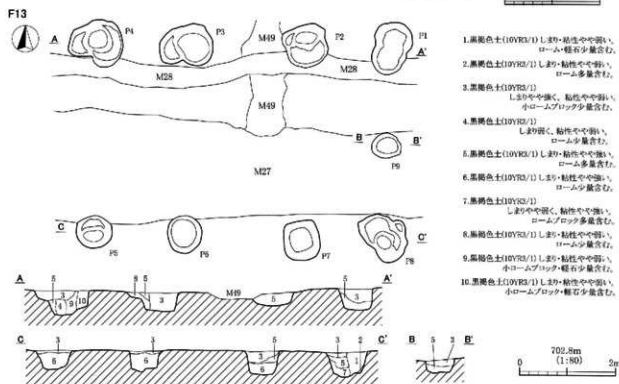
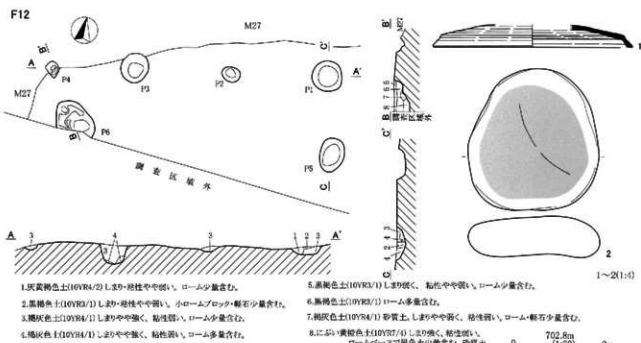
(10) F10号掘立柱建物址

本址は調査区西寄りのXⅡ-21・22、XⅧ-1・2Grに位置する。本址はそのほとんどがF9号掘立柱建物址と重複するため、F9号掘立柱建物址の建て替え時の掘り方と推定される。

(11) F11号掘立柱建物址

本址は調査区中央のXⅥ-12・17・18Grに位置する。桁方位はN-80°-Eを示す。形態は1間×2間の側柱式建物址である。規模はP4-P6間の桁行き3.82m、P1-P6間の梁行き2.56m、柱穴間に囲まれた面積は9.82㎡を測る。各ピットの規模はいずれも小さく、径が0.28m～0.62m、深さが0.06m～0.23mである。

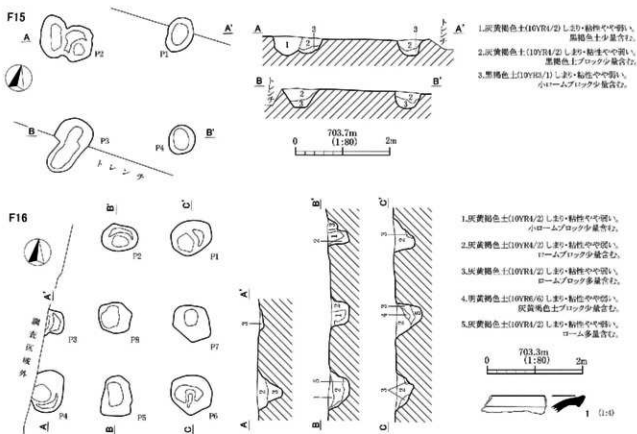
本址からの出土遺物は無かったが、覆土の状態からすると中世に該当すると考えられる。



第61図 F12・13号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

(12) F12号掘立柱建物址

本址は調査区西よりのXVII-4・5Grに位置する。桁方位は南北方向と考えられる。形態は南北方向に伸びる側柱式建物址と考えられ、規模はP1-P4間で5.83mを図る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.39m~1.00m、深さが0.13m~0.42mである。本址からの出土遺物は図示した須恵器蓋の他に土師器杯や武蔵甕があった。これらの出土遺物より、本址は古代の所産と考えられる。



第62図 F15・16号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

(13) F13号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-25、X I-21、XVI-5、XVII-1Grに位置する。桁方位はN-89°-Eを示す。形態は2間×3間の側柱式建物址である。規模はP1-P4間の桁行き6.26m、P4-P5間の梁行き4.16m、柱穴間に囲まれた面積は25.43㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく、径が0.63m~1.78m、深さが0.33m~0.59mである。

本址からの出土遺物は各ピットより武蔵燧片や弥生後期土器片があったが、覆土の状態から判断すると古代に該当すると思われる。

(14) F14号掘立柱建物址

本址は調査区北端のV-17・18Grに位置する。形態は1間×1間の側柱式建物址で、ピット間に囲まれた面積6.94㎡を測る。規模はP1-P2間が2.87m、P1-P4間が2.52mを測る。各ピットの規模は径が0.62m~0.94m、深さが0.17m~0.40mである。本址はピットの配置から住居址の柱穴のみが残存した可能性がある。

本址からの出土遺物はなかったが、ピットの形態や覆土の状況から古代の所産と考えられる。

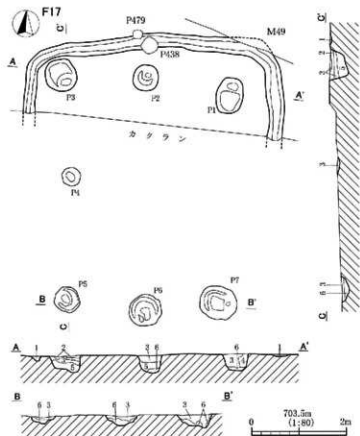
(15) F15号掘立柱建物址

本址は調査区北端のV-22・23Grに位置する。形態は1間×1間の側柱式建物址で、ピット間に囲まれた面積は5.70㎡を測る。規模はP1-P2間が2.59m、P1-P4間が2.22mを測る。各ピットの規模は径が0.63m~1.26m、深さが0.39m~0.48mである。本址はピットの配置から住居址の柱穴のみが残存した可能性がある。

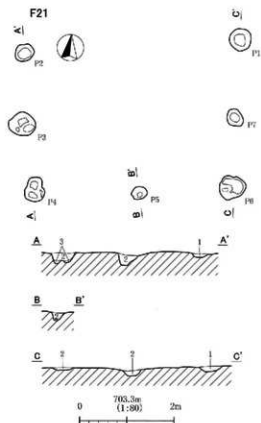
本址からの出土遺物はなかったが、ピットの形態や覆土の状況から古代の所産と考えられる。

(16) F16号掘立柱建物址

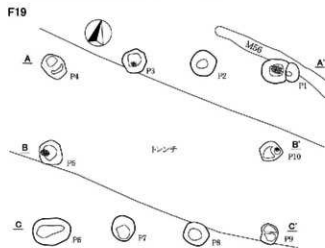
本址は調査区北西寄りのX II-11・12Grに位置する。桁方位はN-5°-Wを示す。形態は2間×2間の総柱式建物址で、規模はP1-P6間が3.33m、P4-P6間が3.13m、柱穴間に囲まれた面積は9.85㎡を測る。各ピットの規模



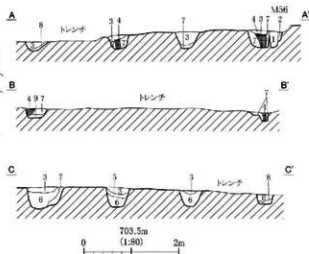
1. 濃い黄褐色土(10YR4/2)しよりあり、赤色粒子を含む。
2. 褐色土(10YR4/6)しより・粘性あり。
3. 灰褐色土(10YR4/2)しより・粘性弱い。
4. 灰黄褐色(10YR4/2)しより・粘性やや弱い、黒色土ブロックを含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2)しより・粘性あり、黒灰色土と黒色土を多く含む。
6. 黄褐色土(10YR5/6)しより・粘性あり、ロームブロック主体。



1. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ローム/ブロック少量含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1)しより弱く、粘性やや弱い、ローム/ブロック少量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ローム多量含む。

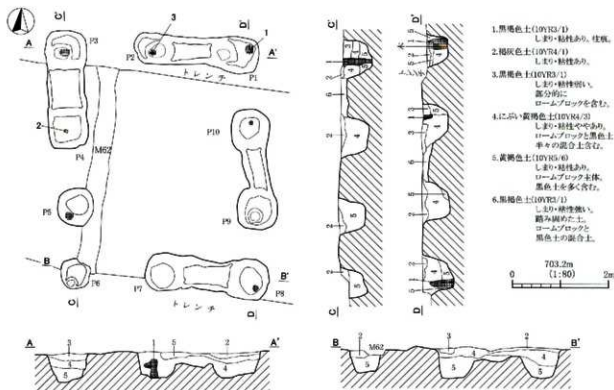


1. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ロームブロック少量含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ローム多量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2)しより・粘性やや弱い、小ロームブロック少量含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1)しより弱く、粘性やや弱い、小ロームブロック少量含む、柱状。
5. 濃い黄褐色土(10YR5/2)しよりやや弱く、粘性弱い、黒褐色土少量含む。



6. 黒褐色土(10YR3/2)しより弱く、粘性やや弱い、ロームブロック、濃い黄褐色土多量含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ローム多量含む。
8. 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)しより・粘性弱い、黒褐色土ブロック少量含む。
9. 黒褐色土(10YR3/1)しより・粘性やや弱い、ローム少量含む。

第63図 F17・19・21号掘立柱建物址実測図



第64図 F18号掘立柱建物址実測図

はいずれも大きく、径が0.37m～0.88m、深さが0.33m～0.68mである。

本址からの出土遺物は図示した須恵器甕のほか、土師器環・甕・高坏片、弥生甕片などがある。本址はこれら
の出土遺物から古代の所産と考えられる。

(17) F17号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-5・10、X I-1・6Grに位置する。桁方位はN-2°-Wを示す。形態は2間×2間の側柱式
建物址であり、北側に区画的な浅い溝状遺構を配置する。この溝は建物址を囲むように南側に延びていたと考えら
れる。規模はP3-P5間の桁行き4.58m、P1-P3間の梁行き3.57m、柱穴間に囲まれた面積は16.55㎡を測る。各ピ
ットの形態は円形で、規模は径が0.40m～0.79m、深さが0.04m～0.43mである。本址からの出土遺物は溝部分より
須恵器坏片、ビッドより武蔵甕と弥生土器片があった。これらの出土遺物より本址は古代の所産と考えられる。

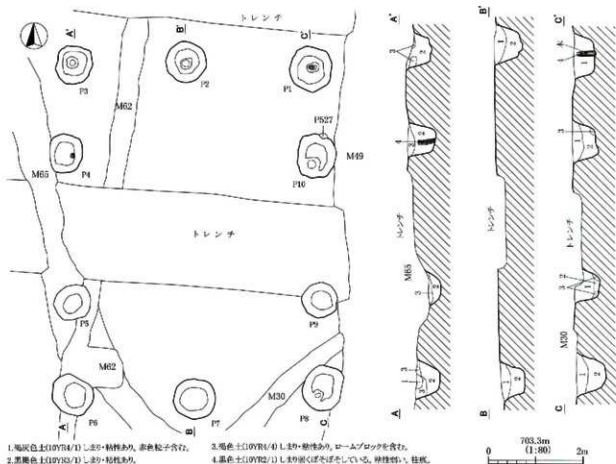
(18) F18号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-10・15、X I-6・11Grに位置する。桁方位はN-2°-Wを示す。形態は溝持ちの2間×3間
の側柱式建物址である。規模はP1-P8間の桁行き5.04m、P6-P8間の梁行き3.95m、柱穴間に囲まれた面積は
19.06㎡を測る。各ピットの規模はいずれも大きく、径が0.61m～0.99m、深さが0.54m～0.68mである。

本址からの出土遺物は各ピットより土師器坏・甕片、須恵器坏片、弥生土器片があった。これらの出土遺物より本
址は古代の所産と考えられる。

(19) F19号掘立柱建物址

本址は調査区西よりのX II-1・6Grに位置する。桁方位はN-78°-Eを示す。形態は2間×3間の側柱式建物址で
ある。規模はP1-P4間の桁行き4.80m、P4-P6間の梁行き3.60m、柱穴間に囲まれた面積は17.32㎡を測る。各ピ
ットの形態は円形で、規模は径が0.46m～0.80m、深さが0.20m～0.39mである。一部のピットには柱痕が確認された。
本址からの出土遺物は各ピットより須恵器甕片、弥生土器片があった。これらの出土遺物より本址は古代の所産と
考えられる。



第65図 F20号掘立柱建物址実測図

(20) F20号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-15・20、X I-11・16Grに位置する。形態は2間×3間の側柱式建物址である。桁方位はN-1°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は36.47㎡を測る。規模はP3-P6間の桁行き7.06m、P6-P8間の梁行き5.15mを測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.76m～0.99m、深さが0.46m～0.64mである。本址はピット内から木質が一部発見された(詳細は第V章科学分析)。

本址からの出土遺物は各ピットより須恵器坏片、武蔵甕片、弥生土器片などがあつた。本址はこれらの出土遺物より古代の所産と考えられる。

(21) F21号掘立柱建物址

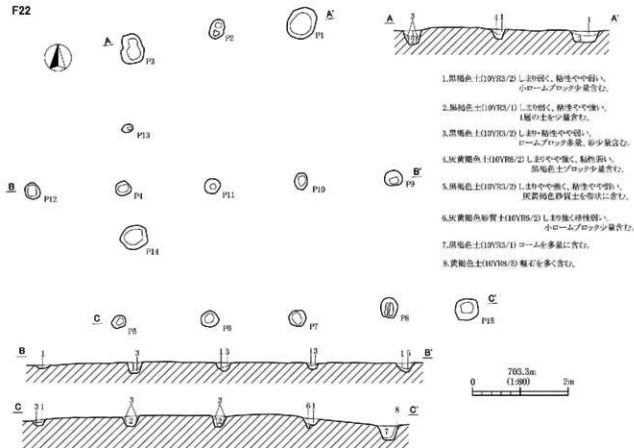
本址は調査区北よりのX I-3・4・8・9Grに位置する。形態は2間×2間の側柱式建物址である。桁方位はN-84°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は13.39㎡を測る。規模はP1-P2間の桁行き4.55m、P1-P6間の梁行き3.18mを測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.34m～0.57m、深さが0.13m～0.29mである。

本址からの出土遺物はP3より土師器甕片、P7より弥生高坏片があつた。本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが古代の所産の可能性があつた。

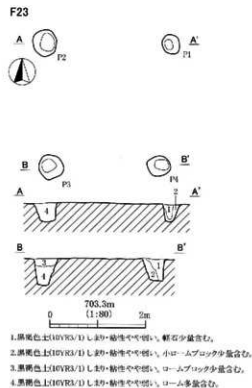
(22) F22号掘立柱建物址

本址は調査区西寄りのX I-9・14・15Grに位置する。桁方位はN-1°-Wを示す。形態は変則的な側柱式建物址で、規模はP3-P5間が5.77m、P5-P8間が7.36mを測る。各ピットの形態は円形で、径が0.24m～0.72m、深さが0.15m～0.33mである。本址からの出土遺物はピット内より土師器甕・坏片、弥生土器片があつたが、覆土の状況から中世の所産と考えられる。

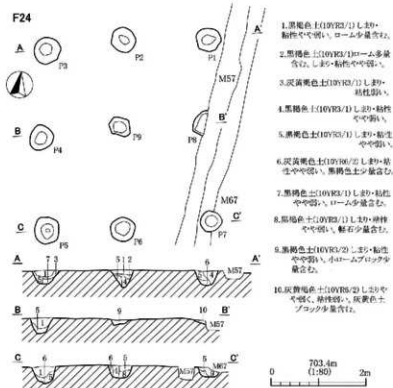
F22



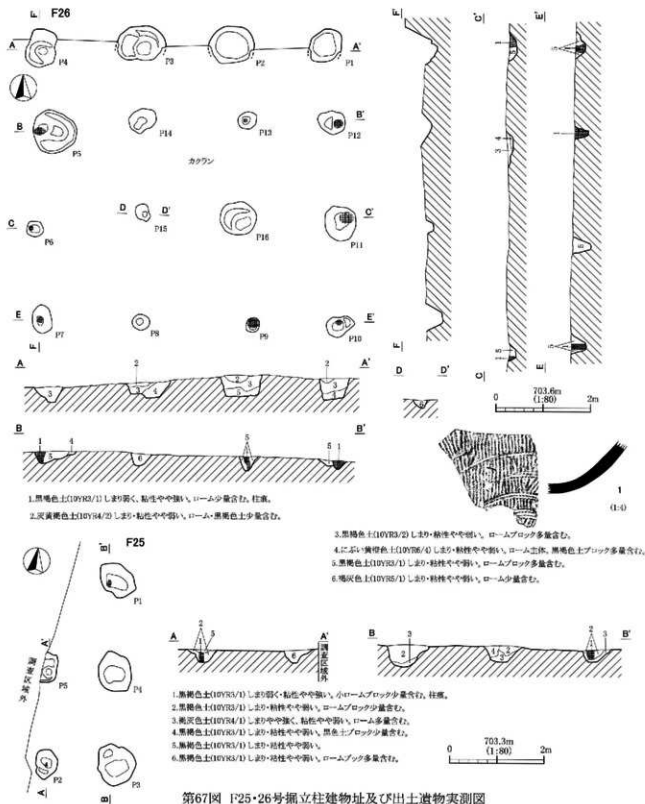
F23



F24



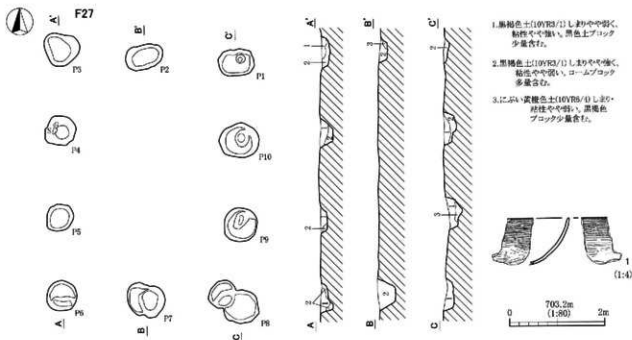
第66図 F22・23・24号掘立柱建物址実測図



第67図 F25・26号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

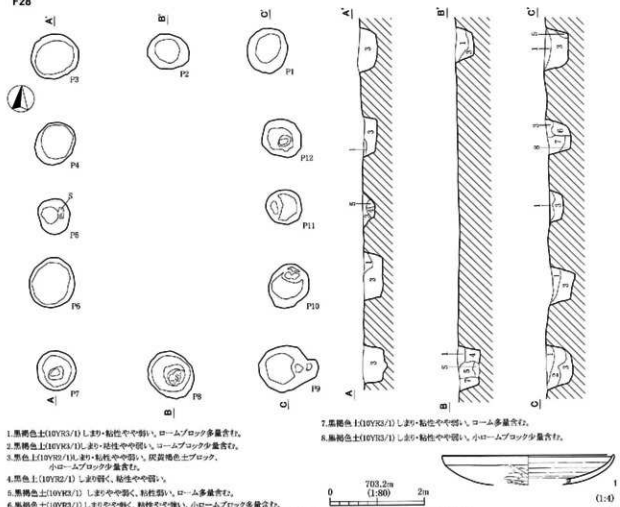
(23) F23号掘立柱建物址

本址は調査区西よりのX I-19Grに位置する。形態は1間×1間の側柱式建物址であり、堅穴住居の柱穴のみ残存した可能性がある。規模はP1-P2間が2.52m、P1-P4間が2.55m、柱穴間に囲まれた面積は6.28㎡を測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.43m～0.57m、深さが0.41m～0.58mである。



- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまりやや弱く、粘性やや強い、黒色土ブロック少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1)しまりやや強く、粘性やや強い、ロームブロック多量含む。
- 3.にぶい黄褐色土(10YR5/0)しまり、粘性やや強い、黒褐色ブロック少量含む。

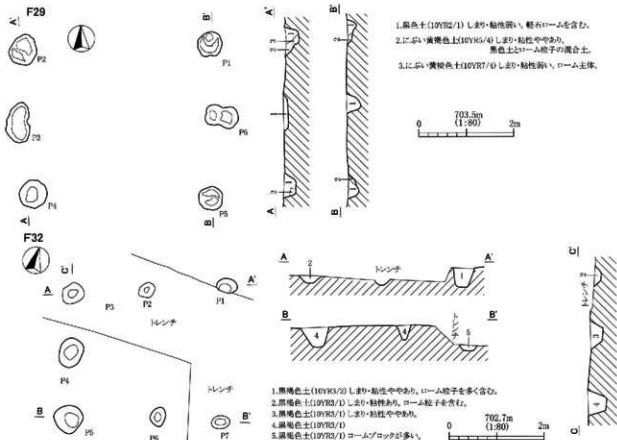
F28



- 1.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、ロームブロック多量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、ロームブロック少量含む。
- 3.黒色土(10YR2/1)しまり・粘性やや弱い、炭灰褐色土ブロック、小ロームブロック少量含む。
- 4.黒色土(10YR2/1)しまり弱く、粘性やや弱い。
- 5.黒褐色土(10YR3/1)しまりやや弱く、粘性弱い、ローム多量含む。
- 6.黒褐色土(10YR3/1)しまりやや弱く、粘性やや強い、小ロームブロック多量含む。

- 7.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、ローム多量含む。
- 8.黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性やや弱い、小ロームブロック少量含む。

第68図 F27・28号掘立柱建物址及び出土遺物実測図



第69図 F29・32号掘立柱建物址実測図

本址からの出土遺物はP2より土師器坏片、P3より須恵器甕片がある。これらの出土遺物より本址は古代の所産と考えられる。

(24) F24号掘立柱建物址

本址は調査区西寄りのX II-6・11Grに位置する。桁方位はN-10°-Wを示す。形態は2間×2間の総柱式建物址である。規模はP1-P7間の桁行き3.84m、P5-P7間の梁行き3.47m、柱穴間に囲まれた面積は13.52㎡を測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.45m～0.59m、深さが0.15m～0.39mである。

本址からの出土遺物はP4から弥生甕片があるが、覆土等の状況から古代の所産と考えられる。

(25) F25号掘立柱建物址

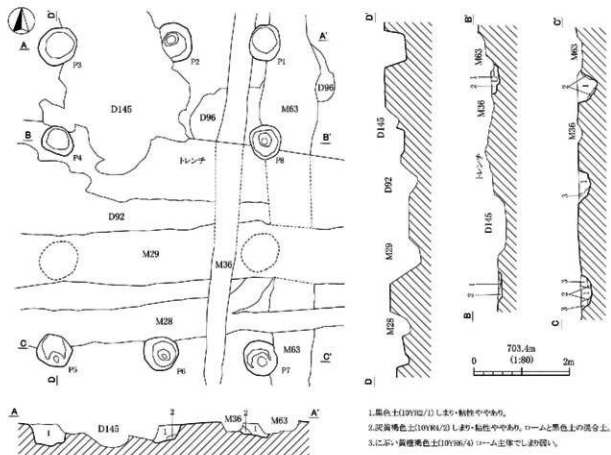
本址は調査区西端のX II-7Grに位置する。遺構の大部分が調査区外となるため詳細は不明であるが、南側に並ぶF16号掘立柱建物址と規模が似通っているため、総柱式建物址の可能性がある。規模はP1-P3間が3.93mを測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.36m～0.91m、深さが0.26m～0.36mである。

本址からの出土遺物はP3から須恵器甕片があった。これらの出土遺物より不確定ではあるが古代の所産と考えられる。

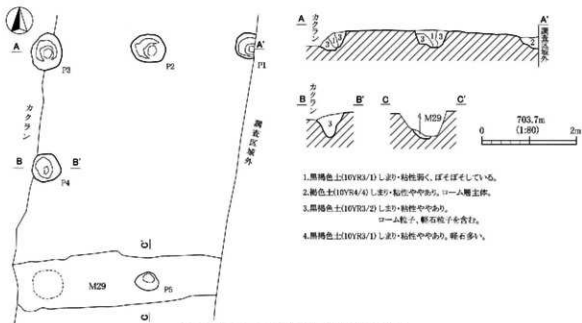
(26) F26号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX I-2・3・7・8Grに位置する。形態は3間×3間の総柱式建物址である。桁方位はN-1°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は37.18㎡を測る。規模はP7-P10間の桁行き6.32m、P1-P10間の梁行き5.90mを測る。各ピットの形態はいずれも円形で、一部に柱底が確認された。規模は径が0.33m～0.91m、深さが0.18m～0.69mである。本址からの出土遺物は図示した須恵器甕のほかには武蔵甕片がある。本址はこれらの出土遺物より古代の所産と考えられる。

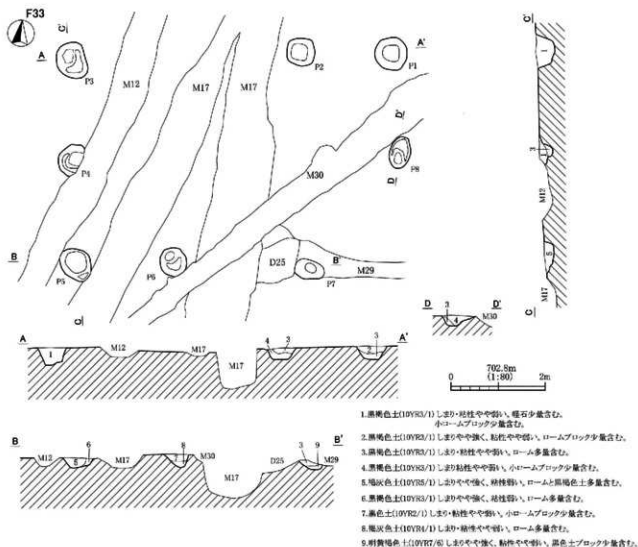
F30



F31



第70図 F30・31号掘立柱建物址実測図



第71図 F33号掘立柱建物址実測図

(27) F27号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX I-11・12・16・17Grに位置する。形態は2間×3間の側柱式建物址である。桁方位はN-5°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は19.29㎡を測る。規模はP1-P8間の桁行き5.13m、P1-P3間の梁行き3.78mを測る。各ピットの形態は円型を基調とし、規模は径が0.64m～1.13m、深さが0.17m～0.40mである。

本址からの出土遺物は図示した土師器杯のほかにも土師器甕片や弥生土器がある。本址はこれらの出土遺物より古代の所産と考えられる。

(28) F28号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX I-11・12・16・17Grに位置する。桁方位はN-6°-Wを示す。形態は2間×4間の側柱式建物址で、規模はP1-P9間の桁行き6.81m、P7-P9間の梁行き5.11m、柱穴間に囲まれた面積は32.74㎡を測る。各ピットの形態は円形で、規模は径が0.75m～1.27m、深さが0.34m～0.68mである。

本址からの出土遺物は図示したP10より出土した土師器杯の他に、土師器甕、須恵器杯・甕片、弥生土器片があった。これらの出土遺物より本址は古代の所産と考えられる。

(29) F29号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-16Grに位置する。形態は1間×2間の側柱式建物址であり、桁方位はN-2°-Eを示す。規模はP1-P2間が3.91m、P1-P5間が3.47m、柱穴間に囲まれた面積は13.22㎡を測る。各ピットの形態は楕円形が多く、規模は径が0.53m～0.85m、深さが0.16m～0.32mである。本址からの出土遺物はP4より弥生後期の甕片が1点出土しているのみであり、所産時期は不明である。

(30) F30号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX-17・22Grに位置する。桁方位はN-1°-Eを示す。溝状遺構に削平されているが、形態は2間×3間の側柱式建物址である。規模はP1-P7間の桁行き6.79m、P1-P3間の梁行き4.34m、柱穴間に囲まれた面積は28.76㎡を測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.66m～0.83m、深さが0.13m～0.48mである。本址からの出土遺物は弥生後期の壺・甕・高坏片であり、出土遺物からは弥生後期の所産が考えられるが、覆土や形態的には古代の掘立柱建物址と酷似しているので現段階では古代と考えたい。

(31) F31号掘立柱建物址

本址は調査区中央のIX-19・20・25Grに位置する。M29号溝状遺構に削平されているが、形態は側柱式建物址である。規模はP1-P2間が4.29m、現況の柱穴間に囲まれた面積は推定で20.89㎡を測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.43m～0.78m、深さが0.20m～0.42mである。本址からの出土遺物はP2から弥生後期壺片、P3から弥生後期高坏片があり、出土遺物からは弥生後期の所産と考えたい。

(32) F32号掘立柱建物址

本址は調査区中央のX VII-6・11Grに位置する。桁方位はN-77°-Eを示す。形態は2間×2間の側柱式建物址である。規模はP1-P3間の桁行き3.24m、P1-P7間の梁行き2.81m、柱穴間に囲まれた面積は8.72㎡を測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.31m～0.63m、深さが0.14m～0.46mである。

本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明であるが、本址の南に位置する同規模・同類型のF4号掘立柱建物址が弥生～古墳の所産と考えられる為、同時期と考えたい。

(33) F33号掘立柱建物址

本址は調査区西よりのX I-25、X II-21Grに位置する。桁方位はN-83°-Eを示す。形態は2間×3間の側柱式建物址である。規模はP1-P3間の桁行き6.85m、P3-P5間の梁行き4.34m、柱穴間に囲まれた面積は30.19㎡を測る。各ピットの形態はいずれも円形で、規模は径が0.62m～0.79m、深さが0.20m～0.40mである。

本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明である。

第24表 掘立柱建物址出土遺物観察表

(cm)

No.	種別	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様			測定値() 観察値() 丸高(●)	備 考	出土位置
			口径(最)	口径(最)	器高(最)	内 面	外 面				
F2	1	土師器	甕	(22.2)	-	6.0	口縁コナダ-胴部ヘナダ	口縁コナダ-胴部ヘナダ		図録実測	P 8
F1	1	須恵器	有台埴	(15.2)	(11.9)	4.2	ロタロナダ	ロタロナダ-高台付		図録実測	P10 XXIII-B
	2	土師器	ロタロ壺	-	(7.8)	(1.7)	ロタロナダ	胴部ナダ 底部ナダ		図録実測	P 2
F12	1	須恵器	甕	(21.0)	-	(2.0)	ロタロナダ	ロタロナダ		図録実測	P 1
F16	1	須恵器	甕	-	-	-	ロタロナダ	ロタロナダ		破片実測	P 1
F36	1	須恵器	甕	-	-	-	当て具痕→ナダ	タタキヨ→式痕		新調査測	P 2
F27	1	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理	ヘナダズリ→ミガキ		破片実測	P10
F28	1	土師器	杯	(18.2)	(14.0)	(3.2)	ロタロナダ	口縁コナダ 胴部ナダ-底部ヘナダズリ		図録実測	P10
Ns		器 種	器 材	最大径	最大径	器 高	所 見			出土位置	
F12	2	甕石	須石取山石	15	13.8	4.5	1547.34	装飾あり(一部黒化) 正面にすり面			P 3

第4節 土坑

本遺跡からは139基の土坑が検出された。土坑は縄文期の落とし穴、中世の井戸址等、所産時期も性格も多岐にわたっている。本節ではこれら土坑を時期別に集成し、各期の特徴的な遺構について詳細を記す。その他のものについては、後述する土坑計測一覧を参照されたい。

検出された土坑の時期別の内訳は以下の通りである。時期決定に関しては出土遺物や覆土の状況より判断した。なお、遺構番号は欠番がある。

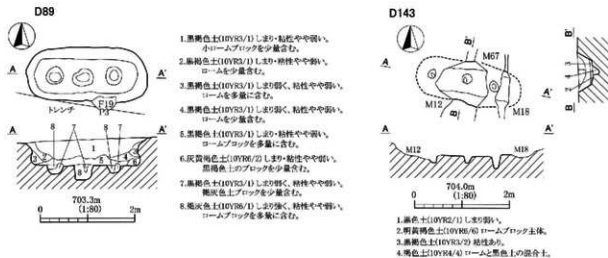
縄文期	2基	D89.143
弥生期	34基	D3.7.21.22.43.44.45.47.48.49.50.51.52.65.66.73.74.82.83.85.87.88.98.99. D100.102.103.104.105.106.109.118.136.146
古代	39基	D1.2.14.15.16.17.18.19.20.23.24.26.28.29.30.31.32.33.34.35.42.46.67 D68.69.72.80.81.84.90.91.92.93.94.96.97.108.144.145
中世	23基	D4.5.6.8.9.10.13.25.40.53.54.55.56.57.59.60.62.63.64.71.79.86.95
近世	4基	D36.37.38.41
不明	37基	D11.12.39.61.70.77.78.101.107.110.111.112.113.114.115.116.117.119.120.121 D122.123.124.128.129.130.131.132.133.134.135.137.138.139.140.141.142

(1) D89号土坑

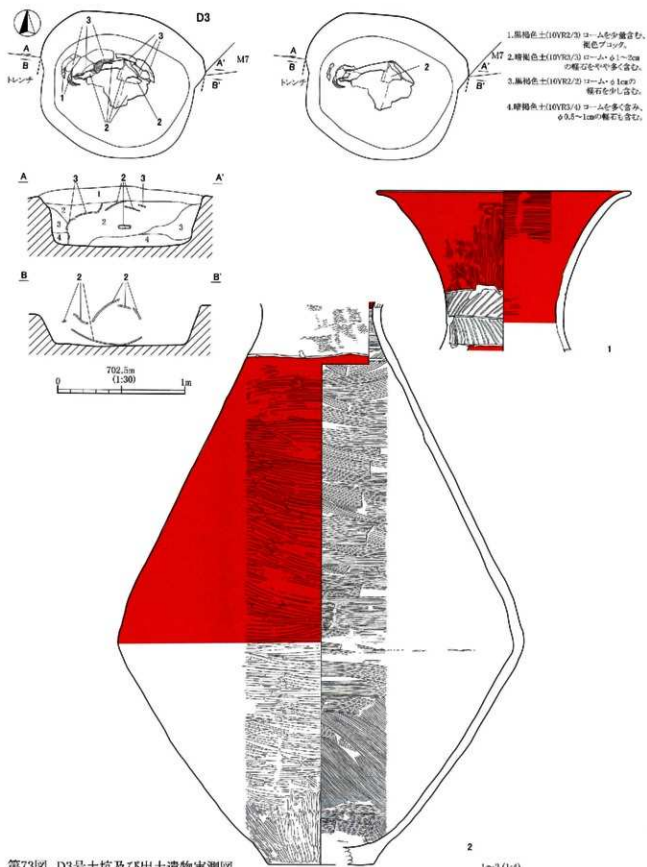
本址は調査区西側のX II-1Grに位置する。長軸方位はN-82°-Wを示す。形態は隅丸の長方形で、規模は長軸2.57m、短軸1.15m、深さ0.61mを測る。土坑底面には杭址と考えられる3か所のビット址が確認され、規模は径が0.38~0.44m、深さは0.25~0.31mを測る。本址からの出土遺物は覆土中から弥生壺と甕の小片が出土したのみである。本址は形態より縄文期の落とし穴と考えられる。

(2) D143号土坑

本址は調査区西側のX I-20. X II-16Grに位置する。長軸方位はN-67°-Wを示す。形態は隅丸の長方形で、規模は推定で長軸2.23m、短軸0.85m、深さ0.30mを測る。土坑底面には杭址と考えられる3か所のビット址が確認され、規模は径が0.20~0.24m、深さは0.14~0.24mを測る。本址からの出土遺物は無かったが形態より縄文期の落とし穴と考えられる。



第72図 D89・143号土坑実測図



第73図 D3号土坑及び出土遺物実測図

1~2(1:4)

(3) D3号土坑

本址は調査区東側のXX I-2・3Grに位置する。残存状態は南側半分が試掘トレンチにより削平されている。南北方位はN-27°-Wを示す。形態は隅丸の方形で、規模は残存で南北1.17m、東西1.28m、深さ0.42mを測る。土坑底面は平坦であった。

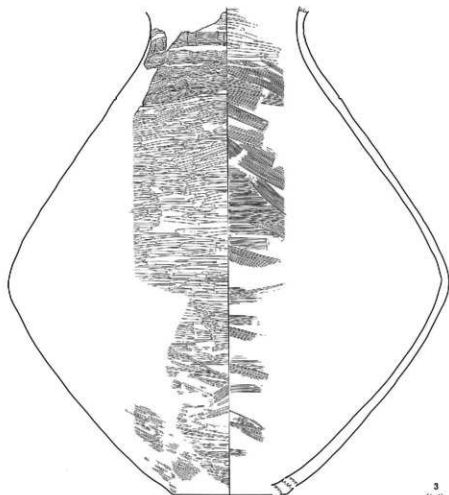
本土坑からは図に示したように所謂「土器棺墓」と考えられる土器が3点出土した。2に示した赤彩された壺が棺の本体と考えられ、頸部を西方向に向け据えられていた。土器の軸方位はN-82°-Wを示す。口縁部は意図的に欠損しており、代わりに1で示した壺口縁部が台のような状態で検出された。また、3に示した無彩の壺は、2の壺を破片で覆うような状態であった。南側半分が欠損しているため詳細は不明な部分があるが、これらの状態から2の壺棺を1の壺口縁部で塞ぎ、なおかつ3の壺破片で覆っていたと推測される。

なお、壺内の土と土坑内の覆土をいずれも水洗したが、人骨の歯が1点検出されたのみであった。本址の所産時期は土器の特徴から弥生後期前半に位置づけられると考える。

第25表 D3号土坑出土遺物観察表

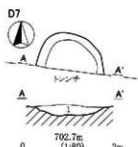
(cm)

No.	種類	器種	口部(長)		底径(厚)	成形・器態・文様		底字跡()	頸字跡()	丸底(●)
			口徑(長)	底径(厚)		内面	外面			
1	弥生	壺	(27.6)	-	(17.2)	ミガキ→赤色染彩 刺線	ミガキ→赤色染彩 ヘラ線環走平行線文 ヘラ線斜走文		完全実測	
2	弥生	壺	-	(11.0)	(60.1)	ハケ目→ミガキ→赤色染彩	ミガキ→赤色染彩 刺線波状文 刺線		図拓実測	
3	弥生	壺	-	(12.5)	(57.1)	刺線ハケ目 口縁ミガキ	ミガキ 刺線環状文 (2線止め) 斜線波状文 ヘラ線波状文		図拓実測	M7 XX1-検出面 XX1-3 SB01HT20

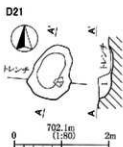


第74図 D3号土坑出土遺物実測図

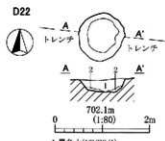
3
(1:4)



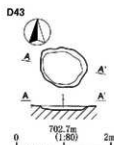
D7
1.黒褐色土(10YR2/2)
砂・ローム・軽石0.5~1cmを少量含む。



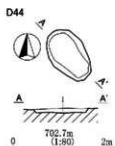
D21
1.黒色土(10YR2/1)
しまりやや強い、粘性やや強い。



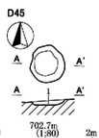
D22
1.黒色土(10YR2/1)
しまり弱く、粘性強い。
炭化物・軽石を少量含む。
2.黒色土(10YR2/1)
しまり弱く、粘性強い。
0.1~2cmのロームブロックを
多量に含む。



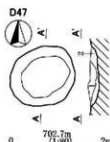
D43
1.黒色土(10YR2/1)
しまり弱く、粘性やや強い。
小ロームブロックを少量含む。



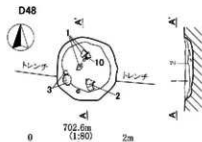
D44
1.黒色土(10YR2/1)
しまり弱く、粘性やや強い。
小ロームブロックを少量含む。



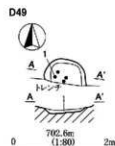
D45
1.黒色土(10YR2/1)
しまり・粘性あり。



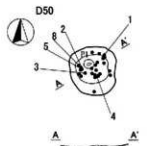
D47
1.黒褐色土(10YR2/1)
しまり・粘性あり。
2.褐色土(10YR4/6)
しまり・粘性強い。
ローム粒子を多く含む。



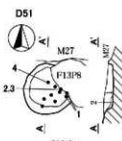
D48
1.黒褐色(10YR3/2)
しまり・粘性あり。炭化物を含む。
2.黒色(10YR2/1)
しまり・粘性あり。炭化物を多量に含む。
骨灰を含む。ローム粒子を含む。



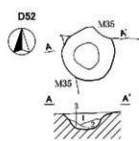
D49
1.黒色土(10YR2/1)
しまり弱く、
粘性やや強い。
軽石を少量含む。



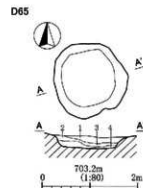
D50
1.黒色土(10YR2/1)
しまり・粘性あり。
炭化物と骨灰を含む。



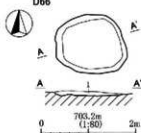
D51
1.黒褐色土(10YR3/1)
しまり・粘性あり。
ローム粒子を多く含む。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)
しまり・粘性ややあり。
ロームブロックを含む。



D52
1.黒褐色土(10YR2/1)
しまり・粘性あり。
炭化物・ローム粒子を
多く含む。
2.褐色土(10YR4/3)
しまり・粘性強い。
ローム粒子を多く含む。
炭化物を少量含む。
3.にじみ・褐色土(10YR6/4)
しまり・粘性強い。



D65
1.灰黄褐色土(10YR4/2)
しまりやや弱く、粘性弱い。
軽石を少量含む。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)
しまりやや弱く、粘性弱い。
ロームブロック多量含む。
3.黒褐色土(10YR3/1)
しまりやや強く、粘性強い。
小ロームブロック少量含む。
4.にじみ・黄褐色土(10YR6/4)
しまりやや強く、粘性強い。
ローム多量含む。



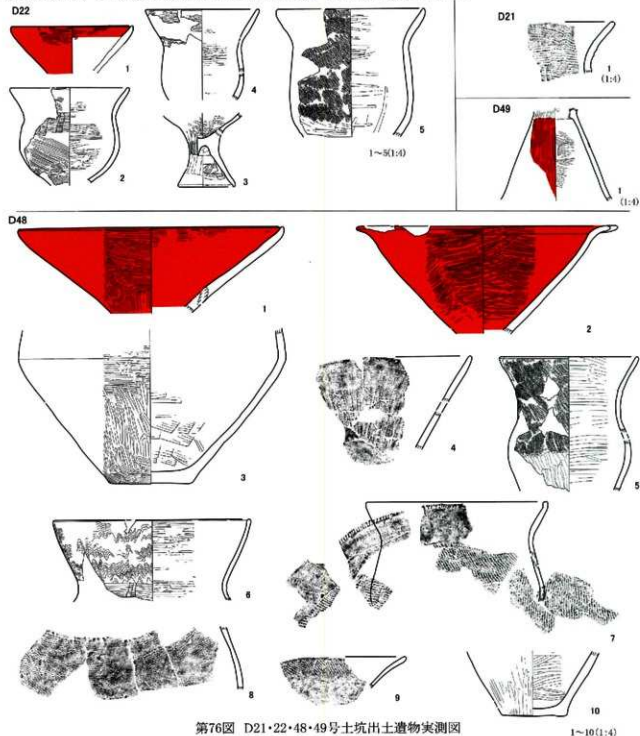
D66
1.灰黄褐色土(10YR4/2)
しまり・粘性やや弱い。
小ロームブロックを少量。
軽石を多量に含む。

第75図 D7・21・22・43・44・45・47~52・65・66号土坑実測図

P82で記載した土坑はいずれも小型の円形を基調とする形態で、後述する土器集中区の中で検出されたものもある。D21・22はU7集中区と、D43～D52はU11集中区の周辺及び重複するように検出された。いずれも浅い掘り込みを持ち、土坑底面はほぼ平坦なものが多かった。

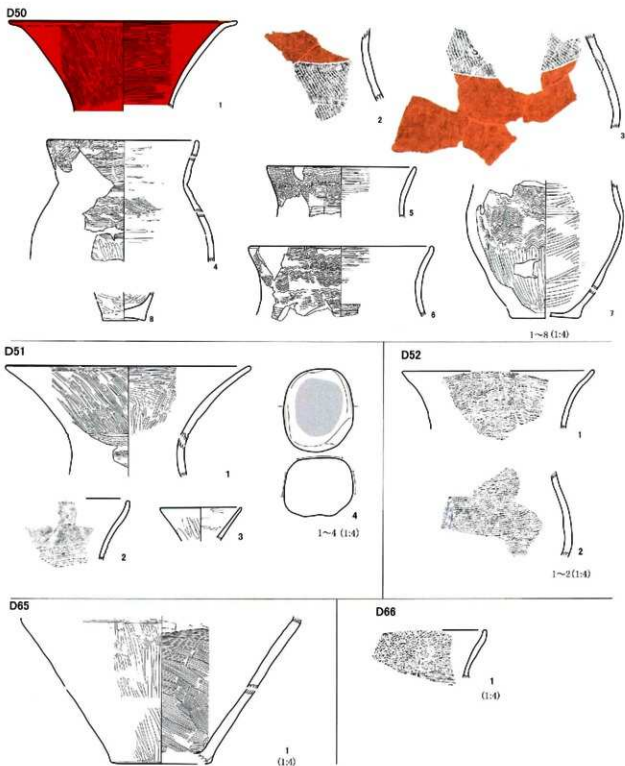
(4) D48号土坑

本址は調査区中央のXVI-15、XVII-11Grに位置する。形態は円形で、規模は径1.38m・深さ0.19mを測る。本址の上面にはU11土器集中区の土器片が散在していた。本址覆土は炭化物が多く含まれ、細かい哺乳類の焼骨も多く含まれていた。出土遺物は図示した高坏等が底面よりやや浮いた状態で出土した。



第76図 D21・22・48・49号土坑出土遺物実測図

1~10(1:4)

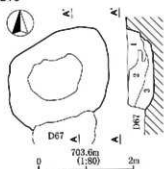


第77図 D50～52・65・66号土坑出土遺物実測図

(5) D65・66号土坑

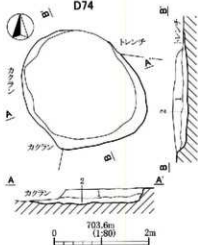
本址は調査区西端のX II - 16・17Grに位置する。両土坑ともに形態は円形で、H24号住居址と重複関係にある。新旧関係は本址の方が新しい。出土はいずれも図示したもの他、弥生後期の壺・甕片が出土しており、古代の遺物が含まれないことから、所産時期を弥生後期としたが、重複する住居からの流れ込みの可能性も否定しきれない。

D73

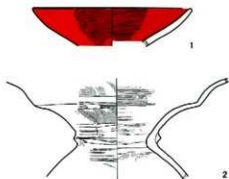


- 1.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり、軽石混多量を含む。
- 2.黄褐色土(10YR5/6) しまり多く、粘性弱い、層れたロームブロックを含む。
- 3.緑褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり、黒色土の覆合土。

D74

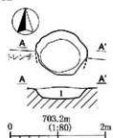


- 1.黒褐色土(10YR3/1) しまりやや弱く、粘性やや強い、黒色土ブロック少量含む。
- 2.黒褐色土(10YR3/1) しまりやや弱く、粘性やや強い、ロームブロック少量含む。



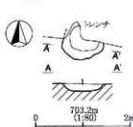
1~2 (1:4)

D82



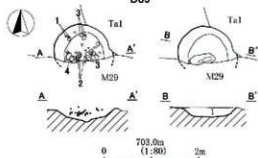
- 1.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり、ローム粒子を微量に含む。

D83



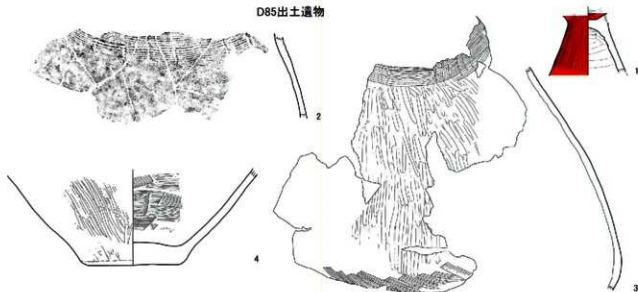
- 1.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり、ローム粒子を微量に含む。

D85



- 1.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり、下部にローム粒子を含む。

D85出土遺物



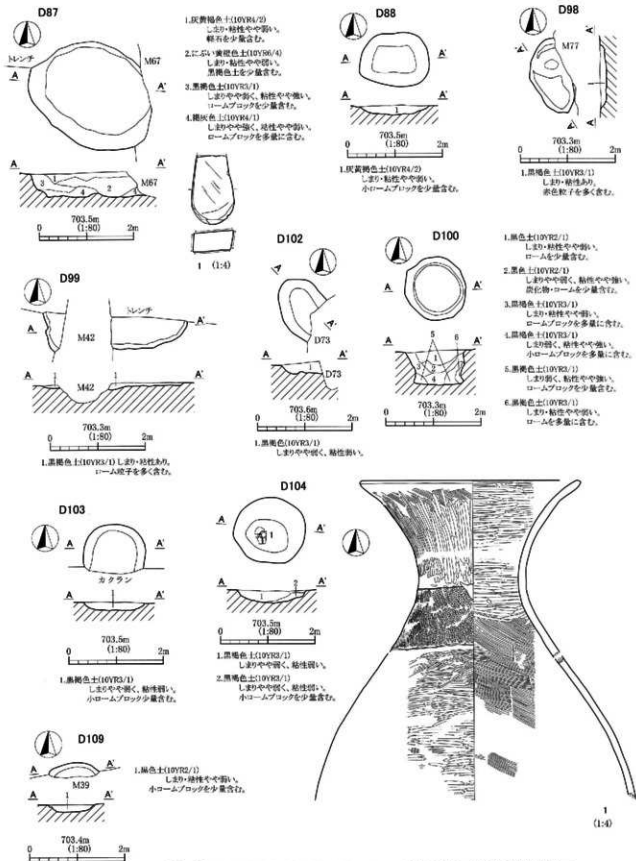
1~4 (1:4)

第78図 D73・74・82・83・85号土坑及び出土遺物実測図

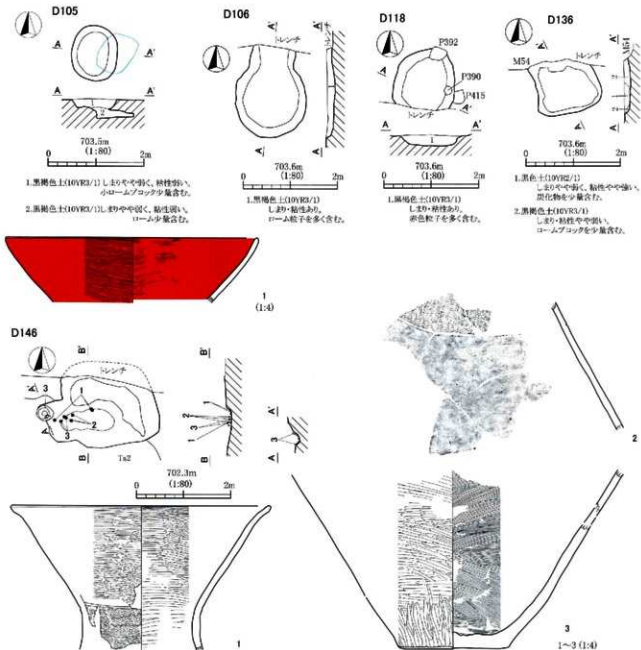
第26表 D21・22・48～52・65・66・74・85号土坑出土遺物観察表

(cm)

土坑 No.	種類	器種	法 量		成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		埋定標() 続行標() 内蔵標	編 号	出土位置		
			口径(径)	底径(径)	内 面	外 面					
D21	1	弥生 甕	-	-	-	ミガキ	横溝層状文(口縁止めの)	藤原波状文	昭和実測		
	1	弥生 鉢	(13.0)	-	(5.0)	ミガキ→赤色塗彩	刺彫	ミガキ→赤色塗彩	刺彫	昭和実測	XXII-4 検出層 XXII-6 U7 845 1607
	2	弥生 台付甕	(12.7)	-	(10.4)	ハケ目→ミガキ		ミガキ 横溝層状文(口縁止めの)	14本 横溝斜定文	昭和実測	測研 P13 U7 1655 XXII-6
	3	弥生 台付甕	-	(8.1)	(7.9)	杯部ハケ目→ミガキ	胴部コナナブ→刺彫ナブ	縦溝コナナブ→ナブ→杯部ミガキ		完全実測	測研 U7 432 1537 1540
	4	弥生 甕	(12.1)	-	(9.6)	ミガキ		横溝層状文 横溝波状文		昭和実測	測研 U7 1357 1362 1606 XXII-6 検出層
D48	1	弥生 高杯	(28.2)	-	(9.0)	ミガキ→赤色塗彩		ミガキ→赤色塗彩		昭和実測	内面刺彫甚しい
	2	弥生 高杯	(28.8)	-	(11.5)	ミガキ→赤色塗彩		ミガキ→赤色塗彩	突起あり	完全実測	U11 4002
	3	弥生 甕	-	8.8	(16.4)	ハケ目の残るナブ	横溝 刺彫	横溝ミガキ 底部ミガキ		完全実測	
	4	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		ナブ		断面実測	XVII-6
	5	弥生 甕	(14.7)	-	(14.3)	ミガキ		ミガキ 乱縄文		昭和実測	P264 U11 397 Z732 4420 4428 XVI-10 XVI-15
	6	弥生 甕	(21.0)	-	(9.6)	ミガキ		横溝層状文(口縁止めの)	横溝波状文	昭和実測	測研 U11 604
	7	弥生 甕	(18.2)	-	(10.6)	ミガキ		口縁ミガキ 口縁横溝周身 胴部乱縄文		昭和実測	U11 4473 XVI-15 XVII-11 SB011W13
	8	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		横溝層状文 横溝波状文 横溝斜走文		断面実測	U11 4439
	9	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		口縁上部乱縄文		断面実測	
	10	弥生 甕	-	5.9	(6.9)	ミガキ		胴部ミガキ 底部ハケ目の残るナブ		完全実測	測研 U11 4477 4480 4488 58011W13
D49	1	弥生 高杯	-	-	(9.0)	杯部ミガキ→赤色塗彩	胴部ハケ目ナブ	ミガキ→赤色塗彩		昭和実測	U11 688 979 4507 XIII-11-15 SB011W13
D50	1	弥生 甕	(24.0)	-	(9.6)	ミガキ→赤色塗彩		ミガキ→赤色塗彩		昭和実測	
	2	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		ミガキ→赤色塗彩	沈降 乱縄文	断面実測	
	3	弥生 甕	-	-	-	ハケ目の残るナブ	刺彫	ミガキ→赤色塗彩	沈降 乱縄文	断面実測	U11 3239-3237? 3608-3608-4254
	4	弥生 甕	16.0	-	(12.8)	ハケ目の残るナブ→ミガキ		ミガキ 横溝波状文		完全実測	M35XVI-10 XVI-6 U11 2176-2791? 3549-3814-3809-3010-3926-3801- 1386-3306-3931 SB011W12
	5	弥生 甕	(15.8)	-	(5.2)	ミガキ		横溝層状文 横溝波状文		昭和実測	U11 2299-2282-3756
	6	弥生 甕	(16.7)	-	(7.5)	ミガキ		横溝波状文 横溝層状文		昭和実測	U11 1313-1316-1302-1311 XVI-10 XVI-1902
	7	弥生 甕	-	(8.8)	(15.6)	ミガキ		ミガキ 横溝波状文		完全実測	U11 381-1430-2250-2260-2275- 2284-3276 SB011W12 XVI-19
	8	弥生 甕	-	4.4	(3.6)	ミガキ		胴部ハケ目ナブ→ミガキ 底部ミガキ		完全実測	
D51	1	弥生 甕	(25.8)	-	(11.7)	(ハケ目の残る) ナブ→ミガキ		ミガキ 沈降 横溝波状文		昭和実測	
	2	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		ミガキ 横溝横走平行縄文 ヘラ横溝下文		断面実測	
D52	1	弥生 甕	(5.7)	-	(3.6)	ナブ→ミガキ		口縁コナナブ→ナブ		昭和実測	
	2	弥生 甕	20.2	-	(9.2)	ミガキ		横溝波状文		昭和実測	
D65	1	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		ミガキ		断面実測	U11 1480 1519
	2	弥生 甕	-	(10.5)	(15.7)	ハケ目		ハケ目→ミガキ		昭和実測	検出層 D65 W76
D71	1	弥生 甕	-	-	-	ミガキ		横溝層状文 横溝波状文		断面実測	D67
	2	弥生 甕	(16.8)	-	(4.1)	ミガキ→赤色塗彩		ミガキ→赤色塗彩		昭和実測	
D85	1	弥生 甕	-	(10.8)	(10.8)	口縁ミガキ 胴部ハケ目		口縁ハケ目→ナブ 胴部ミガキ		昭和実測	測研
	1	弥生 高杯	-	-	(7.3)	杯部ミガキ→赤色塗彩	胴部ナブ	ミガキ→赤色塗彩		完全実測	
	2	弥生 甕	-	-	-	ハケ目→ミガキ		横溝層状文(口縁止めの)	横溝波状文	断面実測	M29X-25
	3	弥生 甕	-	-	-	刺彫		ハケ目・ミガキ 横溝横走平行縄文 ヘラ横溝下文		断面実測	M29X-25 X-28
4	弥生 甕	-	(11.2)	(10.2)	ハケ目		ミガキ		昭和実測	測研	
No. 器 種 素 材 最大径 最大幅 最大厚 重量 所 属 出土位置											
D81	4	磁石	花崗岩	8.9	7.4	6.3	872.94	正面と背面にすり面			



第79図 D87・88・98・99・100・102～104・109号上坑及び出土遺物実測図

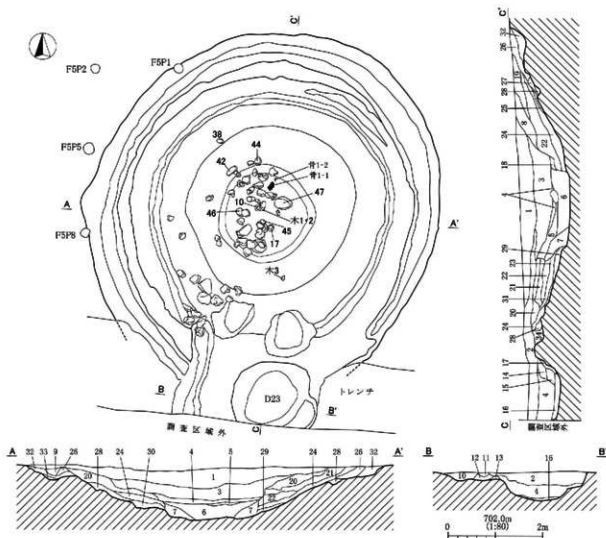


第80図 D105・106・118・136・146号土坑及び出土遺物実測図

第27表 D104・105・146・87号土坑出土遺物観察表

(cm)

土坑 No.	種別	形状	法 量			状 形 ・ 調 整 ・ 文 様		規定値() 残存値() 丸通(●)				
			口径(長)	前後(幅)	後幅(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置			
1094	1	卵生	表	(23.0)	-	24.0	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	河野溝文・ハナ邊横帯平行線文	完全実測	No1~8	
1095	1	卵生	鉢	(26.0)	-	26.0	ミガキ→赤色塗彩	ミガキ→赤色塗彩		面彩実測	No1~4 土ロ	
D118	1	卵生	表	(27.4)	-	(15.0)	ミガキ	ミガキ	ハナ横沈線	横線塗彩文	面彩実測	1・IV区ホリ方 XXII-5
	2	卵生	底	-	-	-	ハケ目→ミガキ	ミガキ	ハナ横沈線	横線塗彩文	断面実測	1・IV区
D136	1	卵生	底	-	-	11.6	(18.0)	ハケ目	横線ミガキ	底部ミガキ	完全実測	1区ホリ方 XXII-6 XV-25
	3	卵生	底	-	-	-	-	-	-	-	-	-
No.	器 種	素 材	最大径	最大幅	最大厚	重量	所 見		出 土 位 置			
187	1	瓶石	磁瓦片	(7.4)	(4.8)	(3.0)	(116.30)	上部欠損	瓦正数4	横直あり		

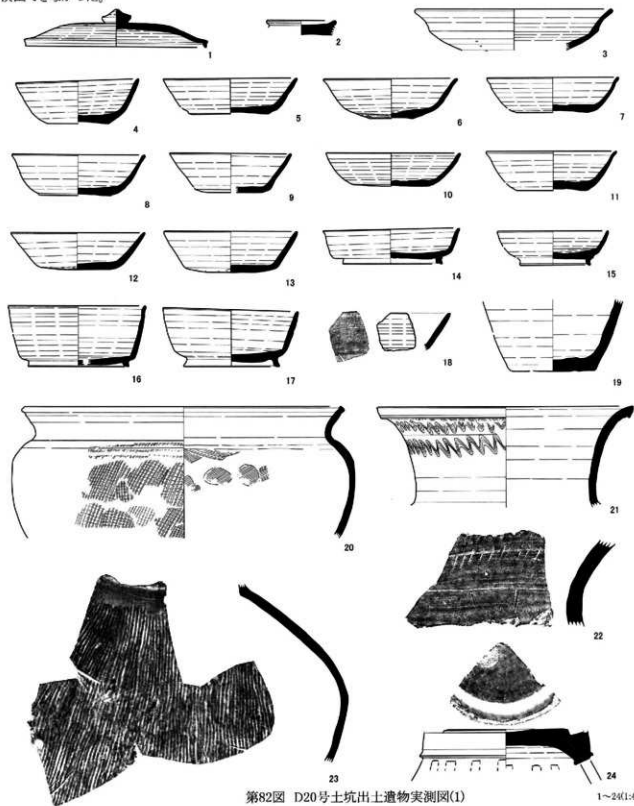


1. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強く、粘性やや弱い、砂・軽石多量に含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや強い、 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 凝色粒・砂多量に含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや強い、
軽石多量、炭化物少量、砂をブロック状に少量含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土、しまり強く、粘性強い、
6層の砂をまじった黄土質粘土層。
5. 明黄褐色土(10YR7/3) 砂土、しまり強い、6層ブロック少量含む。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土、しまり強く、粘性強い、砂をブロック状に少量含む。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強く、粘性強い、6層に砂多量含む。(粗砂)
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや弱い、砂多量、軽石少量含む。
9. 褐灰色土(10YR3/1) しまり・粘性やや弱い、軽石少量含む。
10. 黒褐色土(10YR3/1) 砂質土、しまりやや弱く、粘性弱い、軽石少量含む。
11. 黒灰色土(10YR4/1) 砂質土、しまりやや強く、粘性やや弱い、ローム少量含む。
12. 褐灰色土(10YR6/1) 砂質土、しまり強く、粘性弱い、
凝色土ブロック多量含む、25層と同く。
13. 褐灰色土(10YR4/1) 砂質土、しまりやや強く、粘性弱い、ローム少量含む。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、灰白色砂多量含む。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土、しまり強く、粘性強い、砂少量含む。
16. 灰黄褐色土(10YR6/1) しまり強く、粘性強い、
灰黄褐色土ブロック少量含む、($\phi 1\sim 5\text{cm}$)
17. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強く、粘性弱い、砂多量含む。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、砂多量含む。
19. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱く、粘性弱い、砂多量、炭化物少量含む。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱く、粘性弱い、
19層に $\phi 1\sim 2\text{cm}$ ロームブロック少量含む。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりやや弱く、粘性弱い、
19層に $\phi 1\sim 2\text{cm}$ ロームブロック・黒色土を多量に含む。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや弱い、
 $\phi 1\sim 5\text{cm}$ ロームブロック・ $\phi 1\sim 5\text{cm}$ 黒色土ブロック多量含む。
23. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性やや弱い、
22層のローム少量で、灰白色砂多量含む。
24. 黒褐色土(10YR3/1) 砂質土、しまり・粘性弱い、ローム少量含む。
25. 褐灰色土(10YR5/1) 砂、しまり弱い、細砂・ローム少量含む。
26. 明黄褐色土(10YR7/3) しまり強く、粘性やや弱い、
ロームに $\phi 1\sim 5\text{cm}$ 灰黄褐色土ブロック多量含む。
27. じぶ・黄褐色土(10YR5/3) しまりやや強く、粘性強い、砂多量に含む。
28. 褐灰色土(10YR6/1) しまり強く、粘性強い、
 $\phi 1\sim 10\text{mm}$ 黒色土ブロック多量含む。
29. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い、砂多量に含む。
30. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い、
29層に $\phi 1\sim 5\text{cm}$ のロームブロック多量含む。
31. 褐灰色土(10YR4/1) 砂質土、しまり・粘性弱い、軽石少量含む。
32. 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強く、粘性やや弱い、ローム少量含む。
33. 黒褐色土(10YR2/2) しまりやや強く、粘性やや弱い、32層にローム多量含む。
34. 黒褐色土(10YR2/2) しまり強く、粘性やや弱い、砂・ローム少量含む。

第81図 D20・23号土坑実測図

(6) D20・23号土坑

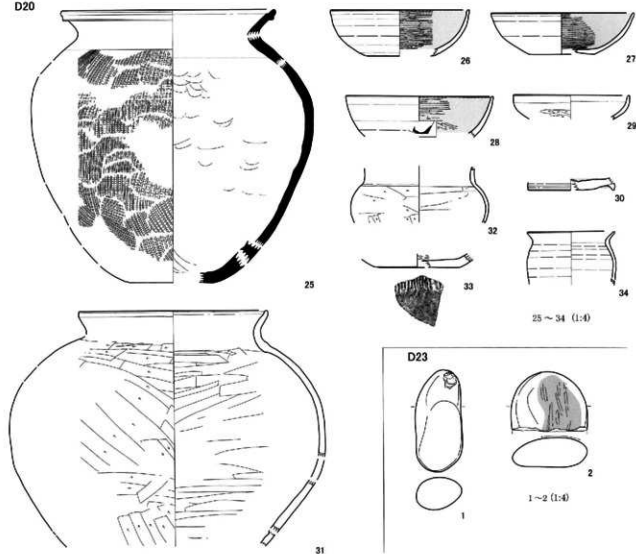
本址は調査区南側のXXIII-3・4・8・9Grに位置する。D23号土坑は当初、個別の遺構と考えたが、覆土の堆積状況から一連の遺構と捉え同一項で報告する。残存状態は南側の一部が調査区域外となり、D23号土坑の一部は検出できなかった。



第82図 D20号土坑出土遺物実測図(1)

1~24(1:0)

D20



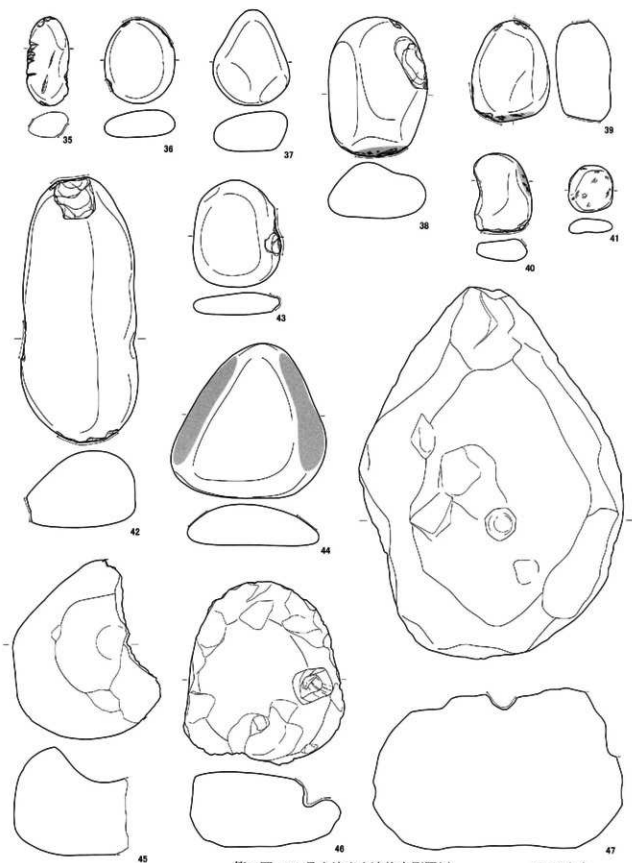
第83図 D20・23号土坑出土遺物実測図

南北の長軸方位はN-11°-Eを示す。形態はいずれの土坑も円形を基調として、南側に張り出状の掘り込みを持つ。D20号の規模は検出で南北8.27m、東西7.35m、深さ1.26mを測る。D23号は東西1.87m、南北が検出で1.41m、深さ0.66mを測る。本址はM25号溝状遺構と重複関係にあるが、本址の方が新しい。

本土坑の掘方は階段状の掘り込みを行い、一部には溝状の掘り込みを伴う。この溝は土坑内を全周せずに南側のD23号付近で途切れ、西側の溝は向きを変えて南に掘り進められている。また、本址の覆土堆積状況は1層から7層までは自然堆積の状況を示すが、セクションラインC-C'間の20～29層は人為的な埋め戻しのような堆積状況で、意図的なロームブロックの混入などが観察された(写真図版38-②参照)。中央の自然堆積部分の径は2.00～2.40mを測る。これらの堆積状況はいわゆる「井戸」掘削時の状況と似るが、土坑底面はすり鉢状で井戸特有の堅坑は確認されなかった。また、遺構完結後は常に0.40m程の水が湧いて溜まっていた。

本址からの出土遺物は非常に多く、8世紀代の須恵器を中心に自然礫や獣骨などが6層上面からまとまって出土した。しかし、須恵器環などは欠損品が多く、完全なものは少なかった。

上記したこれらの事から、本址の時期は8世紀代と考えられ、性格は井戸や祭祀遺構などが考えられる。しかし、溝を持つ段状の掘り込みや祭祀を思わせる遺物が無いことなど、いずれの用途にも根拠が弱い。いずれにしても佐久地域では類例の乏しい遺構であり、今後の研究進展に期待したい。



第84图 D20号土坑出土遗物实测图(2)

35~47 (1:4)

第28表 D20号土坑出土遺物観察表(1)

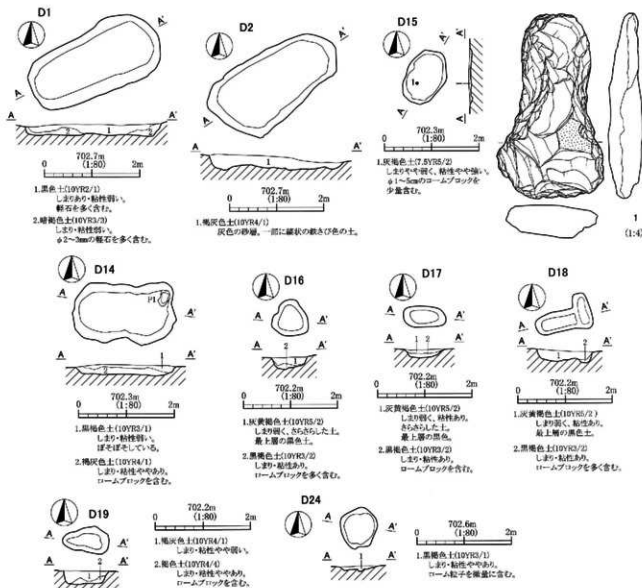
(cm)

No.	種別	形状	寸法			成形・製造・文様		鑑定()・保存()・位置()	
			口径(長)	底径(短)	高さ(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器 甕	(19.3)	3.0	つまみ 3.9	コクロナデ	コクロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ 貼付	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅱ区 Ⅱ区1~4層	
2	須恵器 甕	-	つまみ (7.4)	(1.0)	当て具痕→ヘラナデ	コクロナデ	回転実測	Ⅱ区1~4層	
3	須恵器 甕	(21.0)	-	(4.0)	コクロナデ	コクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区	
4	須恵器 杯	12.8	6.3	4.7	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り	完全実測	Ⅰ区 Ⅱ区 Ⅱ区1~4層 3層	
5	須恵器 杯	(14.2)	8.5	3.8	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り(右)	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅰ区 Ⅳ区 Ⅱ区1~2層	
6	須恵器 序	14.2	4.8	4.2	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り(右)→底部外面 ヘラ状工具によるナデ	完全実測	Ⅱ区	
7	須恵器 杯	(13.8)	7.6	3.7	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り(右)	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅳ区	
8	須恵器 杯	14.0	7.6	4.3	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り(右)	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅱ区1~2層	
9	須恵器 杯	12.9	(7.5)	4.2	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ	完全実測	Ⅱ区 Ⅱ区6~7層	
10	須恵器 杯	14.3	8.2	3.6	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅰ区	
11	須恵器 杯	(13.7)	7.3	4.2	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ	完全実測	Ⅱ区1~2層	
12	須恵器 杯	14.0	7.8	3.9	コクロナデ	コクロナデ→底部手持ヘラケズリ	完全実測 内外 面に火だすき有	Ⅱ区 Ⅱ区1~3層 Ⅱ区6~7層 Ⅲ Ⅲ*	
13	須恵器 杯	(14.2)	(9.8)	4.4	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ	回転実測	Ⅰ区 Ⅱ区1~4層	
14	須恵器 有台杯	14.5	(10.8)	3.8	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測 内面 に火だすき有	Ⅰ区 Ⅱ区1~3層 Ⅱ区1~4層 Ⅱ区1~2層 D23	
15	須恵器 有台杯	(11.7)	(7.8)	3.6	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ→高台貼付	完全実測 内面 に火だすき有	Ⅳ区	
16	須恵器 有台杯	(14.4)	10.6	8.4	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測	Ⅰ区	
17	須恵器 有台杯	14.4	10.2	8.2	コクロナデ	コクロナデ→底部回転未切り後回転ヘラケズリ→ 高台貼付	完全実測 外面 に自然輪付着	Ⅰ区	
18	須恵器 杯	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ→底部回転ヘラ切ナデ	破片実測 底部 にヘラ貼付有	Ⅰ区	
19	須恵器 甕	-	8.0	(7.8)	コクロナデ	コクロナデ→底部ナデ	完全実測 内外 面に自然輪付着	Ⅰ区	
20	須恵器 甕	(34.0)	-	(14.0)	コクロナデ→当て具痕残→高 ヘラナデ	コクロナデ→タタキ目→割コクロナデ	回転実測	Ⅱ区1~2層 Ⅱ区 Ⅲ区 Ⅳ区	
21	須恵器 甕	(27.2)	-	(10.7)	コクロナデ	コクロナデ→自然輪状文	回転実測 内外 面に自然輪付着	Ⅱ区2層 Ⅱ区6~7層	
22	須恵器 甕	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ→片点文	断面実測	Ⅱ区1~2層	
23	須恵器 甕	-	-	-	口縁コクロナデ 胴部当て具痕→ コクロナデ	口縁コクロナデ 胴部タタキ目	断面実測	Ⅰ区 Ⅱ区 Ⅱ区6~7層 ⅢIXV~25	
24	須恵器 円筒甕	-	-	(4.2)	コクロナデ	コクロナデ→滑し有	回転実測	Ⅰ区	
25	須恵器 甕	(32.7)	(10.6)	29.2	胴→底部当て具痕 ナデ→口縁 コクロナデ	胴部タタキ目→口縁コクロナデ	完全実測	Ⅰ区 Ⅱ区 Ⅲ区 Ⅲ区1~2層 Ⅲ区1~2層 Ⅲ区3層 Ⅲ区6~7 層 Ⅳ区 Ⅳ区6層 Ⅲ区*	
26	土師器 杯	(14.6)	(7.4)	4.9	ミガキ→黒色処理	コクロナデ	回転実測	Ⅱ区1~2層 D23	
27	土師器 杯	(15.0)	(6.8)	4.4	ミガキ→黒色処理	コクロナデ→底部手持ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区 Ⅱ区 Ⅲ区 Ⅲ区1~3層 Ⅲ区1~2層	
28	土師器 杯	(15.6)	-	4.3	ミガキ→黒色処理	コクロナデ	回転実測 製巻あり	Ⅱ区1~2層 Ⅱ区6~7層	
29	土師器 杯	(12.2)	(11.3)	(2.5)	コクロナデ	口縁コクロナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区	
30	土師器 有台杯	-	(9.2)	(1.3)	ミガキ→黒色処理	底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	Ⅱ区1~2層 Ⅱ区6~7層	
31	土師器 甕	(20.1)	-	(25.0)	口縁コクロナデ→胴部ヘラナデ	口縁コクロナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ区1~2層 Ⅳ区 D23 Ⅱ区6~7層	
32	土師器 甕	-	-	(6.0)	胴部ヘラナデ→口縁コクロナデ	胴部ヘラケズリ→口縁コクロナデ	回転実測	Ⅱ区1~2層	
33	土師器 甕	-	(9.9)	(1.5)	ナデ ミガキ	胴部タタキ目 底部ナデ	回転実測	3層	
34	土師器 ロタコ甕	9.2	-	(5.7)	コクロナデ	コクロナデ	完全実測	Ⅱ区 Ⅱ区1~3層	
No.	品名	形状	最大径	最大径	最大径	重量	所 属	出土位置	
1	磁石	硬質砂岩	10.8	8.0	3.5	262.85	上層部に飛行痕		
2	磁石	輝石安山岩	(6.4)	(8.1)	(3.2)	298.43	正層にすり面 浅い溝痕あり		

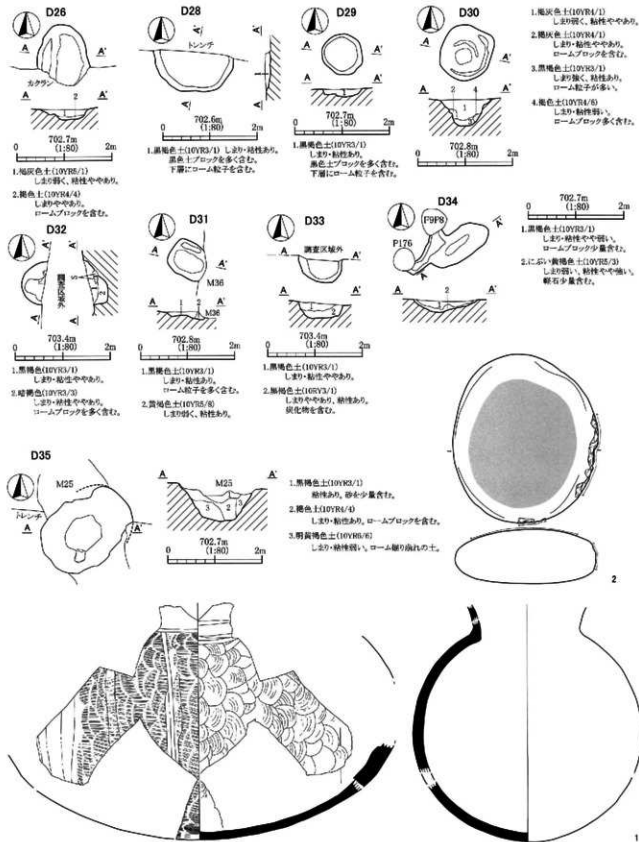
第29表 D20号土坑出土遺物観察表(2)

(cm)

No	器種	素材	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
35	磁び?	黒粒砂岩	9.5	4.5	2.7	136.10	左側に梨み状の使用痕 右側は不詳	1~4層
36	磨石	輝石安山岩	9.0	7.4	2.9	286.95	縁辺に磨打痕	7層
37	?	輝石安山岩	19.2	8.1	4.2	472.50		Ⅲ区1~3層
38	磨-磨石	花崗岩	14.8	10.6	6.7	1430.00	下側にすり面 下隅部と右側に磨打痕	3層
39	磨-磨石	輝石安山岩	11.0	8.1	5.9	719.25	下側に縦溝なすり面 端部に磨打痕	7層
40	磨-磨石	石英安山岩	8.3	6.1	2.4	187.80	右側にすり面 下端部に磨打痕	Ⅲ区6~7層
41	磨石製品	輝石	5.0	4.8	1.7	32.03	金等にすり	Ⅳ区
42	磨石	輝石安山岩	28.1	12.3	8.2	3946.00	上下縁部と左側に磨打痕	
43	磨石	泥質砂岩	11.3	9.4	2.4	351.26	右側に磨打痕	1~4層
44	磨石	花崗岩	16.5	16.4	4.3	1700.00	正面左右にすり面	
45	磨石	角閃石 安山岩	(19.0)	(15.6)	高さ (13.7)	(3790)	磨径 (10.6) 磨さ (5.0)	
46	磨石製品	輝石	19.4	17.1	8.1	1094.56	出磨さ 4.6 磨さ 3.4 磨さ 1.9 正面と左側にすり 正面に使用痕と思われる凹	3層
47	台石	輝石安山岩	39.6	27.8	高さ 17.3	21570.00	磨径 3.5×3.2 磨さ 1.4 正面が使用面、面あり	

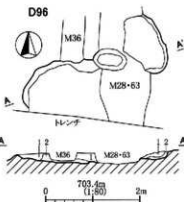
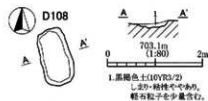
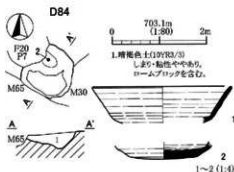
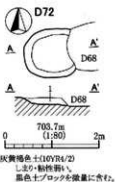
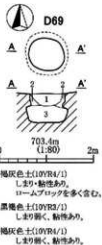
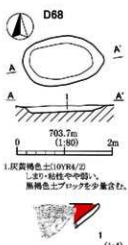
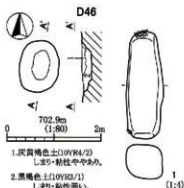
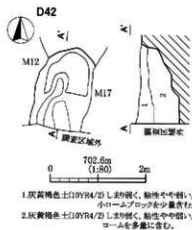


第85図 D1・2・14~19・24号土坑及び出土遺物実測図

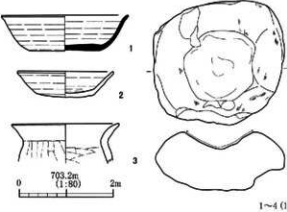
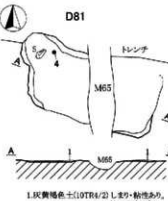


第86図 D26・28～35号土坑及び出土遺物実測図

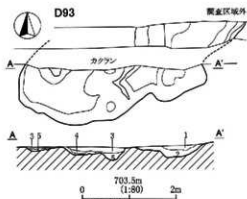
1~2:1:0



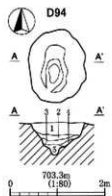
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い、軽石粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり、ローム粒子を多く含む。



第87図 D42・46・67～69・72・80・81・84・96・97・108号土坑及び出土遺物実測図

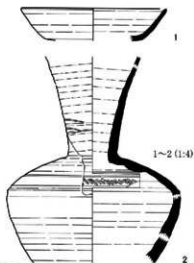


- 1.黒褐色土(D9YR3/1)
しまり弱く、粘性やや強い、砂少量含む。
- 2.黒褐色土(D9YR3/1)
しまり・粘性やや弱い、ロームブロック少量含む。
- 3.黒褐色土(D9YR3/2)
しまりやや弱く、粘性弱い、砂少量含む。
ロームブロック少量含む。
- 4.褐色土(D9YR4/1)
しまり・粘性やや弱い、砂少なめに多量含む。
- 5.灰黄色褐色土(D9YR5/2)
しまりやや弱く、粘性弱い、褐色土ブロック少量含む。



- 1.褐色土(D9YR4/1)
しまりやや弱く、粘性やや弱い、ロームブロック少量含む。
- 2.褐色土(D9YR4/1)
しまりやや弱く、粘性やや弱い、ロームブロックを多量に含む。
- 3.にじみ黄褐色土(D9YR6/4)
しまりやや弱く、粘性弱い、黒褐色土ブロックを少量含む。

- 4.黒褐色土(D9YR3/1)
しまり弱く、粘性やや強い、ロームを少量含む。
- 5.灰黄色褐色土(D9YR5/1)
しまり弱く、粘性やや弱い、ロームブロックを多量に含む。



第88図 D93・94号土坑及び出土遺物実測図

第30表 D35・68・81・94・84・15・46土坑出土遺物観察表

(cm)

No.	種類	形状	寸法			内容	外形	指定国() 物産() 式部()	備考	出土位置	
			口径(横)	底径(縦)	高さ(深)						
D35	1	煎茶鉢	-	-	(25.3)	胴一底部まで片板一口縁(ロクロナゲ)ヨコナゲ	胴一底部タキヨロ口頸部を接合しヨコナゲ	完全未掘	D35	出土位置	
D68	1	茶生	-	-	-	ミガキ一色色塗部	ミガキ 磨擦放火文	新田米掘	D35	II区1-1層	
D81	1	煎茶鉢	9.8	(7.4)	3.8	ロクロナゲ	ロクロナゲ→底部手持ちヘラケズリ	田代米掘	X-20	X1-6	
	2	土師器?	灯形皿	10.3	6.1	2.8	ロクロナゲ	ロクロナゲ→底部削ヘフ切り	完全未掘	X1-6	
	3	土師器	壺	(11.4)	-	4.2	口縁ヨコナゲ→胴部ナゲ	口縁ヨコナゲ→胴部ナゲ	田代米掘	F9-F3	
D84	1	煎茶鉢	9.8	(7.1)	(9.9)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	田代米掘			
	2	煎茶鉢	9.8	-	(7.1)	(4.8)	ロクロナゲ 自然磨擦付	ロクロナゲ→底部削ヘラ削り後ナゲ	田代米掘		
D94	1	煎茶鉢	9.8	(10.2)	(9.4)	ロクロナゲ	ロクロナゲ→底部削ヘラケズリ	田代米掘	内面	に火だすき有	
	2	煎茶鉢	壺	-	-	(21.9)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	完全未掘	M11XIV-6 M13 M20 M5IXV-25	
No.	種類	形状	最大径	最大径	最大径	重量	所	用	出土位置		
D35	1	打製石斧	厚切安山岩	19.7	11.2	3.4	722.73				
D35	2	磨・敲石	厚切安山岩	18.0	15.2	5.8	2160.90	正面にすり面 縁辺に磨打痕			
D46	1	敲石	メロンフェリス	11.5	4.6	3.7	261.28	上下端部に磨打痕			
D61	4	面石	軽石	13.3	14	高さ 7.2	727.22	厚径 7.4 削深 1.8 すり加工あり			

(7) D93号土坑

本址は調査区北西端のV-15Grに位置する。北側は調査区外となり土坑の全容は不明であるが、形態は不整形である。本址はM74号溝状遺構より新しい。長軸方位は北東を向く。遺構の底面は凹凸が激しく、深さは0.38m内外を測る。覆土は自然堆積であるが、砂を少量含む、しまりの弱い土である。本址からの出土遺物は無かった。

本址の北側部分は、平成17.18年度に市道建設により発掘調査が行われ、本址の北側にはTa2号堅穴状遺構が存在する。D93号土坑とTa2号堅穴状遺構は各々の検出位置より同一遺構と考えられる。また、Ta2号堅穴状遺構も出土遺物が無く、帰属時期は不明とされている。しかし、Ta2号堅穴状遺構の北側には同一形態のTa1号堅穴状遺構が存在し、出土遺物から奈良時代前半に比定されている。これらの遺構の特徴は、本跡跡のTa2.3号堅穴状遺構と形態や出土遺物が非常に似ることから同一の性格・所産時期が推定される。

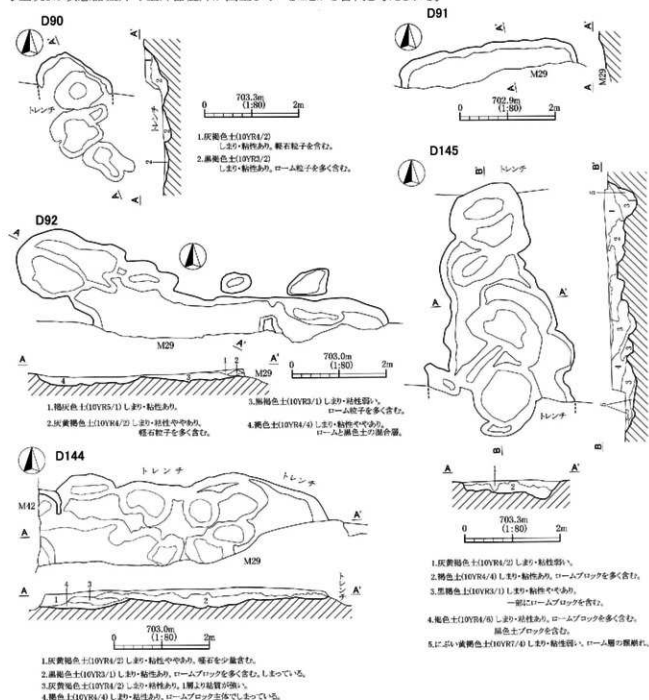
このことから、検出位置の制約からD93号土坑は、土坑として報告したが、先に述べた堅穴状遺構の性格を有する遺構と考えられ、所産時期も古代と考えたい。

(8) D90 ~ 92・144・145号土坑

本土坑群は調査区中央部のX-17~24Grに位置する。これら土坑群はいずれも形態が不整形で、掘り方が一定ではなく、土坑底面も凹凸が激しいことを特徴とする。代表的な例としてはD145号土坑が挙げられる。

本址は南北方向に長軸を持つ土坑であるが、底面の形状を見るといくつかの円形の土坑を掘り込んだ結果がこのような形状になったと考えられる。また覆土堆積を観察すると南から北に掘り進み、掘った土は前の掘り込み内に掻き出している状況が観察できる。

これらのことから、これら土坑群はいわゆる「粘土探掘坑」と呼ばれるものであると考える。出土遺物はD144・145号土坑より須恵器蓋片や土師器壺片が出土していることから古代と考えられる。



第89図 D90~92・144・145号土坑実測図

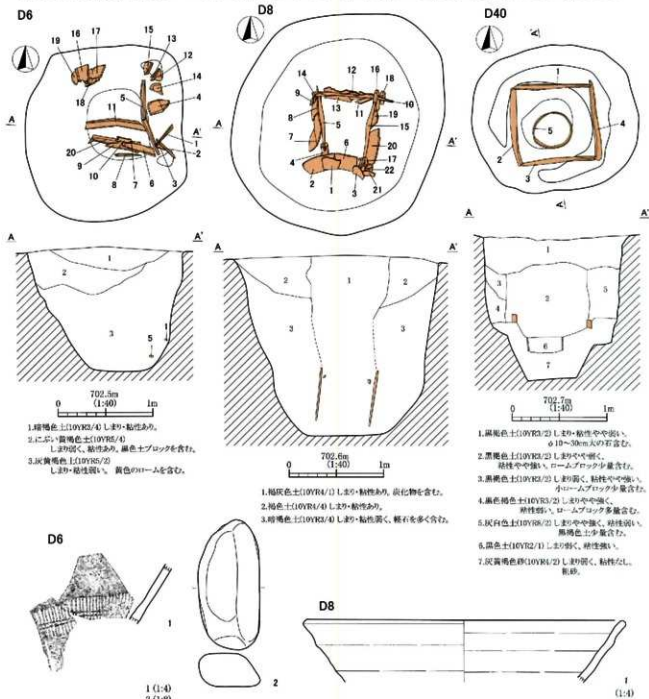
ここでは、中世の所産と考えられる井戸址を集成した。木杵等が残るものに関しては1/40で記載した。

(9) D6号土坑

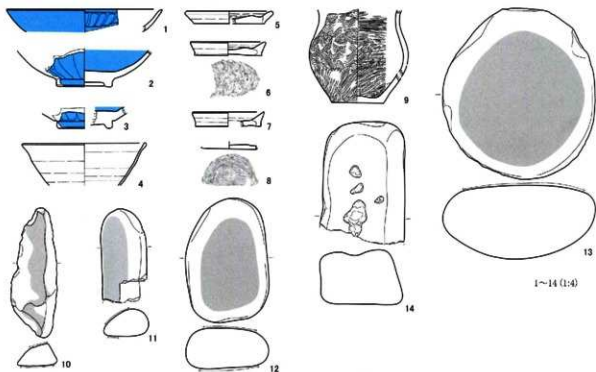
本址は調査区東側のXX-1Grに位置する。形態は方形で、木杵と考えられる木製品が底面より出土した。規模は、長軸2.07mで深さ1.29mを測る。底面はローム層まで掘り込んでいた。出土した常滑甕片はM1号溝状遺構と接合関係にある。

(10) D8号土坑

本址は調査区東側のXX-11Grに位置する。形態は方形で、井戸杵が底面より出土した。規模は、長軸2.52mで深さ1.93mを測る。底面はローム層まで掘り込んでいた。出土遺物は13世紀代の尾張系握ね鉢が出土した。



第90図 D6・8・40号土坑及び出土遺物実測図



第91図 D9号土坑出土遺物実測図

第31表 D6・8・9号土坑出土遺物観察表

(cm)

No.	種類	種類	法量			成形・磨製・文様		規定径() 残存径() 丸底()	
			口径(底)	底径(幅)	底厚(深)	内面	外面	肩 帯 ・ 出土位置	
D6	1	陶器	黄	-	-	-	写て具柄あり→ロクロナゾ	タタキ目	断面実測 内面に自然釉付着 粘土区 残存
D8	1	灰土質	緑お赤	(34.0)	-	(6.7)	ロクロナゾ	ロクロナゾ	断面実測 13C前半 磨製
D9	1	青磁	黒 漆弁 文あり	(18.3)	-	(2.4)	旋輪	旋輪	断面実測 13C 龍泉窯
	2	青磁	漆弁文焼	-	(5.8)	(2.9)	旋輪	旋輪	断面実測 13C 龍泉窯
	3	青磁	漆弁文焼	-	(5.8)	(2.2)	旋輪	旋輪	断面実測 13C 龍泉窯
	4	黒土質	山形焼	(13.0)	-	(4.0)	ロクロナゾ 自然釉付着	ロクロナゾ 自然釉付着	断面実測 13C後半 東遺
	5	土師質	かわらけ	(9.4)	(7.5)	1.3	ロクロナゾ	ロクロナゾ→底部糸切り	断面実測
	6	土師質	かわらけ	(8.0)	(7.2)	1.5	ロクロナゾ	ロクロナゾ→底部糸切り後ナゾ	断面実測
	7	土師質	かわらけ	(7.7)	(7.0)	1.5	ロクロナゾ	ロクロナゾ→底部糸切り	断面実測
	8	土師質	かわらけ	-	5.8	(0.3)	ロクロナゾ	底部糸切り	断面実測
	9	赤土	黄	-	5.5	(16.0)	ヒダキ	胴部底部ヒダキ 磨製成状文	完全実測 肩下層
No.	種 類	素 材	最大径	最大幅	最大厚	重量	所 見		出土位置
D6	2	磁石石	輝石安山岩	27.9	13.1	7.5	4330.09	磁石あり 上地面を砕き蒸化	
D9	10	礫石	硬質砂岩	13.8	4.9	2.7	200.80	正面にすり面	井戸内
	11	礫石	安山岩	(13.0)	(4.8)	(2.6)	(226.27)	下部欠損 正面にすり面	
	12	礫石	輝石安山岩	13.2	8.9	4.3	903.75	正面にすり面	
	13	礫石	輝石安山岩	18.3	18.2	7.8	2916.00	正面にすり面	井戸内最下層
	14	礫石	花崗岩	(13.0)	(9.0)	(6.3)	(1200.67)	下部欠損 正面に使用痕	

(11) D40号土坑

本址は調査区中央のX I-22・23Grに位置する。形態は方形で、木枠と考えられる木組と中央に桶が据え付けられた状態で出土した。覆土の3~5層は埋戻しの土である。樹種については第V章を参照。規模は、長軸1.77mで深さ1.68mを測る。